

---

# ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

浦波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜ハルケギニア統一に向けて〜

### 【Nコード】

N6834X

### 【作者名】

浦波

### 【あらすじ】

ゼロ魔世界の貧乏貴族に憑依した北郷。

環境は最悪だが彼は全く気にすることなく、ハルケギニア統一を目指す。

自分のために。

## 1 憑依（前書き）

この小説はアンチものです。

原作キャラでも関係なく死にますし、生まれない可能性も高いです。  
この主人公は究極の自己中心的性格で外道な事も普通にします。

そいった設定が嫌いな方は読まない事をお勧めします。

## 1 憑依

気付いたらまた子供に戻ってました。

「……は……またか」

もう既に慣れたので別に焦りもしなかった。

俺の名前は北郷一刀。

もう説明するのは飽きたから詳しい事は前作を読んでくれ。

俺はもう世界を3つ体験している。

一つ目は普通の世界、生まれ育った世界でクソみたいな人生だった。

2つ目は恋姫の世界。

原作キャラをほとんど皆殺しにして超大国を築いた。

3つ目は戦国時代。

超マイナー武将の肝付兼続に憑依して日本統一の後に世界に進出。

世界の半分を支配した。

そして新たに4つ目はこの世界。

ここまで世界を渡り歩いたのは俺ぐらいだと思う。

にしても今回はガキからのスタートか。

前回の世界では確か西暦2000年ぐらいまで生きてたな。  
2000年になってから急激に老いだして間もなく死んだ。  
遂に寿命が尽きたんだろう。

死因は老衰だったからまあ幸せな死に方かな？

俺の死後、日本がどうなったかは知らないがどうでも良い。

一応晩年には俺がいなくなっても問題無い程の生産能力を手に入れたし、優秀な官僚達がいたからしばらくは保つ筈。

それからは新しい世代が考えれば良い。

500年ぐらい国の発展に貢献したんだ、誰にも文句は言わせない。

前の世界のことはもう良いや。

大事な今は今だからな。

さて、まずは環境のチェックだが。

周囲は森や湖がある自然豊かな環境だが、湖には小さな船着き場や手漕ぎの木製ボートがあることから多分庭園かな？

ということはこの体の持ち主は身分が高い可能性がある。

ただ単純に公園の可能性もあるがな。

しかし遠くの方にデカイ屋敷みたいなのが見えるから庭園の可能性の方が高い。

次に俺の体は背丈や手足の大きさから3歳ぐらいと思われる。

服装は上等な素材だし、恐らく高いと思われる装飾品も身に付けている。

服装のセンスは中世ヨーロッパに近く、文明もそれぐらいだろう。湖に自分の姿を映してみると、そこには茶髪にブラウンっぽい黒眼で顔つきは西欧系の子供がいた。

顔のレベルはそこそこ高いと思うが、それは日本人から見たら高いと思うレベルで、ヨーロッパの中では多分普通ぐらい。

少なくとも凄いイケメンでは無い。

映画で言えば主人公には絶対なれない、エキストラが精々だろう。まあいいさ。

別に顔にこだわりは無い。

元々は大したことが無かったのだし、むしろ前よりは良くなったのだから文句は無い。

それより重要なのは能力だ。

俺には特典なのか呪いなのか分からないが、ある特殊能力があった。それはコピー。

物体ならあらゆる物を無限に複製出来た。

この能力を授けたのは神なのか悪魔なのかは未だに分からないが、これがあったからこそ生きてこれた。

だから能力は何よりも大事なのだ。

しばらく調べた結果、この世界でもコピー能力はあったし、特に変わりも無かった。

それと、前の世界同様、前回得た知識は継承されてるし、紙媒体の物ならコピーで出せた。

この世界は恐らく中世ヨーロッパ時代だから大いに役に立つだろう。

さて、そろそろこの世界について探ろう。

幸いにもこの体の持ち主はそれなりに裕福な家に住んでるらしいし、時代的に多分貴族階級なんだろう。

流石に中世ヨーロッパと思われる世界で平民からのしあがるのはかなりの苦勞だからな。

ガキっぽい演技をしながら情報を得れば良い。

それに何か後ろから使用人っぽい奴等が歩いて来ているから丁度良い。

出来れば現実世界に近いと良いなあ…。

## 2 悲惨な環境

迎えに来た使用人達に演技をしながら情報を探った所、信じたくない事実が発覚しました。

ここゼロ魔らしいです。

マジかよ……。

ゼロ魔って魔法と貴族の素敵世界じゃねえか。

今まで様々な世界をいったけど、魔法世界は初めてだ。

大丈夫か？ 俺？

ちなみに俺の名前はハンス・フォン・ルドルフ。

ゲルマニアの子爵家の次男らしい。

子爵かよ…。

また地味な階級だな。

父は火のトリアングル、母は土のラインの微妙な一族。

ヤベエ、才能まで微妙だ。

ちなみに長男は13歳でラインになっているのでルドルフ家の期待の星らしい。

だから両親共に長男に期待しているから次男の俺にはあんまり関心無いようだ。

俺になってからも大した会話をしてないし、食事の席でも俺には目もくれずに長男に話しかけている。

普通のカキなら泣いてるぞ？

3歳って一番愛情が必要な年齢だと思うし。

まあ俺には好都合だな。

おかげで俺に変わったのに両親は全く気付かない。

長男も俺にあんまり愛情を感じてないらしい。

すれ違っても無視だし、こっちが話しかけても短い返答だけで直ぐに去る。

マジでこの体の持ち主不憫。

家族からは愛情を全く浴びれてないし、両親の態度からか使用人もあんまり付けられていない。

一応最低限はいるがそいつ等の態度も仕事だからと付き合ってるだけ。

これが現代なら下手すりゃ自殺してるぜ？

絶対マトモな性格には育たねえ。

多分憂さを晴らすために平民に当たる大人になるだろう。

乗っ取っておいで何だが同情するよ。

まあ良いや。

既に消えてしまった人間だし、俺にとっては逆に好都合な環境だから文句無い。

普通に食事は出るし、自室もある、3歳なのに小遣いも出る。特に問題無い。

唯一不満なのは杖を支給されないことだ。

流石に3歳のガキではまだ魔法を習うには早すぎる。

長男だったらまだしも、ロクに注目されていない俺では相手にもされないだろう。

更に不満なのは知識を得られにくい事だ。

3歳で本を読むには早すぎるから本の閲覧許可が降りない。

子爵家と言えどそれなりの数の蔵書はあるが、マンガみたいに3歳児でも分かるような簡単な物は無く、活字だらけの内容が難しいので俺が読むのはおかしい。

製紙技術や印刷技術が低いこの世界では本は貴重品だからしっかり管理されていて読めない。

他のオリ主達ならそんな事は気にせず親にせがみ、見事に読んで天才とか祭り上げられるが、俺は注目なんかされたくないからしない。注目されれば間違いなく嫉妬や警戒心を生み、排除に動く。人間では制御出来ない感情だからどうしようもない。少なくともまだ大々的に動く時ではない、今はちよつと賢い3歳児を演じるしかない。

唯一俺に許される勉強は礼儀作法だけだ。

僅か3歳に理解出来るのかよ？ と疑問だが、腐っても貴族だから執事にみっちり教えられる。

しかしこれが面倒くさい。

本当なら一度教えられれば理解出来るのだが、それでは賢い子と思われる。われてしまうので何回か分からないフリをしたり、飽きたフリをする。

飽きたフリはフリじゃないがな。

だってこれでも皇帝やってたんだぜ？

礼儀作法なんて一通り覚えたから今更復習するなんて面倒なだけだ。

しばらくはこれが続くな。

礼儀作法や貴族らしい話し方、貴族としての態度、平民への接し方等の洗脳教育だ。

内の両親も他の貴族同様、平民蔑視の感情が強く、無礼討ちやとんでもない税金をかけるなど、いかにもなバカ貴族だ。

税金を上げるから経済が発達せず、税収入が減るとというのが理解出来ないのか？

家庭教師からも平民をつけ上がらせないために度々締め付けるべきとか教えられるけど、それが間違いとは思ってもないらしい。

こんな無能に習うのは屈辱的だが今は無力な子供だ。

周囲の環境に溶け込むために貴族の子供らしく振る舞おう。

少なくとも魔法を手に入れるまでは。

ちなみに現時点でコピー出来た魔法はクソ兄貴の魔法練習を見て覚えたレビティション（浮遊）、ロック、アンロック、ライト、ディテクトマジック（探知）などコモン魔法や、発火、ファイヤーボール等の攻撃魔法も覚えた。

ちなみに兄貴の系統は火だ。

だから覚えたのも火が中心。

しかし才能溢れるお兄様は素晴らしい事に土系統も使える。だから練金や固定化も見せてもらった（覗き見）。

これで良い。

ていうかゼロ魔で最強ってこの2つじゃね？

基本魔法の癖に原子配列を自由自在に変えられる魔法と、こういう原理が全く分からないが腐敗や傷を防止する魔法。

マジこれ以上のチートは無い。

これに比べたら虚無なんか無価値だ。

何でこれをもっと有効活用しないのか理解不能だ。

練金を使えば簡単に新物質が作れるし、固定化使えば何千年も変質を防げる。

この2つを有効的に使えば軽く現実世界を凌駕出来る。

なのにこの世界では練金で鉄屑を作り、固定化では食品の腐敗や建物の保全に使うぐらい。

意味分かんない。

現実世界の科学者が知ったらぶちギレそうなくらい宝の持ち腐れだ。

でもこんなに便利な魔法をコピー出来ても使えない。

何せまだ杖すら握った事が無い。

バレれば先住魔法が異端扱い受けるだろうし、100%他の貴族や皇帝に目を付けられて二次小説みたいに利用されるのがオチだ。

利用し合うのはまだ良いが、一方的に利用されるのは虫酸が走る。  
だから今は待つ時だ。  
いずれ起こす時のために今はバカなガキを演じる。

### 3 現実 is 厳しい

この世界に come 2 年経ち、5 歳になった。

新たな新事実が発覚した。

どうやらこの世界は原作の 30 年ぐらい前の世界らしい。

色々調べたらトリスティンの国王が生きていてアンリエッタもまだ生まれてないし、ガリアの王もジョゼフじゃない。

これは良いニュースだ。

何せ原作の年では虚無やレコン・キスタ、ジョゼフ、ロマリア、エルフ等の面倒事が一気に勢ぞろいする。

明らかに異常過ぎる程にイベントが目白押しだ。

もしもこんな時代に生まれたら何もせずに原作が去るのを待つしか無かった。

とにかくこれで行動方針は決定した。

原作みたいに虚無が揃う前に、少なくとも虚無の使い手を生け捕るか最悪殺さなくてはならない。

殺すとまた別の奴等が虚無に目覚める事になるが、少なくとも原作の奴等よりかはマシだ。

特に警戒すべきなのは今はまだ王子だがジョゼフ、そしてロマリアのヴィットーリオだ。

ヴィットーリオはロマリア教皇という地位以外は大した危険性はないが、ジョゼフは虚無が無くてモバキヤラだ。

アイツ魔法なんか使えなくても充分チートキヤラだし、オマケにそこに虚無とニョズニトニルン、エルフが付くからまず勝てない。

アイツ間違はなく最強だよ。

むしろ一番主人公にふさわしいかも知れん。

だからジョゼフは早く殺さなくてはいけない。

出来るなら戴冠前に。

それなら虚無に目覚めていないし、継承権争いで弱小だったから守りも少ない。

殺しても継承権争いで暗殺されたと誤魔化しやすいしな。

ジョゼフが死ねば自動的に王位は弟のシャルルが引き継ぐ事になる。

シャルルは魔法は天才的だが王としては微妙だろう。

ジョゼフに簡単に暗殺された事から明らかだ。

シャルルが王位につけばガリアもそこまで恐る必要は無くなる。

精々が諜報組織を警戒する程度で良い。

元素の兄弟とか面倒な奴等もいるが、ジョゼフに比べたら簡単だ。

どんなに強くても所詮は個人。

人間は群れなきや弱い生き物だ。

さて、未来の話も良いが今は現在の話に移ろう。

5歳になったんだからそろそろ杖をねだる。

優秀なお兄様も5歳で杖を手に入れたらしいし、それに倣えば俺が杖を欲しても不思議は無い。

そう思った俺は滅多に出来ない親父の執務室の前に来てノックした。

「…誰だ？」

「ハンスです。お話したい事があります」

「……入れ」

そう言われたのでドアを開けた。

「失礼します」

部屋にいた親父は執務中なのか書類を見たままで俺を見ようともしない。

「何のようだ？」

話しかけるがやはり書類から顔は上げない。

「お仕事中失礼します。

私も5歳になりました。

ですから兄上同様魔法を覚えたいので杖が欲しいのです。

出来れば教師も一緒に」

親子の会話とは思えないな。

上司と部下の会話だ。

「……よからう。

杖と教師は用意する。

もう用は無いのなら下がれ」

「はい、ありがとうございます。

失礼しました」

礼をした後、部屋を出た。

ちなみに親父は終始一度も俺を見なかった。

あそこまで露骨だと逆に關心するな。

まるで自分の子と違っていないような態度だな。

もしかして俺って愛人の子か？

それとも養子？

……まあ良いや。

別に親子の情なんかいらないし。

逆に俺にとっては好都合過ぎて嬉しいぐらいだ。

杖は手に入るし、一応指導員もくれるらしい。

もしかしたらまだコピーしてない魔法を見せてくれるかも知れない。

とりあえずは杖と教師を待つか。

数日後、使用人経由で杖を渡された。

材質はそこそこでやはり期待はしてなくても自分の息子に貧相な杖

を持たせる訳にはいかないからか上等な物だ。  
別に杖なんてそこの木の棒でも良いからどうでも良いけどね。

2週間程で杖と契約出来た。

にしてもこの契約は面倒だった。

この2週間杖を手放しちやいけないらしいので食事やトイレ、風呂、睡眠中でも必ず触ってるか身に付けなきゃいけなかった。

ハリーポッターみたいに一発で決まれば良いのに。

契約が出来た頃、俺の魔法指導員も来た。

「初めましてハンス様。

今日からハンス様の魔法を指導するマイヤーです。

ちなみに系統は風のラインです」

マイヤーは下級貴族でルドルフ家に仕えてるメイジらしい。

ここでもお兄様との差が出たな。

兄貴の指導メイジは火のトライアングルだったらしい。

まあそいつは今も兄貴の指導員らしいので俺は別のような。

普通ならこの露骨な差別に憤慨するだろうが俺は歓喜した。

何故なら風のメイジは初めて見たからだ。

ウチの家系は土や火が中心だから風系統の魔法を見る機会が無かった。

これで風もコピー出来る。

「ラインという事はもう1系統使える筈だな？」

「はい、私は風と水のラインです」

最高だ。

まるで誰かから思し召しされたかのような好都合。

でもこれ逆に考えればヒデエよな？

だってさっきも言ったがウチの家系は火と土。

つまり風と水は遠いから覚えにくい系統だ。

もしかしてこれも嫌がらせか？

まあ良いや。

俺は系統どころか多分エルフの精霊魔法も使えるだろうし。

「では先ずはお前の腕前を見せて貰えるかな？  
教えを請う前に教師の実力が知りたいのでな」

俺がそう言つとマイヤーは少し不服そうな顔をするが、雇主の息子だから顔を戻し

「かしこまりました。

何をお見せしましょう？」

リクエストを聞いてきた。

「では先ずは基本から一通り見せてくれ」

そう言われたのでマイヤーは風の基本のウィンド（風）、ストーム（竜巻）、フライ（飛行）を見せた。

勿論コピー出来た。

「よし、では次に水系統の基本だ」

マイヤーは言われた通りに水系統の基本であるコンデンセーション（凝縮）、ヒーリング（癒し）、ウォーターシールドを見せた。

「よし、次は応用技や自分が自身がある魔法を見せてくれ。

これで終わりだ」

マイヤーは生徒に舐められないようにするためかウィンド・ブレイク、エア・ハンマー、エア・ニードル、エア・カッター等の風の攻撃魔法で周りの木々にぶつけてなぎ倒すのを見せつけた。

大人気ないねえ。

まあこつちとしては攻撃力が高い魔法やフライやヒーリングみたいな便利な魔法をコピー出来たから別に良いけど。

「分かったありがとう。

どうやら君は素晴らしいメイジのようだ。

これから指導をよろしく頼む」

俺の合格判定にホッとしたのかマイヤーは「ありがとうございます」と言つ。

俺に不採用を叩きつけられたらかなりの屈辱だし、収入源の一つ失うことになるからな。

これで俺への教師代が入る事になるから少し嬉しそう。

先ずは俺が何の系統が調べた結果、土系統だと判明。

やっぱりこの教師はあんまり役には立たないと分かった。

まあ良いや。

コイツの魔法は見せてもらったからもう用無しだし。

とりあえず土系統と分かったから錬金をして問題無い事が分かった。

どこぞのオリ主みたいにいきなりゴールドなんか錬金せず、精々が青銅か不純物だらけの鉄ぐらいだ。

と言っても今すぐ青銅なんか錬金すれば才能ありと見られるからしばらくは自分自身の魔法の才能で頑張る。

自分の実力を上げるのも悪くないしな。

しかし現実には厳しいものだった。

どうやら俺には魔法の才能はほとんど無いらしい。

系統魔法どころかコモンスペルでさえ中々出来なく、レビテーションを成功させるだけで3日もかかった。

これに両親は更に俺に失望した。

元々期待してなかったが、もしかして才能があるのでは？ とほんの少しだけ期待してたらしい。

しかし現実には才能があるとは言い難い。

自慢の長男はコモンスペルを直ぐに会得して系統魔法に磨きをかけていたというのに、次男は未だにコモンスペルさえ覚えられない。

これで俺の評価は一気に地に落ちた。

今までは微妙に監視されていたが、もう監視の目は無くなった。監視する価値が無くなったから止めたんだろう。

よし、これで鬱陶しい監視が終わった。

あれがあるから今までは演技しっぱなしだったからな。

とりあえず魔法の才能は絶望的と分かった。

残念だが別に問題は無い。

だって普通に魔法を使えば魔力を消費して疲労するが、コピーなら何回使おうが全く疲労しない。

だから問題無い。

魔法はこれからも練習するがそこまで真剣にはやらない。

精々が暇つぶしや演技のためだ。

## 4 行動開始

更に3年が経ち、8歳となった。

相変わらず俺の地位は低い。

3年前の才能が無い事が発覚した事によりますます俺の存在は空気化した。

以前ならたまに話しかけられる事もあったが、今ではほぼ無い。

両親の関心は長男の事だけ。

偉大なるお兄様はヴィンドボナ魔法学院に入学し、才能をいかに発揮しているらしい。

それに魔法ランクがそろそろトライアングルにも昇格しようというのでますます両親は入れ込んでいる。

きっと卒業したら国の要職に就くか家を継ぐのだろう。

まあでも家を継ぐのは流石にまだだろう。

親父はまだ身を引くには若い。

それに権力が大好きな親父が簡単に譲るとは思えない。

しばらくは居座る筈。

おかげで俺の事には全く無関心だからこれを利用しない手は無い。ようやく馬に乗れる身長になったから乗馬訓練をしている。

この世界では移動手段は馬か竜しかない。

残念ながら竜を所有するのは公爵クラスだから子爵ごときのルドルフ家には無い。

幸いにも前の世界で乗馬を体験してたからこの世界で乗馬のコツを

会得するのは結構簡単だった。

乗馬技術を会得したことから多少の遠乗りを始めた。

ほとんど見向きもされないが、一応子爵家の次男なので何人か護衛や使用人を引き連れて領内を回る事にした。

ルドルフ領は正に中世ヨーロッパな感じだった。

民はボロボロな家に住み農業をしている。

しかし働いても働いても稼ぎのほとんどを税金に取られて悲惨な生活を送っている。

繁華街も店はそんなに多くないし、道は石畳で整備はされているが清掃という概念は無いのかゴミや汚物が転がっている。

改めて見るとヒデエな。

まあ所詮子爵家だからこの程度の経済力しか持っていないか。

領自体はそこそこデカイのだが、未開の地が多いし、オーク鬼や怪物が群生してるから開拓は進んでない。

だから人が住めるエリアは小さい。

これでは人口が上がる筈は無い。

いかにもな家だな。

これならあの優秀なお兄様に期待するのもおかしくない。

あのお兄様が国の要職に就くか、トライアングルになって帰ってくれば開拓も進むだろうから望みをかけているんだろう。

だから相対的に俺の価値が下がる。

ヴァリエール家みたいな大貴族でなきゃルイズみたいな役立たずを愛する事は無かった筈だ。

あれは余裕があつて初めてなる。

ルドルフ家みたいな弱小貴族は役立たずを愛する余裕など無い。

それについてはもう良い。

いかに自分の家が弱小かは分かったが、別に何をする気も無いからスルーだ。

俺が諫言した所で無視されるのがオチだから無意味だ。

それよりも重要なのは俺の自由度が大幅に上がった事だ。

今までは家から離れられなかったから動けなかったが、今は家から出て遠乗りも出来るようになった。

実験として何日か外泊して帰って見たが、何らお咎め無かった。

どうやら本格的にどうでも良いらしい。

よし、計画通りだ。

能力のある子供と思われれば気軽な外泊など出来ない。

だから無能な子供を演じたのだ。

これからすることは下手したら1ヶ月以上帰れない可能性があるからこつする必要があった。

何せこれさえ成功すれば一気に動ける。

失敗すれば他の方法もあるのだがあんまり頭良い方法じゃないし、持続しないから次善策はあんまり使いたくない。

先ずは面倒な護衛やお目付け役の籠絡だ。

魔法指導員のマイヤーも連れて遠乗りをした。

名目は実戦を経験させる事によって才能が開花するかも知れない。

実際はコイツも取り込むためだ。

オーク鬼討伐のためにかなり遠く出て、キャンプを張った。

そして食事時に俺特製のワインだと振る舞った。

護衛や使用人、マイヤーはそのワインを「こんな美味しいワインは飲んだこと無い」と喜んで大量に飲んでいた。

そのワインの中には麻薬が含まれている事も知らずに。

麻薬は練金を使って簡単に出来た。

原子配列を操作出来るんだから麻薬の化学式や製造法等を全て知っている俺には簡単に作れた。

オマケに原子配列を弄るだけで作るから純度100%の超極上品がいつも容易く出来た。

にしても他のオリ主はどうやって金やチタン、ステンレス、火薬、ガソリン等の化学式を知ったんだろう？

俺みたいに特殊な環境下に生きてきたんならまだしも、普通の学生や一般人が知ったとしても覚えていられる筈は無い。

そんなもの日常生活に何の役にも立たないからな。

オリ主達は皆理系の大学や大学院卒業者なら分かるがな。

少なくとも高校生が知ってる訳は無い。

このように度々実戦経験を積むためという名目で麻薬入りワインをガブガブ飲んだ結果、全員見事なジャンキーとなった。

今では俺の命令には絶対服従だ。

麻薬がもたらす快感の前では全てが無意味だ。

全員をジャンキーに仕立てた後に本当の実戦を始めた。

コピー能力を知られるのは不味いから一応杖を構え、呪文を詠唱しながらコピーでファイヤーボール×10などともない威力の魔法をオーク鬼に放つ。

そのとんでもない威力のせいで30匹以上いたオーク鬼は一気に吹っ飛ぶ。

その光景を見ていた護衛達は啞然。

今まで才能などないと思っていたガキがスクエア以上の魔法をかましたんだから啞然としてもおかしくない。

オーク鬼が全滅した事を確認した俺は護衛達に振り返り

「いいか、今見た光景は誰にも喋るな。

もし誰かに喋ったのなら喋った奴は勿論、聞いた奴や喋った奴の家

族も皆殺しにする」

俺の言葉に護衛達は青ざめる。

何せあんなとんでもない力を持った奴に殺すと言われたんだ。戦っても勝てる筈ないし、誰かを味方につけても敵う訳が無い。

「念のために言っとくがこの事を知ってるのはお前等だけだ。

だからもし漏れたりしたら例えお前等が何にも関係無くても俺はお前等が漏らしたと思う。

そうなたらお前等は勿論、お前等の家族や親戚も皆殺しにする。

…分かったか？」

「………はいっ、分かりました！！！！！！」

全員何故か敬礼しながら答えた。

これで駒の完成だ。

もしも喋れば自分や家族、親戚さえも皆殺しにされてしまうというムチと、麻薬の甘美なアメ。

これでまず裏切る事は無い。

何せ裏切れば家族諸とも殺されるし、万が一助かったとしてももう麻薬のとんでもない快感を得られなくなる。

リスクの割にはリターンが少なすぎる。

だったらここは従い、アメを貰えるように頑張るのが人間だ。

## 5 最強兵器

あれからしばらくはコピーした能力の経験を得るために遠乗りしてオーク鬼や怪物を狩っていた。

2ヶ月後、とうとう実行に移す。

一応執事に

「しばらく狩りに出る。

もしかしたら1ヶ月くらい帰らないかも知れないと父上に伝えておいてくれ」

と伝言を残す。

8歳の子供の1ヶ月以上の外泊に執事は「かしこまりました。旦那様にお伝えしておきます」と返した。

普通いくら護衛がいるからって1ヶ月以上の遠出なんか許さないと  
思うがな。

許すにしても何を狩りにいくのか？ どこまで行くのか？ ぐらい  
は聞くべきだが俺の扱いはこんなもんだ。

何せ両親は俺に価値を見出だせてないからどうでも良いし、それどころか狩りに行くなら少なくとも領内の怪物が多少なりとも減るのだからと推奨さえされた。

とんでもないネグレクトだが俺には好都合だから別に反論しない。

俺は秘密を知る者全員、つまり何時も通りのメンバーを引き連れて出发了。

これまではどんなに遠くてもゲルマニア領内だったが、今回は国境を越え、トリステインに侵入した。

目的地はラグドリアン湖。

にしても簡単に国境越えられたな。

国境ラインに壁や標識がある訳じゃないからイマイチ国境を超えた実感は無いが、地図を見る限りここはトリステインらしいので国境を超えたのだろう。

国境を超えた俺達は一路ラグドリアン湖を目指す。

何故ラグドリアン湖を目指すのかと言えば、水の精霊が所有する秘宝、アンドバリの指輪を手に入れるためだ。

あの指輪はマジで欲しい。

何せあれさえあればどんな奴でもたちどころに服従するし、不死の兵隊も作れる。

流石にバレるとヤバイから軍隊は築かないが、ある程度は欲しい。アンドバリの指輪を使った兵士なら絶対逆らう事はないし、デイスペルを食らわなければほとんど死ぬことは無いから肉壁には持つてこいだ。

是非不死の兵士で固めた親衛隊が欲しい。

それならある程度安心出来る。

だから何よりも一番アンドバリの指輪が欲しい。

ていうかあれ以上のチートアイテムってあるか？

ティファニアが持つてる指輪も十分凄いがただの治癒を強くしただけだし、虚無シリーズは虚無以外では無意味。

場違いの工芸品は確かに凄いし便利だけどいつかは作れる。

アンドバリの指輪はティファニアの指輪みたいに使うと減るのか分からないが、俺の能力があるから問題無い。

しかし面倒なものもある。

アンドバリの指輪の持ち主の水の精霊だ。

アイツに触れると精神がイカれるらしいから触れないし、だからと言って対話するにしても別に盟約を結んでいる家系な訳では無いから話すらしてくれないだろう。

だからここは強行策しかない。  
クロムウェル達みたいに。

ラグドリアン湖に近付いたら周囲に誰もいない事を確認してから俺は勿論、護衛達にも仮面とフード付のマントを深く被らせて顔や体を覆った。

これはもし誰かに見られたとしてもバレないようにするためと、水の精霊に顔を覚えられないようにするためだ。

水の精霊に人間の顔の判別が可能かは分からないが、もし顔を見られてその顔を水でコピーされでもしたら面倒だからな。

それと念のために護衛達にこれから先は絶対俺の名前を出すなと厳命した。

クロムウェルは姿を隠す事は出来たが名前を聞かれた事によりバレた。

俺はそんなヘマはしない。

もし俺の名前を呼んだ者は必ず殺すと言っておいたから呼ぶことは無いだろう。

ラグドリアン湖の前に来たら護衛達は待機させ、俺は下馬して湖の前に立つ。

これからは俺一人でやる。

護衛達を連れていって万が一にも水に触れられでもしたら一気にご破算だ。

どうなのかは分からないが水に触れたら記憶さえも読まれかねない。だから確実性を上げるために一人で行く。

水の精霊に触れずに湖の底にあるアンドバリの指輪を手に入れるには最低でも二人のメイジが必要だ。

まずは風のメイジが自分達の周囲に風を張って水の侵入を防ぎ、火のメイジが水を蒸発させて進んだり攻撃を防ぐ。

オマケにこの二人のメイジは最低でもトライアングルクラスじゃないか、無理だ。

何せずっと風の壁を展開させつつ、火で進路を確保する。

少なくともドットやライnkラスではそんな高度な操作は無理だから高レベルが要求される。

しかし俺は一人で良い。

何せ一人で全ての系統を同時に使えるし、魔力は減らないから疲れる事も無い。

むしろ他にも誰かがいればそいつの事も気を付けなくてはいけないから足手まといにしかない。

さあてやるか。

まずは体の周囲を風の壁で覆い、火を使いながら水を蒸発させて進路を確保する。

そして水面から徐々に底を目指して進む。

途中水の精霊の攻撃と思わしき水のムチが来るが、風の壁に阻まれる。

正面の水流がいきなり乱れ、壁を破壊しようと水流弾を放つが火で蒸発させる。

他にも色々な攻撃が来たが全てかわし、遂に湖の底に到達した。

底には指輪が転がっていたのでその指輪を見て、そして拾い上げた。その瞬間、水の精霊は指輪を盗まれると思ったのか攻撃の手を強める。

しかしそれも全て壁に阻まれて終わる。

俺は指輪を少し見た後、指輪を元あった場所に置き、浮上を始めた。すると水の精霊からの攻撃が止んだ。

何せわざわざ自分の攻撃を掻い潜っておきながらただ指輪を見て触っただけだからな。

何がしたいのか理解出来ないんだろう。

普通なら盗むだろうが、俺は見て触るだけで十分だ。

わざわざ厄介な水の精霊を敵に回す理由は無いしな。

湖から上がり、心配そうに見ていた護衛達に引き上げの指示を出し、馬に乗った時、声をかけられた。

「待て、単なる者よ」

声がしたほうを見ると誰だか分からないが中年男性の姿になった水の精霊がいた。

「お前は何をしに来たのだ？」

アンドバリの指輪を盗むのかと思えばただ触って見ただけ。

何が目的だったのだ？」

「…別に、ただ指輪を見て触りたかっただけだ。

お前にとってはどうでも良いことではないか？」

俺の返答に水の精霊は体を変形させながら考え

「……そうだな。

指輪を取られた訳では無いし、我にはどうでも良いな」

そう言った後に体が崩れ、水に戻った。

それを見届けてから改めて撤収命令を出し、ラグドリアン湖を離れた。

しばらく走り、ラグドリアン湖からかなり離れた辺りでキャンプを張った。

護衛達から何しに湖に行ったのか聞かれたが「気にするな」と言つて黙らせた。

護衛達は不満そうだったが、今日の褒美としての麻薬入りワインの配給を始めたら全員が笑顔になって並んだ。

やっぱりジャンキーにとってはヤクが貰えるなら何だって良いんだろ。

しかし今回のワインは更に特別製だ。

何時もの麻薬と一緒にアンドバリの指輪の液体も混ぜたワインだ。それを全員に配給し、乾杯の音頭を取る。

「今回の遠征に付きあってくれて感謝する。わざわざ国境を越えてまでの旅だったが、全員のおかげで無事目的を達成出来た。

今日は思っ存分飲んで楽しみ。

乾杯！」

「「乾杯！！！！」」

俺は普通のワインを飲むが、護衛達は麻薬とアンドバリの指輪の液体が入ったワインを飲んだ。

護衛達は飲んだ瞬間はヤクが体を回ったからかテンションを上げたが、徐々にテンションは下がり、そして目から意志が消えた。

これで不死の親衛隊の完成だ。

今までは麻薬で縛っていたがそれでは不安だからアンドバリの指輪を使って完璧な忠誠を手に入れた。

やはり能力を完全に知られた訳では無いが一端を見られたのは不安だったからな。

「全員に命ずる。

今日見たことは勿論、俺が力を隠している事は一切誰にも話すな」

「「はい、かしこまりました」」

全員が意思の無い目で応じる。

これで大丈夫だ。

燃やされれば死ぬがデイスペルを食らわなければ元に戻らない。

後は念のためにコイツらの家族には死んで貰おう。

あんまり指輪を使いすぎるとおかしい人間が増えまくるからな。指輪は必要最低限だけ使う。

何でもそつだがやり過ぎると身を滅ぼす事になる。

どこかで線引きが必要なのだ。

## 6 支配と革新

ラグドリアン湖から帰った俺は早速行動を開始した。

にしても何にも心配されて無かったな。

2週間も外泊して帰って来ても執事は何時も通り出迎えるし、「何か問題は無かったか？」と聞いたが「何もございませんでした」と返すだけ。

一応親父に帰還報告をしたが「分かった」と言われただけ。

マジでコイツら俺の事どうでも良いんだな。

まあ良い。

それも今日で終わりだからな。

執事や使用人達に指輪の水を飲ませて支配した後、食事の時に指輪の液体を混ぜたワインを俺以外に出す事を指示した。

そして食事の時間が来て全員席に着いた。

全く価値を見出だされてはいないが、一応俺も食事の席に座る。

全く会話に関われないが体面があるんだろう。

食事が始まり、次々メニューが並ぶ。

そして執事が指示した通りに両親には薬入りのワインを注ぎ、俺には普通のワインを注ぐ。

各々のタイミングで両親はワインを飲んだ。

その瞬間、ワインを飲んだ両親の目は虚ろになり意志が失った。

両親のいきなりの変わりようにも使用人達は何も動かない。

何故なら俺以外の全員の目には意志が無いからだ。

そしてそのまま俺は食事続ける。

両親も俺から何も指示が無いからそのまま食事続けた。

デザートも食べ、食事が終わったので指示を出す。

「これからは俺の指示に従ってもらおう。

いいな？」

「はっ、かしこまりました」

両親共に俺に礼をする。

今までなら信じられない光景だな。

何せ俺は命令されるだけで命令するなんてあり得なかったからな。さて、これからがいよいよスタートだ。

「まずは長男のジャコモを呼び寄せる。

緊急的な用件があるとも言えば来るだろう」

「はっ、かしこまりました。

ジャコモを呼び出します」

親父は食堂から出て執務室に向かった。

学院に向けた手紙を書きに行くんだろう」

3週間後、ジャコモがウィンドボナから帰ってきた。

「一体何があったのですか父上？」

手紙には緊急的な用件としか書いてませんでした」

「まあそう慌てるな。

とりあえずまずは食事にしよう話はそれからだ」

親父が兄貴を食堂に連れてきた。

食堂は既に準備が完了されていて母親と俺も着席してる。

「母上、ただいま帰還しました」

「お帰りなさい。変わりありませんか？ ジャコモ」

「はい」

兄貴は母親の手にキスをする。

俺には一瞥をくれるだけで何も話しかけない。

何時も通りの光景だ。

これまではな。

まずは食前酒での乾杯から始まった。

親父が乾杯を告げ、全員が食前酒を飲む。

その瞬間、ジャコモの目からも意志が失われた。

「ジャコモ、お前もこれからは俺の指揮下に入ってもらっ

「はっ、かしこまりました」

あの尊厳が高すぎる兄貴が頭を下げる。

これでルドルフ家を支配し終わった。

出来るなら兄貴は学院卒業後に支配したかったが、どうせ休暇になつたら帰ってくるのだから早目に終わらせとく。

このまま学院に戻すと違和感から疑われそうだが、卒業させないと色々面倒だし、後々の事を考えて戻す事にした。

ジャコモには学院では以前のように振る舞えと命じたから少しは誤魔化せるだろう。

ジャコモが学院に帰った後、領地改造を開始した。

まずは官僚達や税務官等を招集し、指輪を使って支配した後に経済学や会計学、経営学等を叩き込んだ。

出来るなら指輪はあんまり使いたくないのだが、初めが肝心だし、

8歳のガキの話を真面目に聞くととは思えないから使った。

今までの世界同様、始めにちゃんと教育さえ出来れば後は俺が表に立たなくてもどうにでもなる。

こいつらに基礎を学ばせ、いかに今までの経営が異常だったかを教え、どうすべきかをテキストを渡して教え込む。

普通に教えたなら貴族や平民がどうか言うが、支配された奴等は文句など言う筈は無いから黙って従う。

官僚達に基礎を仕込んだ後、税改正を宣言。

今までの搾取としか言いようが無い税率を大幅に下げ、生活に困らない額にした。

そしてインフラ整備や土地の開拓として大量の公共事業を開始。

これによって今まで税によって食うだけで精一杯だった生活は改善され、公共事業によって失業者が激減。

更に資金集めや生活向上として何時も通りホンゴウ商会を開いた。

ホンゴウという名前はハルケギニアには珍しいがこの方が目立つからこれで良いか。

という事で決まった。

最初はルドルフ商会にしようと思ったが、それでは国营企業になり競争力がつかないし、色々面倒だから民間企業として起業。

ホンゴウ商会は豊富な商品と安い価格なため瞬く間に人気となった。何せ今までは収入のほとんどは税金に取られて買い物なんか考えられなかったが、税改正のため余裕が生まれた平民達は買い物を楽しむ。

ホンゴウ商会は既存の商会を買収し、更に巨大化していく。

それに比例して雇用が増えていき、ますます平民は豊かになっていった。

ちなみにホンゴウ商会は同じグループ内での競争を推奨しているから部門によって3〜5ぐらいに分かれて売上を競ってる。

これは競争原理によって市場が停滞しないようにするためだ。

識字率向上のために義務教育制度を開始。

全領民は最低2年間の義務教育として読み書き、簡単な計算を学ば

せ、ルドルフ家への洗脳教育を施す。

それと同時に官僚育成のためにルドルフ大学を建設。

試験は非常に厳しいが学費等を無料にし、貴賤は問わないとした。

そのおかげで教養はあるが金はない貧乏貴族や、平民に落ちてしまった元貴族等がチャンスを掴むためにこぞって受験した。

更に戦力増強のために仕官達を呼び出して官僚同様に支配して近代戦闘や軍規を叩き込む。

そして仕官学校と兵学校を建設。

仕官学校では将としての指揮官教育し、兵学校では軍規や兵士としての基礎を学ぶ。

軍に入れば福利厚生がキチンとしてるし、税でも優遇される。

ここまで大改革を急激にすれば帝都から怪しまれるが、忠誠心は変わってない証として儲けた分だけ税金を払い、同時に献金もする。ここがトリステインだったらこれでも何か言ってきそうだが、ゲルマニアはそこまで貴族や平民がどうか言わないし、ちゃんと税も払ってるし献金も始めたから特に文句は言ってこなかった。

そこまで忠誠心を求めてる国でもないしな。

ちなみにロマリアから変な探りを入れないようにルドルフ領にいるロマリア神父達に指輪の液体を飲ませて支配した後、大量の寄付をする。

ロマリアは寄付さえちゃんとすれば文句は言わない。

別にブリミル教を否定してる訳じゃ無いし、教会の改修や新設にも金を出している。

だからルドルフ領にいる神父や司祭達がロマリア本国に何も報告しなければ問題は無い。

技術面での進歩を進めた。

研究施設を建設して元研究員や知識や技術レベルが高い奴等を集め、  
またもや指輪で支配した。

研究内容が外部に流出するとヤバイからな。  
だから絶対逆らわないように支配下に置く。

そして研究者達に物理化学の基礎や機械工学を教える。

指輪の支配下にあっても知能が上がる訳ではないから理解に時間がかかるが、確実に理解していつているから良しとする。

この世界では練金すれば簡単に原料を得られるから結構簡単だ。

それにゲルマニアは冶金技術がハルケギニアでも抜きん出ているから技術レベルも問題無い。

と言っても現代とは比べるのもおこがましい程の差があるから微妙だが、初期段階としては悪くない。

工作機械等の設計図や使い方の資料は全部持っている。

前の世界でもしもまた違う世界に行った時のためにと色んな分野の資料をコピーしたからな。

最初は手工業でやるしかないが、10年も経てばそれなりの工作機械も出来るだろうから一気に機械工業に変わるだろう。

先ずは蒸気機関の開発だ。

いきなり現代みたいにコンピュータ管制とか無理だし。

ゲルマニアの技術レベルならそんなに時間はかからないだろう。

原作でコルベールが初期の蒸気機関を作ってたし。

にしても他のオリ主はどうやってあんなに急激に技術レベルを発展させてるんだろう？

この精々産業革命以前のレベルでしかない世界で練金が出来るから  
って第二次大戦レベルの兵器を僅か数年で量産するなんてそれこそ魔法だ。

どうやってんだ？

治安向上のために警察機構を設立。

更に交番制も開始した。

やっぱり各地に交番があると治安は上がりやすい。

治安が悪い領ではロクな経済活動出来ないからな。

ちなみに賊対策のために演習として軍に頻繁に襲撃をかけさせている。

どんなに強くても所詮は賊。

軍に勝てる筈は無い。

情報入手やスパイ狩りのために諜報組織、ゲーレン機関を設立。

前の世界で得たスパイ技術や暗殺術を教える。

勿論コイツらも指輪で支配済みだ。

コイツらが捕まって拷問されようが情報を吐く事は無いが、万が一デイスペルみたいな魔法があるかも知れないから、捕まるか捕まりそうになったら爆死しろと手榴弾を持たせている。

死体が残つてると調べられて万が一にもアンドバリの指輪がバレる危険性があるからな。

指輪で支配した奴等は恐怖を感じないから自殺も躊躇わない。

正に理想的なスパイだ。

まだ蒸気機関も出来てないからそんなに高度な兵器の量産は出来ないが、今でも出来る新兵器開発を始めた。

まずはマスケット銃にライフリングを刻んでゲベール銃に改造する。

この世界の銃はフロントロック式と火縄式の銃しかない。

だから一発一発を撃つのに時間がかかるしあんまり射程距離や命中制度が高くないから脇役になりがちだが、ライフリングを削るだけでもかなり飛距離は伸びるし、精度も上がる。

それに前装式から後装式にし、今までの丸い弾からドラングリ状にしたミニエー弾を作るくらいなら出来る。

更に無煙火薬も練金してコピーすれば無限に作れるから紙薬莢も作ろう。

こうすれば完全にミニエー銃の完成だ。

ミニエー銃なら今までの比じゃない程に短い間隔で撃てるし、命中精度、距離も比較にならない。

まだ金属薬莢は作れないが紙薬莢なら作れる。

早く戦えるようにならなくては。

少なくとも原作突入前に決めないと勝ち目は無い。

何か懐かしいな…。

前の世界でも初めの頃はこんな感じで毎日必死でやってたな。

日本統一してからは楽だったけど、九州統一前は余裕なんか無かったから何でもがむしゃらに頑張ってたな…。

……何か年寄りみたいに昔話をしてしまった。

まあ、見た目は8歳だけど精神年齢は500歳越えてるから仕方ないか。

## 7 発展

行動開始から2年。  
俺は10歳となった。

様々な献金の結果、親父のボリス・フォン・ルドルフは子爵から献金で買える最大の侯爵に昇格。

更にたまたま空いてた周辺の領地や空いていた領地を買い上げ、領地は一気に10倍以上に膨れ上がった。

何故か前年に周囲の貴族達が事故にあったり自殺する等して空きが出たので、空白地帯をルドルフ家が全て大金で買ったのだ。

それによつて爵位は侯爵だが、領地の広さは公爵に匹敵する。

一気にゲルマニアでの上位貴族に浮上した。

正にタイムリー。

周囲の貴族達はルドルフ家のいきなりの方向転換や急発展を疑問に思い、スパイを潜入させていた。

しかしそれがゲーレン機関によつて発覚。

スパイは殺され、指輪の力で蘇らせた後に全て話させた。

そして支配したスパイを雇主達の元に返して調査報告と言つて油断させた雇主を殺させ、家族もまとめて殺した。

死体は事故や無理心中したように見せかけた。

ちなみに仕事を果たしたスパイ達はもういらなから焼き殺して畑の肥料にした。

科学捜査なんて概念は無いハルケギニアでは急な無理心中という不可思議な出来事があつたのに口々に調べず、領地経営が行き詰まつたせいで無理心中と断定。

領地は一時期皇室領に編入されたが、ルドルフ家が大金で買い取る

と申し出たので売り払った。  
どこにも不備は無い。

最初は侯爵じゃなくて伯爵あたりにしようかと思ったが、どうせ急激に昇格したら怪しまれるんだから一気に最上位の侯爵にした。  
これで伯爵以下の奴等は手を出しにくくなった。  
戦争で活躍したんじゃないやなくて商売で成り上がったんだから舐められる恐れがあるが、攻め込んでくるのなら分からせれば良い。

それにしてもゲルマニアはやりやすい。

トリステインだったら献金を大量にしても金だけ取られて終わりだろうし、アルビオンだったら土地自体が無いからどうしようも無い。ガリアなら多少は融通されるだろうが何の戦果も無しにいきなり侯爵にはなれない。

伯爵が精一杯だろう。

一方、ゲルマニアは金さえ払えば大抵の物は手に入るし、土地は逆に広すぎて余ってるから簡単に買える。

ロクに開拓されてないのが珠に傷だが仕方ない。

逆に開拓されている土地なら皇室領のままだっただろうし。

自分達の好きに出来るのだと思えば悪くない。

この世界は完全に地方分権制度だから一々中央にお伺いを立てる事は少ない。

言わばここはルドルフ王国なのだ。

勝手に法律を作れるし、勝手に税率も決めて良い。

領地内なら立法、司法、行政は思うがまま。

確かにこんなにも権力があるのなら貴族が腐敗もするな。

新たに領地と一緒に領民を大量に獲得したんだから一人一人が分かるように戸籍制度を確立し、国民背番号制も実施。

この世界なら家畜のように人間を番号付きにしても誰も文句は言わない。

平民は家畜と同じなのだから。

むしろこれのせいで税金や年金記録等が全て分かるようになるなら便利で良いと好意的に受け取る平民がほとんどだ。

不法侵入を防ぐために国境線も正確に引き、等間隔で監視施設も建設。

領地が広くなったせいでトリステインと国境を接するようになったから守らなくてはならない。

トリステイン間の国境線には鉄条網や二重の金網、塹壕等を設けて侵入を防ぐ。

他の領地では国境が曖昧で簡単に国境を越えられるが、俺の領は許さない。

新たに手に入れた領地の開拓のために開拓部隊を派遣した。

開拓部隊には怪物と戦うために最新兵器も多数所持しているし、直ぐに開拓出来るように作業兵も随行している。

人口や生産力を上げるために土地は幾らでも必要になる。

蒸気機関が完成した。

やはりこの世界では詳細な設計図やノウハウが載ってる資料があれば簡単に作れるらしい。

伊達に6000年も魔法文明でやっていた訳では無いようだ。

大抵の部品は練金で作れるし、固定化なんていうチートがあるから部品の摩耗も少ない。

始めさえ苦勞するが、基礎さえ理解させれば後は簡単だった。

新技術を手に入れるということに支配した技術者でも興奮したのか、睡眠や食事を必要としない体をフルに使って短期間に蒸気機関を完成させたのだった。

一気に実用可能な蒸気機関を開発した事で蒸気機関車も完成したが、公には使えない。

前の世界同様、バレればその性能から他国や皇室も欲しがるし、一気に警戒されて攻められる可能性が高いから公表は出来ない。

しかし新たに開拓地を広めるには膨大な輸送力を持つ機関車は必要不可欠だから、ひっそりと使う事にする。

州都とも言つべきか、ルドルフ領で最も栄えている場所では旧来通り馬車か、レールを引いて移動を楽にした駅馬車を使う。

これなら例え秘匿地域で機関車用レールを見られても誤魔化せる。

秘匿地域は領の軍事機密のため見せられないとも言えれば何とでもなる。

わざわざ皇帝が直に来ない限りは。

まあ来たら来たで適当に陣地とかを見せて誤魔化せば良いしな。

領地がとんでもなく広大になったから幾らでも誤魔化せる。

地球なら十分1国に値する広さだ。

広がった領地にキッチンとした道路を整備し、石畳で舗装したり、上下水道を整備したりするなどまた新たな大規模公共事業が生まれた。

更に新領地にホンゴウ商会も出店して市場を支配する。

ルドルフ領に編入した事により税率は定められ、それが以前より低い額なら平民達は新たな支配者に文句等無い。

低い税やホンゴウ商会、公共事業によって得た収入でホンゴウ商会製の安くて品質が良い商品を平民が買いたがるのは道理。

今までつける余裕が無かった装飾品や、新たな服、新鮮な果物等が買えるようになれば誰でも欲しくなる。

更に今まで学ぶ事など許されなかったのに、逆に領主からの命令で義務教育を受けられるようになり、読み書きや簡単な計算が出来るようになった。

そのおかげで今まで読む事は出来なかった本も買う。

印刷技術の発展のおかげで大量に印刷出来るようになったので平民の所得で本も買える。

誰がこの領に不満があるだろう？

中には何が気に食わないのか分からないが不満を漏らす平民もいるが、9割以上の平民はルドルフ領になって良かったと言う。

更に領主であるボリス・フォン・ルドルフは領内での貴族の無礼打ちを禁止にしたため、貴族に怯える必要は減った。

まああまりに無礼な態度を取れば流石に殺されるが、別に何もしてないならされる事は無い。

貴族が酔っ払って暴れてもしたら警察を呼べば良い。

流石の貴族も警察に捕まれば犯罪者として扱われる。

そうなれば何らかの処罰されるようになるから安心出来る。

このように日に日にルドルフ領の名声は高まり、各地の平民達は希望を求めてルドルフ領への亡命を求めた。

ルドルフ領は基本的に移民に寛容だから亡命してくる者達を受け入れるし、必要なら職も紹介してくれる。前職によって分類され、農民ならそのまま農民に、兵士だったなら兵学校に入れられる。

職業選択の自由はあんまり無いが、平民達は職を持てればどうでも

良いので文句を言う者はいない。  
むしろ経験を活かせるのなら喜んで従う。  
権利もクソも無い世界なのだから。

食料の大増産のため今までの地主制度は廃止し、土地を買い上げて大規模農業法に変えた。

農業機械や化学肥料を作れるようになったのだし、土地は余ってるのだからアメリカみたいにデカイ農場を作って大量に食料を生産する。

沢山の地主がいると面倒だからな。

デカイ農場を少人数で分けた方が楽だ。

新兵器が続々と完成している。

蒸気機関の完成により金属薬莖の大量生産やライフリング刻みも出来るようになった。

これのおかげでボルトアクション式ライフルが完成。

戦力は大幅アップだ。

更に機関銃も開発した。

これで戦い方が一気に変わった。

今までのような騎馬突撃が無意味になる。

迫撃砲や榴弾砲も完成したからこれで大抵の敵には勝てる。

空海軍も設立した。

空軍、海軍別に作ってたかったが、領地に海は無いから別に作る意味が無い。

ちなみに軍は防衛省に所属しており、陸、海空と統合してあるから縄張り争い等は無い。

防衛大学も設立して、入学当初は同じ訓練や学科を受けるが、適正検査をして陸、海空に分ける。

授業は洗脳教育を施すからルドルフ家に絶対の忠誠を誓わせる。

統合参謀本部も作ったから指揮権も一元化出来る。

この世界では軍艦は空を飛ぶ物なのでそれに倣い、軍艦を購入したり新たに建造もした。

燃料の風石はハルケギニアの地下に莫大な風石鉱が存在するからそれを掘削している。

確かこの大風石鉱のせいでハルケギニアはいずれ浮き上がると言われていたよな。

だったらその莫大なエネルギーを使わない手は無い。

現実世界でも莫大な埋蔵量を誇った油田を次々枯らしている。人間の欲望ならどんなに大量にあっても使いきる。

おかげで風石はコピーする必要も無い程に取れる。

燃料を確保したら次は装備だ。

艦体は空海どちらでも使える両用艦で、今まで通りの木造船や、現在開発中の鉄鋼船がある。

木造船でもこの世界では200〜300m級の木があるからとんでもなく大きい軍艦もある。

しかしやはりとんでもない大きさの木はそんなに無いから少ない。

大抵が100mぐらいだ。(それでも十分デカイが)

そして装備はほとんどがライフリングを削られていない大砲で球形弾だが、中には榴弾もある。

何で榴弾があるのならライフリングを削らない？

まあ魔法を使えば榴弾も作れるから考えないのか？

俺の艦隊の大砲は勿論ライフリングを刻まれてるし、砲弾の形も現

代風にしているから射程距離も長いし、精度も高い。

この世界では大砲は2リーグ、つまり2 km程度しか飛ばない。しかしルドルフ軍の大砲ならその倍以上飛ぶ。

完全にアウトレンジ攻撃出来る。

しかし、致命的な問題もある。

それは航空戦力。

この世界で言う竜やグリフォン、マンティコアなどだ。

残念ながら我がルドルフ領は竜や飛行生物の数が少ないから航空戦力が乏しい。

風竜や火竜で軍艦を落とすのは難しいが、攻撃を食らいっぱなしになるのはキツイ。

しかしまだ航空機を開発する技術レベルは無い。

ならどうするか？ 簡単だ、無いなら他から持ってくれば良い。

## 8 戦争準備

なけなしの風竜部隊や親衛隊を引き連れ、俺自身も風竜に乗ってトリステインの国境を越える。

そして更に飛行し、遂に目的地に到着。

タルブ村だ。

村にいたら村長に会った。

「私がこのタルブ村の村長です。」

貴族様がこのような村にどのようなご用でしょうか？」

「私はゲルマニア貴族、ハンス・フォン・ルドルフだ。」

秘宝、竜の羽衣を見に来た。

この村にあると聞いたのだが」

「竜の羽衣…ですか？」

確かにこの村にあります…あれは秘宝なんて物じゃありませんが？」

「秘宝かどうかは私が判断する。」

竜の羽衣がある場所に案内せよ」

村長は竜の羽衣は置物程度の認識しかないから不思議がるが、案内しろと命じられれば拒否なんか出来ないから素直に案内する。

案内された所はどこか寺院に見えるような村の物置小屋だった。

「私が竜の羽衣の所有者のタケオ・ササキです。」

竜の羽衣をご覧になりたいとお聞きました」

目の前には黒目黒髪、少し背が低いが何か迫力がある日本人がいた。成る程、まあこの時代ならまだ佐々木武雄が生きてても不思議は無いな。

「そつだ、竜の羽衣を見せて貰おう」

俺の命令に少し躊躇っていたが、逆らう事は出来ないから「此方です。」と案内する。

小屋は結構大きく、小さい格納庫ぐらいはあった。

そして中にはこの世界にあるはずが無い物体が鎮座していた。

零式艦上戦闘機、ゼロ戦52型だ。

太平洋戦争末期の日本の主力戦闘機。

俺は近付き、触る。

ジュラルミンだ。

間違いなくこの世界には無い物質。

あんまり質は良くないがまあ良いか。

「……素晴らしい。

流石一時期とは言え、世界最強を誇った機体だ」

俺の言葉を聞き、佐々木が反応した。

「…これが何か分かるのですか？」

佐々木が聞いてきたので俺は護衛達や村長に「二人にしてくれ」と言う。

護衛達は勿論命令に従うし、村長はそれを見て、出ていかななくてはならないと思い出ていく。

全員出ていった。

「さて、これが何か分かるかだったな」

俺が聞くと佐々木は頷く。

「零式艦上戦闘機。零戦。

大日本帝国軍の戦闘機」「っ！！

まさか、貴方も？」

「そうだ、お前は日本人のままこの世界に来たらしいが、私はゲルマニアの貴族として生まれた」

「…そうでしたか。

日本人に会ったのはこれが初めてですね」

「だろうな、私も日本人を見たのはお前が初めてだ。

……お前は零戦と一緒に来たらしいが、という事は大東亜戦争中に来たのか？」

「はい、私は部隊とはぐれ、飛行している内にいつの間にかこのハルケギニアに来てました」

「成る程な。」

……この零戦はお前の機体だったな」

「はい、いつか陛下にお返しするために私が預かっています」

やっぱり旧軍人はこう思うんだな。

まああの時代は全ての物が天皇陛下下の所有物だからな。

……残念ながらそれは不可能だろう」

「……確かにこの世界を出る術は未だにありませんが、いつか必ず祖国日本に帰るつもりです！」

「いや、そういう訳ではない。」

お前は知らないかも知れんが、帝国はアメリカに負けたのだ」  
俺の言葉に佐々木は目を見開く。

「……それは……それは誠なのでしょいか？」

「そうだ。」

沖縄は占領され、帝都は爆撃によって焦土にされた。

そして1945年8月15日、帝国は無条件降伏を受け入れた」

佐々木は日本降伏を聞き、膝から崩れ落ちた。

正に教科書や映像で見た玉音放送を聞く日本人だな。

「……陛下は……陛下はどうされたのですか……？」

「帝国軍は解体され、一切の軍備を持つ事さえ禁じられたが、それでも国体は守られた。」

天皇陛下はその後も日本国の象徴として戦後長らく日本国に君臨されたが、既にお隠れになられた。

今は皇太子様が陛下になられた」

まだこの時代だとギリ死んでないか？

まあ良いや。

どうせ帰れないんだから。

「帝国は…どうなったのですか？」

「戦後間もなくは厳しい時代だったが、日本は直ぐに復興を始め、瞬く間に発展した。」

今では世界第2位の経済大国にまでのしあがった」

それを聞いて佐々木は笑顔になった。

まあ祖国がそこまで凄くなれば嬉しいのだろう。

「さて、今日私がこのタルブ村に来たのはこの零戦が欲しいからだ。どうだ？ この零戦を私に譲ってはくれないか？

譲ってくれるならお前やお前の家族を我が領に迎え入れる。」

「トリスティンに我がルドルフ領の噂は伝わっているのか？」

「はい、ゲルマニアのルドルフ領は平民でも希望が持てる領だと噂を聞いてます」

「その通りだ。」

我が領では義務教育制度があるから平民でも教育を受けられるし、雇用も豊富にある。

自慢になるが、我が領はこのハルケギニア1裕福な領だと自負している。

どうだろう？

私はこの零戦を量産して空軍を設立する。

その時に、是非お前には航空機の指導員になって欲しい。

勿論給料は弾む」

俺のヘッドハンティングに佐々木は悩んでいる。

まあ拒否しても指輪で支配するからどうしても良いんだがな。

「最早帝国は無いようですし、このまま零戦を持ち帰っても邪魔になるだけ…。」

分かりました。

この佐々木、貴方に着いていきます」

よし、これで指導員もゲットした。

何せ機体だけあっても指導員がいないと面倒だからな。

時間は経っていても戦闘機のパイロットだったんだ。

多分出来るよな？

交渉が纏まったから零戦を持って行く事にした。

そのために風竜部隊を連れてきたんだからな。

佐々木や家族達も持てるだけの荷物を持たせ、一緒にトリステインを脱出した。

流石に何度もタルブ村に訪れればタルブ領主にバレるだろうし。

家具等はルドルフ領で用意するとしてほとんどの荷物は置いていき、必要最低限だけ持って出ていったからみんな軽装だ。

最初はタルブ村を出ていく事に不満気だったが、佐々木が必死に説得したのと、行き先がルドルフ領だと言うので納得したらしい。

ルドルフ領は平民の間では結構有名になっていたらしい。

ルドルフ領に着いた後、佐々木は指輪で支配して、佐々木の家族は皆殺しにした。

佐々木以外は別にいらないしな。

トリステインで支配しなかったのは万が一にも見られたら面倒だったからだ。

ルドルフ領内だったら見られようがどうにでもなるから直ぐにやった。

勿論誰もいない事を確認してからな。

これでシエスタが生まれる事は無くなったな。

まあ別に良いけど。

サイトに会わなきゃただの平民として終わってたんだ。  
いてもいなくとも変わらない。

ゼロ戦を持ってきたのでまずはゼロ戦を大量にコピーした。  
そして練金で作ったハイオクガソリンをタンクに入れ、佐々木に飛ばさせた。

失敗したとしても佐々木はもう不死身だし、パラシュートで脱出さえ出来れば死ぬことは無い。

飛行は見事成功。

佐々木は現役時代よりはかなり腕が落ちているらしいが、飛ばせるだけでも十分だ。

今は昔の勘を取り戻させるために毎日訓練させている。

ゼロ戦は幾らでもあるし、部品も固定化を更に何重にもかけたから摩耗しにくい。

整備士を育成するまでは佐々木にやらせるか、機体はインスタントで使うしかない。

何て勿体無い。

戦中の日本からしたら考えられない行為だ。

ゼロ戦という最強航空戦力が手に入ったのだから運用方法も考えなくては。

まずはパイロットの育成だ。

幸いにもゼロ戦は癖が少ないので練習機には持つてこいだ。

パイロットは絶対機密を漏らさせないために指輪で支配した。

おかげで眠る必要も無いし、食事を取る必要も無い。

更に恐怖も感じないからいきなり大胆な飛行も出来る。

たまに失敗して墜ちるが、脱出さえすれば死なないし怪我もしないから替えの機体に乗って訓練を続ける。

そのせいかみるみる内に練度が上がっていく。  
やっぱり恐怖心が無いと人間ってスゲーな。

それと同時に空母の建造も始めた。

いかにゼロ戦の足が長くても長距離移動はキツイ。

だから原作の竜母艦みたいな空母を建造する。

原作では甲板が短くて飛ぶには魔法が必要だったが、この空母はそんな事は無いように飛行甲板を長く設計されている。

それにしてもゼロ戦が艦上機で良かった。

もしも隼や飛燕みたいに陸上機だったら短い滑走路で飛ぶのは難しいし、狭い空母で使いづらかった。

だからマジでラッキーだ。

オマケにゼロ戦は51型から20mm機関砲がドラムマガジン式からベルト給弾式になっていたから装弾数もかなり上がっている。

本当、この機体はベストだ。

まあ欲を言えばゼロ戦じゃなくてアメリカ軍のP-47とかF6Fが良かったがな。

ゼロ戦排気タービン過給機積んで無いから高高度戦闘が出来ないんだよなあ。

まあこの世界なら4000mも飛べれば十分だから良いか。

とりあえずこれで大丈夫だ。

唯一不安だった航空戦力も手に入れたし。

後は近代兵器で何とでもなる。

でもこのままでは技術レベルが低いままだから内燃機関開発を頑張ろう。

今のままでは装備や兵士を運ぶのは馬車ぐらいだ。

流石に機関車はレールを引かなきゃいけないから素早い移動は出来ないし。

だから牽引出来る車両が必要なのだ。

ここまであからさまに戦力を増強すればそろそろ帝都から何らかのアクションがあるだろう。

そろそろ独立を目指して戦争を行う必要があるから戦力の増強を続けなくてはいけない。

兵士の数は年々増加しているがまだ足りない。

志願制にしているから士気は高いのだが集まるのが遅い。

仕方ないので徴兵制を敷く事にする。

2年間は徴兵制を敷いてとりあえずの戦力を増強させる。

素人でも2年間みっちり鍛えれば多少は使えるようになるだろう。

今までは秘匿していて公には使えなかった近代兵器達を開放し、バンバン訓練させる。

帝都に向けた線路も引き、一気に戦力を集中出来るようにする。

そのために後2年はのりくらりと帝都からの手をかわすしかない。あつちが強制的に情報公開を迫ったり、改易命令が下ったら独立宣言すれば良いし、こちらの準備が整ったら宣言して奇襲かけるのも良い。

独立さえしてしまえば後はどうにでもなる。

そのままゲルマニアを滅ぼすのもありだしな。

でも流石にこのまま帝都に向けて戦力を増強すればあからさま過ぎて不味いからトリステインを攻める気のように偽装しよう。

トリステインとの国境付近で演習を度々したり、戦力を集結しているかのように見せつける。

と言っても見せつけるのは旧式兵器のみで機関車のレール等はまだ引かない。

精々が馬や大砲を集めるぐらいだ。

それでも見ようによつてはヤル気満々にも見える。  
とりあえずしばらくはこれで誤魔化そう。

## 8・5 それぞれの勘違い（前書き）

まだアブレヒト3世は即位してない設定です。

## 8・5 それぞれの勘違い

ゲルマニア帝国皇帝フリードリヒは報告書を読んで眉をひそめた。

「ルドルフ領の戦力増強が目につくな……」

フリードリヒの言葉に諜報担当者が答える。

「はい閣下。」

ルドルフ領では急に満18〜25歳の男子に対して徴兵命令を実施しました」

それを聞いてフリードリヒは考え込む。

今が戦時や緊急時ならいきなりの徴兵も理解出来るのだが、今は戦時では無いし、それどころか戦争の気配すら無い平時だ。

そんな時に徴兵しても金の無駄になるだけではなく、経済活動に支障を来してしまう。

ルドルフ領はここ数年経済活動が活発になり、何処から出ているのか分からないがその有り余る経済力を使って子爵から一気に侯爵にまでのしあがった今注目の大貴族だ。

ほんの数年前迄は何処にでもいる貧乏貴族でしかなかったのに、3年前前から急成長している。

ルドルフ家に何があったのだろうか？

「……徴兵理由については何と言っている？」

「はっ。」

正式発表では領土が拡大したため、トリステインと国境を接するようになったから国境の守りを強化するためと牽制のためだと。

噂ですと侯爵に昇格したことから力を見せつけるためだとも言われています」

「確かにその理由も納得は出来る。」

国境の守りを強化したくなるのも分かる。

それにいきなり成り上がった事で諸侯に侮られないように分かりやすい軍事力を増強する事も……。

…しかし……」

フリードリヒは納得しない。

一応名目は理解は出来る。

しかし何かしつくりと来ないのだ。

フリードリヒのその姿を見て担当者が自分の意見を言う。

「…戦力を増強し過ぎている……」

「そうだ、確かに国境警備は重要任務だ。

しかしこの平時にそこまでの戦力拡大は必要無い。

むしろあまりに露骨に軍拡すればトリステインはあらぬ疑いを持つてしまい、戦争を招きかねない」

その通り、軍拡はある程度は必要だが、あまりにやり過ぎれば隣国は警戒する。

事実トリステインも国境沿いの警備を嚴重にしているし、徐々にだが戦力を増強させている。

「ルドルフはトリステインとの戦争を欲しているのか？」

フリードリヒがその結論に至っても不思議は無い。

何せあからさま過ぎる程に軍拡をしているのだ。

「…確かにその可能性が濃厚ですね。

あそこまで戦力を増強しておいて何も無しでは、如何にルドルフ領が豊かになったとは言え膨大な赤字になるのは目に見えています」  
ウム、とフリードリヒも頷く。

確かにトリステインは弱い癖に昔の栄光を引きずってやたら高飛車だし、始祖の血筋を引いていない我が国を見下している。

そんな国を滅ぼしてやりたい気持ちは理解出来る。

それに我が国がその気になればトリステインごときの小国を滅ぼすのは容易い。

しかし現時点でトリステインを占領しても旨味が少ない。

かつては大国で経済も豊かだったが、今では貴族の人口比が高すぎて生産力が乏しく、腐敗が深刻でボロボロ。

まだ国の体制をなしているのもトリステイン王国から独立したクルデンホルフ大公国からの援助や借款で何とかなっているのが原状だ。オマケにクルデンホルフから金を借りているのは国だけではなく、トリステイン貴族のほとんどもかなりの借金をしている。

こんな国を支配しても逆に膨大な負債を背負うだけだ。

「ならばルドルフには自重するよう忠告しよう。」

侯爵になって舞い上がる気持ちも分かるが、何事もやり過ぎてはいかん。」と

「そうですね。」

このまま軍拡を続けていてはトリステインとの戦争に発展するかも知れませんし」

それで話は終わった。

命令ではなく、あえて忠告に留めたのはルドルフに強くは言えないからだ。

何せルドルフは毎年莫大な税と莫大な献金も同時にしてくれている。ルドルフ家からの献金によって帝国の財政も潤っているため、いきなり命令を出せば不興を買い、献金を減らされたり、無くされる可能性もある。

税金の支払いを止めるのなら幾らでも言えるが、献金はいくまで相手からの好意だ。

払わなければならないという義務は無い。

ルドルフ領は毎回莫大な税をちゃんと納めているし、莫大な献金も同時にしてくれているから無下には扱えない。

だから序列こそ公爵よりは低い、扱いは同等かそれ以上にしてい

る。

公爵に引き上げても良いのだが、特に何の戦功も上げていないルドルフ家をいきなり公爵にすれば他の公爵家からの反発は必至だ。

子爵から侯爵に引き上げる際にも多少の悶着があったのだ。

その時は皇帝命令を出して何とか抑えたのだが、流石にこれ以上は他の貴族達の怒りが爆発する恐れがある。

だから公爵には上げられない代わりにルドルフ家には色々と便宜をはかっているのだ。

「これでルドルフも納得してくれると良いのだが……」

フリードリヒはルドルフが自分の心境を理解してくれるのを祈るしかないのだった。

この時フリードリヒは思いもしなかった。

ルドルフが研いでいる牙が自分に向けられている事を。

その事に気付いた時には既に手遅れだった。

## ヴァリエール公爵サイド

ゲルマニアと国境を接するヴァリエール領は現在緊張状態にあった。

その原因はここ数年で勢いに乗り、勢力を拡大させているルドルフ家だった。

ルドルフ家は数年前迄は聞いたことも無い程に弱小貴族でしかなかった。

階級は子爵で、トリスティンから遠く貧しく、大した軍事力を持たない貴族を知らなかったとしても問題は無かった。

何せ自分の領の隣には積年のライバルであるツェルプストー家があるのだ。

ツエルプストー家とヴァリエール家は長年のライバルでトリステイン・ゲルマニア戦争においては幾度も戦い、負けたり勝ったりしている。

更にはツエルプストーの人間には何度も何度も先祖は恋人を寝取られたりしているので憎しみしか存在しない。

勿論私もツエルプストー家が、ゲルマニアという国自体が気に食わない。

始祖の血を引いていない癖に国を興して皇帝を名乗り、国を拡大させている。

浅い歴史しか持たない成り上がり者の分際でデカイ顔をしておって。自分達の格を自覚するべきなのだ。

さて、話が脱線してしまったが、今はルドルフ家の事についてだ。他国の事なのであまり情報は入ってこんが、噂によれば突然領内で大改革を行い。

税を引き下げたり、商売に精を出したりなど急激に発展をしているらしい。

その稼いだ金を使い、爵位や領地を新たに購入して現在は侯爵にまで上り詰めた。

ここもゲルマニアの気に入らない所だ。

神聖な爵位や領地を金で買うなどまさに野蛮な所業だ。

大体爵位や領地とはいかにその国に長年貢献し、戦争において祖国の存亡を救い、初めて認められるのだ。

それを大金を積んだからと言って簡単に爵位や領地を授けるなど言語道断だ。

だからゲルマニアは何時まで経っても野蛮なのだ。

~~~~~

（この後ゲルマニアについての悪口を30分続けた）

とにかく、このルドルフ家は大金を使って爵位や領地を買った結果、今ではゲルマニアでも有数の貴族になり、その領地は広大で我が領とも接するようになった。

つまりツエルプストー家とルドルフ家、この両家から我がヴァリエール家は神聖なるトリステインの国土を守らなくてはいけなくなったのだ。

ツエルプストー家とは長年に渡って睨み合っているものでどう動いてくるのかは分かるのだが、ルドルフ家については前例が無いので全く分からん。

情報によるとルドルフ家は子爵時代は戦争において目立った戦果を上げた事は無く、戦力も弱小に過ぎなかったようだ。

その戦力がたかだか2、3年で大きく変わる事は無いと思うが、急激な発展をしているので侮る訳にはいかない。

それに忌々しいことだがルドルフ家に侵攻するという事はゲルマニアを相手にすること。

とてつもなく屈辱的なことだが、今のトリステインではゲルマニアには勝てない。

戦力比が開き過ぎている。

だから口惜しいがルドルフ家に簡単には攻められない。

虎の威を借る狐め。

しかし、今現在ルドルフ領に侵攻する可能性が急浮上している。

その発端はルドルフ家が領内において急に徴兵を敷いて戦力を拡大し、国境付近で演習を度々行なっているためだ。

初めは小規模なものだったが、段々と大規模になって今では侵攻練習にも見える。

ゲルマニア側に王宮を経由して苦情を申し出ても「国境警備の強化のため」や「新たに爵位や領土を手に入れて浮かれているだけ」と返してくるだけ。

確かにいきなり侯爵になったせいで他の貴族に侮られないよう戦力を見せつけたいのは理解出来るが、明らかにやり過ぎだ。あれでは挑発しているようにしか見えん。

しかし、だからと言ってこちらから攻める訳にはいかない。

戦争になれば間違いなくトリステインは負け、ゲルマニアの軍靴によって国土を踏みつけられ、占領されるという憂いを迎えるだろう。6000年続いたこの国を終わらせる訳にはいかない。

かろうじてゲルマニア側が攻めてきたのならアルビオンやガリアに参戦を求める事も出来る。

そうなれば僅かだがゲルマニアに勝利出来るかも知れない。

代償として援軍を出してくれた国に何らかを差し出さなくてはならないだろうが、トリステインが無くなるよりは良い。

だからいくら挑発されようと我々からは攻めない。

アンリ陛下からも「絶対バカな真似はするな」と厳命されている。だから今は屈辱に耐えるだけだ。

なあに、ゲルマニアだって今トリステインとの戦争は望んでいない筈。

だからいずれはゲルマニアからルドルフ家に自重命令が下ってこの事態も集結するだろう。

そうして見ればルドルフ家も哀れな者だ。

成り上がり者の国の中でも成り上がり者だから周りから侮られないように必死に軍拡したり、威勢の良い行動をしているのだ。

侯爵になったとは言え、心は未だに弱小貴族のまま。

これを滑稽と言わずに何とする？

さあ、今日も哀れな者の行為に付き合ってやるか。

ヴァリエール公爵も全く思ってもいなかった。

まさか自分は全く相手にされていないとは……。

## 9 独立宣言

軍備増強から2年、俺は12歳になった。

何かトリステインのアングル地方のある村で大虐殺があったらしい。

表向きは反政府組織を襲撃した。とか言ってるけどゲーレン機関が調べた結果、ブリミル教を否定して新宗教を作ったからロマリアがトリステインに皆殺しにするよう命令したらしい。

やっぱり宗教って怖いねえ。

オマケに宗教が堂々と政治に口出して命令までするんだ。

ブリミル教は滅ぼすか掌握しないとウチもヤバイかも…。

まあ、色々悪い噂はあるけどウチの領はロマリアに多額の寄付をしてるから今のところ何も言ってこないがな。

どうやら今の教皇はヴィットーリオ程真面目じゃないらしい。

まあウチには好都合だけど。

軍はこの2年でかなり強力になった。

装備は行き渡るようになったし、兵士達の練度もかなり高い。

陸軍では機械化が進んで榴弾砲やロケット砲、重機関銃、迫撃砲など、第一次世界大戦クラスにまで上がっている。

しかし問題もある。

内燃機関の開発は出来たのだが、まだ実用化の段階に入っていないから輸送手段は機関車か馬車だ。

出来るなら実用化出来てから行動したかったが時間が足りないから今回は無しだ。

空海軍もかなり発展した。

前記した通り内燃機関は出来てないから航空機の生産は出来てないが、零戦をコピーしまくったから必要数に届いている。

パイロットも育成が完了したから問題無い。

何せ訓練で零戦同士で実戦させてるからな。

例えばパイロットが直撃食らっても死なないから幾らでも訓練出来た。おかげで全員がベテランになったからたかだか竜ごときに遅れを取る事は無い。

機銃弾の他に爆弾も開発したから多少の爆撃も出来る。

零戦では精々が50kgが60kgぐらいしか搭載出来ないけどこの世界なら威力は申し分ない。

艦隊の方もだいぶ揃った。

以前までは木造船と鉄鋼船の比率は木造船が上だったが、今では完全に逆転した。

舷側にしか大砲が無い戦列艦から、前と後ろに砲塔を備えた戦艦を建造して後はコピーで増やす。

それで何十隻もの大艦隊だって簡単に作れる。戦艦には分厚い装甲も張ってあるからこの世界の砲弾を食らっても何ともない筈だ。

鉄甲弾を食らわない限りは。

艦体は三笠級をベースにしているから砲も30.5cmや15.2cm等を積んでいる。

ちなみに副砲の数を原型より増やしてある。

主砲より副砲の方が出番多いだろうし。

西洋艦は戦艦の他にも輸送船を建造し、重い装備を前線まで輸送する。

空を飛べるから直接前線に行けるから楽で良い。

今ではの世界だったら精々が港まで運んで後は機関車が馬車だからな。

これで輸送力を補える。

大規模徴兵したせいで働き盛の男を大分失ったが、ルドルフ領の発展も順調だ。

インフラ整備は領の主要箇所は完了したし、新たに開拓したおかげで使える土地も増えた。

激増する人口に対して食料増産も上手くいってるから問題無い。

最近スパイが増えた。

急発展と大軍拡の情報を探ろうと国境を越えたり、隣の領から侵入してくるが、国境警備は一番厳重にしてるし、ゲーレン機関も探ってるからスパイ達は次々捕まっている。

逮捕したスパイは全員指輪を使って情報を吐かせた後は皆殺しにしている。

雇主を襲撃させる事も考えたけど、あまりにもスパイが寝返り過ぎると指輪がバレるかも知れないから基本的に全員情報を吐かせたら殺す。

ちなみにスパイを潜入させている所は1位が皇室、2位はゲルマニア貴族、3位はトリステイン、4位はガリア、5位はロマリアだった。

意外にもロマリアが低かったが、ロマリアにかなりの寄付してるし、ルドルフ領のロマリア神父や司祭達から問題ないと伝えられているからそんなには来ていないらしい。

まあロマリアの関心は自分達に敵意を抱いているか？ 異端なこと

はしていないか？　だからそこまでルドルフ領に興味は無いのかな？  
かなりの大口寄付者なら多少の事は目を瞑るだろうし。

そろそろ誤魔化すのも限界かな？

未だにトリステイン国境付近で大演習やってるし、最近は首都への  
侵攻演習も知られたらしいから疑って来ている。

あっちが軍を集結させる前に先手を打つでしょう。

突如ルドルフ領は帝政ゲルマニアからの独立を宣言、同時にドイツ  
帝国の建国を宣言。

そして同日、帝政ゲルマニアへ宣戦布告した。

宣戦布告理由としては帝政ゲルマニアが侵攻してくる前にこちらか  
ら先に攻めるためだった。

侵攻目標は隣にあるツエルプストー辺境伯領とゲルマニア首都の  
ヴィンドボナだ。

2方面作戦は戦力が分散してあまり良くはないのだが、先手必勝の  
理念から同時に攻める事にした。

何故ならツエルプストー領をほっとくと背後が危険だし、トリステ  
インが火事場泥棒のように侵攻してくるかも知れない。

何せルドルフ領はゲルマニアでかなりの戦力を誇っていた。

そのルドルフ領が独立した事でゲルマニアの軍力は急低下した。

現代日本で言えば北海道が急に独立したようなものだ。

周辺諸国から見れば垂涎もののチャンスだ。

ヴィンドボナの方は時間が経てば諸侯軍が集結して侵攻が難しくなる。

どんなに雑魚でも群れば厄介だ。

だから集まる前に中央を叩けば後は各領で散発的に反撃するだけだ。

大体各領の軍事力は多くても3000〜6000程度。

中には中央を落とせば臣従してくる勢力もあるだろう。

そうなれば後は簡単だ。

## ゲルマニアサイド

首都ヴィンドボナは混乱の渦にあった。

何故なら今日、突如ルドルフ領が帝政ゲルマニアから独立を宣言、そして同時にドイツ帝国の建国と帝政ゲルマニアに対して宣戦布告してきたのだ。

何せ独立されただけでも混乱するのに同時に宣戦布告までされたのだ。

旧ルドルフ領の情報を集めつつ、軍も集結させなくてはいけない。

「……やはりルドルフは独立を狙っていたか……」

ゲルマニア皇帝フリードリヒは頭を抱えた。

「最初はトリステインへの警戒のためだと思っていたが、最近ルドルフ領が独立するのでは？ という噂が流れたから探りを入れた途端に独立されるとは……完璧に出遅れたな……」

フリードリヒは枢機卿に言う。

「……はい、恐らくルドルフは今の領土を授かってから直ぐに準備していたようで、動きが恐ろしく早いです。」

我々は極最近まで疑いもしませんでした」

そう、最近まではそう思っていたのだ。

もしかして独立する気では？　考えた事はあるが何も証拠も無かった。

それよりもトリステインとの緊張状態の方に目がいつていたし、多額の献金のおかげで帝都の財政が潤い、ルドルフ領の事は大抵の事は目を瞑っていたのだ。

それらのツケが一気に来たらしい。

「それで、軍の集結はどうなっている？」

「はっ、国軍は現在集結は順調ですし、戦争準備を進めていますが、残念ながら諸侯軍の集結は間に合わない可能性があります」

「……やはり準備不足が祟ったか」

急な有事に備えて国軍は常に備えているが、各領を守る諸侯軍は集結にどうしても時間がかかる。

「まあ、今日宣戦布告されたが本格的な戦闘になるのはもう少しかかるだろう。」

それまでに出来る限りの軍勢を集結しなくては」

普通ならその考えで間違っていない。

空中を飛ぶフネや竜の航空部隊なら早く来る可能性があるが、主戦力は陸軍だ。

空中艦隊では攻撃力が高くて積める戦闘員はたかが知れる。

つまり攻撃した地域を占領する事は出来ない。

占領するにはどうしても大量の兵士が必要になる。

ハルケギニアで大量の兵士を動員するには陸路が一般的だ。

というか陸路以外無い。

フネを飛ばす風石は貴重だからあまり詰めれず、完全武装した兵士を満載すれば重量のせいで直ぐに定員オーバーになる。

だから大軍を派遣するのに向いてないので陸路に頼るしかないのだ。フリードリヒの考えは間違っていない。

ハルケギニア基準で考えるのなら。

## 10 独立戦争

ツエルプストー領に進軍するドイツ軍は先ずは航空戦力、零戦を投入した。

### ツエルプストーサイド

現在、ドイツとの国境周辺を風竜や火竜の竜部隊が守っていた。突如隣のルドルフ領が独立してゲルマニアに宣戦布告してきた。それも独立と宣戦布告を同時に。そのせいで旧ルドルフ領の隣にあるツエルプストー家は大混乱だった。

何せ自家は皮肉にもゲルマニアでも上位に入る貴族で、戦力もゲルマニア有数だ。

そんな有力な敵が隣にいるなら真っ先に攻めるのが普通。

だからツエルプストー辺境伯は混乱しても直ぐに立ち直り、領内の軍を集結させた。

本来ならそのまま国軍にはせ参じて合流すべきだが、間違いなく自領に攻め込んで来るのだ。

だったらここで少しでも時間稼ぎをして諸侯軍が集結出来るようにするべきだろう。

ルドルフ軍、現在はドイツ軍の戦力は未知数で、最近急激な軍拡をして戦力をかなり上げたらしいが、自家は永きに渡ってゲルマニアでトップクラスの戦力を誇っているのだ。

トリステインとの戦争ではあのヴァリエール家を相手に互角に戦ってきた。

たかだか数年でのしあがった奴等に自分達が負ける筈は無い。そう確信していた。

竜部隊を率いるエンリコは自分の使い魔である火竜を撫でながら敵を待つ。

旧ルドルフ軍は竜の数は少ないと聞いたから竜での攻撃は仕掛けて来ないと思うが、偵察として寄越すかも知れないし、フネの艦隊で来るのならその接近を味方に知らせに行く事が出来る。

だから彼等は国境周辺の空域で構えているのだった。

しばらく哨戒飛行を続けていると、前方から何かが来る。

それは集団なのか、黒い点々が沢山ある。

「前方から何かが接近、恐らくルドルフ軍の竜部隊だろう!!」  
戦闘用意!!」

部下達に戦闘準備をさせる。

まだ何かは見えないが、あの早さは風竜だと思った。

しかし、それは間違いだった。

敵との距離が詰まってくると、敵の姿が明らかになった。

「なっ…何なんだ、あれは……?」

思わずエンリコは口に出したが、竜部隊全員が思った事だった。

基本的に竜を使い魔にするのや、竜を乗りこなすのは風メイジだ。

風メイジは他のメイジと比べて目が良いので、遠くのものもハッキリ見える。

その彼等が見たのは理解不能な物体だった。

明らかに生き物ではない、何かが飛んでくる。

その姿はカヌーに翼を取り付けたかのような姿。

「…あんなのが飛ぶ筈は無い…」

誰が言ったのかは分からないが全員が頷く。

自分達の常識の範囲内で飛ぶと言えばフライをするメイジや竜、フネだ。

あんなよく分からない物体が飛ぶなんて考えられない。

人は理解不能な事態に陥ると安全装置が働くのか、停止してしまうのだ。

それが戦争のような非常時においても働いてしまう。

今回も彼等にとって理解不能な場面に出くわしてしまったので一様に停止した。

しかし敵はそんなことを考慮してはくれない。

彼等の常識外のスピードで接近し、気付いた時には敵の射程距離内にいてしまった。

部隊の一番端にいた風竜を敵が攻撃した。

銃が連続して発射しているかのような音が聞こえ、風竜や乗り手が穴だらけになり、墜ちていった。

それを見てエンリコ達は正気に返った。

「全員散会！！」

エンリコの命令に集まっていた部隊が離れ、個別に戦闘を始めた。

しかし、それは戦闘と呼んで良いモノでは無かった。

墜ちていくのは全部竜達、つまりは味方だけ。

こちらが火竜の猛烈なプレスで攻撃を仕掛けようが、敵は簡単にかわす。

いや、攻撃を仕掛ける前に既にかわしているのだから追い付いてもない。

一方、敵はどんな攻撃をしているのか分からないが次々と味方を落としていく。

火線のような物が当たったと思ったら味方は穴だらけになったり、バラバラになって死んでいく。

その姿に恐れをなした味方が勝手に逃走しようとしたが、敵は許さず、わざわざ追いかけていつて落とした。

そして落とした敵はまたこっちに来る。

敵の数は一向に減らず、味方はどんどん減っていった。

気付けば残っているのは自分と数騎だけ。

「くっ、一体何なんだお前は!？」

エンリコは叫ぶ。

心の底から思っている疑問を尋ねた。

しかしその返答は20m機関砲の連射だった。

機関砲弾がエンリコに命中し、エンリコは即死した。

彼の使い魔もエンリコ同様、バラバラにされて母なる大地に墜ちていく。

そんな彼らを上空からまたもやこの世界ではあり得ない鉄のフネの艦隊が横切っていく。

しかし艦隊にいる人間は彼らを見なかった。

彼らはこれから始まる初の実戦に向けて興奮と緊張状態なため、目に入らなかったのだった。

ツエルプストー軍本隊はルドルフ軍を待ち構えていた。

持てる兵力を総動員して待っていた。

普通なら個人で所有していないのだが、やはりそこはゲルマニアでもトップクラスの軍だからかフネの艦隊がいた。

艦隊と言っても数隻だけだから微妙だが、普通フネは国軍や王軍が所有しているのだから、ツエルプストー軍の規模の大きさを感じる。他にも地上には1万を超える兵士が待ち構え、敵との陸戦に備える。そして総司令官たるツエルプストー辺境伯も地上部隊の中にいた。

ツエルプストー軍全員でルドルフ軍を待っていると、敵の艦隊が見えてきた。

味方の偵察部隊が帰ってこなかった事から多分撃墜されたのだろう。そうツエルプストー辺境伯は考えていると、ツエルプストー辺境達もエンリコ達同様に止まった。

前方から来るのは明らかに大型のフネの艦隊だが、それだけなら別に驚きはしない。

艦数も自分達と同程度なんだが、艦様がまるで違った。

「鉄…で出来ている？」

ツエルプストー辺境伯は呟く。

「何故…鉄で出来ているのに浮かぶのだ…？」

誰かに聞くが、誰も答えられない。

ツエルプストー軍全員が呆然とただドイツ軍艦隊を見てみると、敵が発砲した。

「敵艦発砲…！」

部下が叫ぶが

「…案ずる事はない。まだ敵との間は5リーグはある。ただの威嚇だろう」

ツエルプストー辺境伯は正気に返った。

そう、大砲の射程距離は精々が2リーグ。

その倍以上の距離から発射しても当たる筈は無い。

そう、常識なら。

ダアアアアン…！！

敵砲弾は見事に味方に命中した。

「なっつ、当たっただと…？」

あり得ん…！！ 一体どんな魔法を使ったのだ…？」

ツエルプストー辺境伯がそう叫んでも間違っていない。

大砲の射程距離は2リーグという常識が覆されたのだ。

何かの魔法と考えても何らおかしくないだろう。

しかし敵はいちいち質問に答えてくれる筈もなく、無慈悲に15・2cm砲弾を撃ち込む。

最初は30cm砲弾を撃ち込もうと思っていたのだが、敵の艦数が数隻なので無駄と艦隊指揮官は判断して副砲での攻撃にしたのだ。しかし敵には副砲でも大きすぎたのか、たった数発も食らうとほとんどん高度を落としていく。

風石庫に命中して風石が漏れているのだろうか。  
最早戦闘行動は不能そうだが、一応止めを刺すために再び砲撃する  
すると艦体上部が吹っ飛び、落ちた。

そもそも木造船で鉄鋼船に挑むのが無謀としか言い様が無い。

例え奇跡的に向こうの砲弾が当たったとしても球形弾やぶどう弾な  
どの鉄の玉ではどうにもならない。

ただ弾かれるのがオチだ。

中には榴弾もあるらしいが、榴弾では近くにいる人員を殺傷するこ  
とは出来ても船を沈めるのは不可能だ。

オマケにその榴弾は作るのに魔法が必要だからあんまり数が揃わな  
い。

だからどうやってもツエルプストー軍の艦隊はドイツ軍の艦隊に勝  
てない。

大人と子供の殺し合いに等しい。

大人がライフルを持って防弾ベストを着て、子供は裸で水鉄砲だけ。  
勝てる訳が無い。

私は夢を見ているのだろうか？

目の前に広がる光景は我が艦隊の残骸や死体だらけ。

結局敵は一隻も墜ちることなく味方を全滅させた。

「…ルドルフ軍の空海軍がこれほど迄に強力無比だったとは…」

誰が思うだろう。

幾ら強いかも知れないと分かっていたとしても、これ程とは誰も思  
わなかった筈だ。

呆然していると敵の艦隊が降下してきた。

どうやら地上戦を始める気らしい。

よし、艦隊決戦については言い分けもしようがない程に惨敗だが、  
地上戦ならそうはならないだろう。

ツエルプストー辺境伯は激を飛ばす。

「皆の者、とうとう裏切り者との決戦が始まる！！！」

奴等ルドルフ家はゲルマニアに仇なす裏切り者だ！！！」

ここで我等が食い止めねば首都が危険に陥る！！！」

逆に食い止められれば国軍や諸侯軍も集結し、必ずや我々が勝利する！！！」

我等が忠義、あの裏切り者共に思い知らせてやるのだ！！！」

先程までの決戦は無かった事にし、これから始まる地上戦こそが決戦だとすり替えた。

しかしそんな考えが通じたのか、ツエルプストー軍の士気は上昇した。

そんな中でもドイツ軍の艦隊は降下を続ける。

ツエルプストー軍はドイツ軍の艦隊が着地して歩兵を吐き出すのを待つ。

しかしその願いは裏切られた。

ある程度降下したら艦隊は降下を止めた。

ツエルプストー軍は「何をする気だ？」と見ていると突然、ドイツ軍の艦隊が地上にいるツエルプストー軍に向けて発砲した。

ダアアン！！　ダアアン！！

固まっていたツエルプストー軍に直撃、甚大な被害が出た。

その砲撃を皮切りに、他の艦も次々7・6cm砲を撃ち始めた。

これは主砲は無理だが、副砲は下も撃てるように改良されていて、ガンシップも出来るようになっていた。

ガンシップより恐いのは、風石を積んだフネなら浮いたまま停止も出来るので逃げられない。

ゆっくりと移動してツエルプストー軍を殲滅して回る。

ツエルプストー軍もただ撃たれるだけではなく、逆に大砲で撃ち返す事もあるが、船底は特別分厚い装甲で覆われているのでビクともしない。

ツエルプストー家自慢の火系統の魔法を放つても弾かれて終わる。逆に魔法を使えば集中的に砲撃や機銃掃射を食らうのだった。

「おのれ卑怯な！！」

貴族なら貴族らしく正々堂々戦え！！！」

ツエルプストー辺境伯が喚くが、艦隊にいるのは全員軍人だし、「戦争は卑怯な者が勝つ」と教育されているので無視する。

しかしそれでも喚くので特別に15・2cm砲弾を撃ち込んで黙らせた。

黙らせるどこか跡形も無く吹っ飛んでしまったが。

ツエルプストー辺境伯の死を見て、次々とツエルプストー軍が敗走し始めるが、それを見逃すお人好しでは無いので追いかけてぶっ飛ばす。

1万から500人以下に減ったので、遂に艦隊は着地し、歩兵を吐き出した。

歩兵は微かに生き残ってた兵士達を始末し、そのままツエルプストー本家に向かう。

そして屋敷に到着したら降伏勧告を行う。

「既然大勢はついた！！」

大人しく降伏せよ！！」

別にどっちでも良いのでおざなりな降伏勧告だ。

そのせいか黙殺された。

降伏の意思無しと受け取り攻撃命令を出す。

榴弾砲や迫撃砲、重機関銃で僅かに残っていた警備達と一緒に屋敷を攻撃する。

屋敷は崩壊し、豪華な見た目から一気に廃墟に変わった。

残党狩りとして屋敷や周辺をくまなく搜索すると、逃げようとしたのかツエルプストー夫人と護衛や使用人が屋敷近くの森にいた。

何か夫人が「私は構わないですがこの者達の命は助けて下さい」と

か言っただけだが、兵士達は気にせず機銃で皆殺しにした。

司令官から「ツエルプストー家の関係者は皆殺しにしろ」という命令を受けているからだ。

まあその司令官も総司令官であるルドルフ皇帝に命じられ、ルドルフ皇帝は俺に命じられている。

貴族関係者を残すと後々面倒になるからな。

基本的にウチの領出身以外の貴族は皆殺しにする。

信用出来ないからな。

## 11 戦争終結

ツエルプストー領侵攻と同時に、首都への侵攻作戦も開始した。

陸軍と空海軍に分かれ、陸軍は陸路で首都までの敵の殲滅や各領地の占領、線路の敷設などの補給路の確保。

空海軍は首都まで一気に攻め込み、中央の占領と皇帝フリードリヒの抹殺。

ちなみに陸にも空海にも零戦がついているから制空権は独占出来る。ツエルプストー家以外はフネの艦隊を所有してないから零戦でも十分だ。

まあいざというときは高射砲で撃ち落とすがな。動きが鈍いフネを落とすのは容易い。

### ゲルマニアサイド

帝政ゲルマニア皇帝フリードリヒは急いでいた。何を急いでいるのかと言うと、諸侯軍の集結だ。

自分の直接の指揮下にある国軍の編成は何とか終了させたのだが、残念ながら数が足りない。

というのも国軍のほとんどが艦隊の指揮官や乗員だ。歩兵の数が少ない。

流石の国軍でも常時大量の歩兵などの正規軍を雇う金はない。だから歩兵はほとんどが諸侯軍に頼っているのだ。

一応国軍の方でも臨時徴兵をかけて数を揃えようとしているが時間が足りない。

何せただ徴兵しただけでは兵士にならない。

先ずは装備を与え、ある程度訓練をしなければ軍としての動きが来ない。

装備を与えただけで前線に行かせても逃げ惑うか勝手に動き回るだけだ。

だから最低限の訓練を施す必要があるのだ。

しかし敵はいちいち待ってくれない。

敵国となったドイツ帝国は何年も前からこの戦争に備えていたのだ。準備は出来ている筈。

だから宣戦布告してきたからには間違いなく大軍でこちらへ攻めてくる。

恐らく最初は隣のツエルプストー領を攻めるだろう。

ツエルプストー領はゲルマニア国防の要だ。

そんな敵を真つ先に叩かない訳は無い。

ツエルプストーがどれほど時間を稼いでくれるか分からないが、それほど時間をかけずにこっちに来るだろう。

旧ドルフ軍にどれほどの戦力があるのかは分からないが、いきなり独立して宣戦布告までしてきたのだ。

かなりの自信がある筈。

しかしツエルプストーもそう簡単には負けんだろう。

艦隊を所有しているし、陸軍もかなりの数を揃えている。

もしかして一月以上も持ちこたえられるかも知れん。

それだけあればある程度諸侯軍も集結するだろうし、徴兵した兵士達も訓練を修了出来る。

そうなれば反撃にも転じる事が出来る。

恐らくその前に艦隊で首都を攻撃しにくるだろうが、こちらもただやられる訳ではない。

既に艦隊の編成は終了して戦闘体制も整った。  
今は出撃して旧ルドルフ軍を待つ。

確かルドルフ領は2年程前から何隻かフネを購入していたから既に訓練も終了し、それらを投入してくるだろう。  
それなら勝機はある。

何せこちらは100隻以上の艦隊を誇り、最新のフネが多数を占める。

ルドルフ領に売り払ったフネは旧式だから最新艦には勝てまい。  
量、質ともに勝る国軍が負ける筈は無い。

ドイツ帝国サイド

艦隊の旗艦であるボリス級戦艦にて、皇帝ボリス・フォン・ルドルフが演説を始めた。

「遂にゲルマニア国軍との決戦が始まる！！」

奴等ゲルマニアは我等の独立を認めず、我等を殲滅せんと準備している！！！！

奴等を、フリードリヒを殺せ！！！！

奴を殺れば後に残るは雑魚ばかり！！

別動隊はツエルプストー領侵攻を既に始めている！！！！

我々も遅れることなく戦果を上げるのだ！！！！

自由と主権を勝ち取るため、必ず勝利するのだ！！！！

ドイツ帝国万歳！！！！！！

「ドイツ帝国万歳！！！！！！！！！！」

「皇帝陛下万歳！！！！！！」

演説が終了し、士気を上げる事に成功した。

まさか誰も思わないだろう。

ボリスの演説内容は事前にハンスが書いた原稿に沿っていたとは。

多少ボリスもその場の空気をよんでアレンジもしたが、ほとんどはハンスが書いた通りに演説したのだ。

ちなみにハンスは旧ルドルフ領から出なかった。

何故ならどちらかの艦隊に乗ってもしも予測不能な事態に陥って死亡するかも知れない。

だから一番安全と思われる旧ルドルフ領から出ない。

今は核シェルター並みに強化した要塞に引きこもっている。

報告や命令伝達については、無線技術は完成はしているがまだまだ未熟で雑音が激しいし、遠くまで届かないので電信を使っている。

大まかにだが戦況を把握している。

ちなみにツエルプストー領に侵攻した部隊から決戦が終了したと連絡してきた。

今から残敵掃討とツエルプストー家に攻め入るらしい。

間もなく終わるだろう。

## ゲルマニアサイド

哨戒飛行に出ていた風竜部隊が戻ってきて、敵艦隊の接近を報告してきた。

「敵艦隊の艦数はおおよそ50隻程でした」

「なっ、50隻だと!？」

フリードリヒは驚愕する。

自分達の掴んでいる情報はゲルマニアが売った数隻だけだ。

どうやって50隻も揃えたのか？

数隻程度なら自分達で建造する事も出来るだろうが、10隻以上も建造するのは2年では足りない。

「一体どうやって揃えたのだ…？」

「もしかトリストインかアルビオンから買ったのか？」

それしか考えられない。

トリステインならゲルマニアの戦力低下をさせるために独立を支援している可能性も考えられる。

もしくはアルビオンがトリステインの要請でフネを売ったのかも知れない。

だとしたら不味い。

「そうになると敵はルドルフだけではなく、トリステインやアルビオンも加わるかも知れん」

流石に2国を同時に相手をしながらルドルフと戦うのはキツイ。負けるかも知れないのだ。

フリードリヒは知らない。

重要なのは数ではないということ。

哨戒部隊は遠目に確認しただけなので敵のフネが鉄鋼船というのは確認出来なかった。

変わったフネだな。とは思ったが、自分の常識を捨てられないので脳内で木造船に変換してしまったのだ。

ドイツサイド

監視員が大声で叫んだ。

「前方に敵艦隊視認！！！」

ゲルマニア艦隊です！！！」

その言葉を聞き、指揮官が叫ぶ。

「総員、戦闘配置に就け！！！」

指揮官の言葉に従い、全員が配置に就いた。

全員が興奮と緊張をしている。

何故なら全員実戦は初めて。

厳しい訓練はしてきたが、やはり実戦は空気が違った。

「いよいよだな」

「ああ、実戦だな」

15・2cm砲を操作する二人は小さい声で会話する。

「まああんだだけ厳しい訓練しまくったから実戦だろうと楽勝だろう」  
「そうだな。」

相手はゲルマニア艦隊。みんな木造船だ。

…逆に負けたらヤバイな…」

「…ああ、確かに。」

指令部に殺されそうだ……」

二人が話していると段々敵との距離が詰まってきた。

距離6リーグに近付いた時

「砲撃始め！！！」

命令が響いた瞬間、主砲以外の全部の砲が鳴り響いた。

ダアアアアン！！！！

デカイ音が艦隊中に響いた後、沈黙が流れる。

そして少しした後、敵艦隊が爆発した。

「よし、命中！！！」

艦隊中に歓声が上がった。

「まだ一発だけだ！！！！」

続いて二発目装填！！！」

上官の言葉に全員が気を引き締める。

上官の言葉通り、まだ始まったばかりなのだ。

ゲルマニアサイド

ドイツ軍では始まったばかりだが、ゲルマニア軍は最早終わりそうだった。

「シャルル・マーニユ号墜落！！！」

自艦も危険状態です！！！」

ドイツ艦隊との戦闘が始まったのはほんの少し前だった。

しかし、今やゲルマニア艦隊の半数が戦闘不能や墜落した。

敵の信じられない程の遠距離一斉射から始まった戦闘は完全なるワ  
ンサイドゲームだった。

根性があるフネは何とか接近するのだが、その前に集中放火を受け  
て落とされる。

逆に逃げたとしても集中放火を受ける。

見た目イジメだった。

そんな艦隊を下で見ているフリードリヒは茫然としていた。

フリードリヒ以外の指揮官や兵士達も茫然とするだけ。

確かに圧勝出来るとは思わなかったが、これ程までの差は考えられ  
なかった。

「……何故あんなにも遠くから撃てるのだ……？」

王の疑問は全員の疑問だった。

近いフネでも4リーグは離れている。

オマケにあんなに遠いのに味方のフネを次々沈めていつている。

何故あんなに遠いのに威力を保てる？

様々な疑問は尽きない。

しかし分かっている事もあった。

それは、艦隊決戦は負けるという事だ。

艦隊決戦が終了した。

結果は言うまでもない。

ドイツ軍の圧勝だ。

少し離れた所には味方のフネの残骸や死体が転がっている。

微かに生き残りもいたが、戦闘は終了してないので救出活動は出来ない。

これから陸上戦が始まるのだから。

陸上戦については多少自信があった。

何故なら持てる限りの時間を費やし、土系統のスクエアクラスが陣地を構築したのだ。

防御拠点は鉄で固めてあるし、攻撃拠点には火のスクエアやトライアングルなどの攻撃に長けたメイジや、大砲や銃で固めた平民の部隊もいる。

空中決戦では惨敗したが、陸上決戦では勝利出来るかも知れない。それに、勝利出来なかったとしても時間さえ稼げれば諸侯軍が援軍としてやってくるからそれで勝てば良い。

そのため、陣地も防衛に力を入れているので防御力は高い。

如何に旧ルドルフ軍が強大でもこの陣地を攻略するのは困難必至である。

そう自信を持っていた。

敵の攻撃が始まる前までは……。

ドイツサイド

艦隊決戦に勝利したドイツ軍は次なる決戦として輸送船に満載していた陸戦隊や歩兵達を降ろす準備を始めた。

しかし、その前にやる必要がある。

「制圧射撃用ゝ意！！！」

その言葉に、主砲が動き出した。

30cm砲が動く様は圧巻だった。

「目標、敵防御陣地！！！」

彈種、榴彈!!!」

その指示通りに狙いがつけられ、装弾した。

「奴等に恐怖を味あわせろ！！」

砲擊開始!!!」

その言葉の直後、各艦の前方の30cm砲2門が爆発したような音を鳴らす。

ダアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!

大して遠くない所を撃つためか、着弾音がハッキリと聞こえる。

ドガアアアアアアン!!!!!!

という凄まじい音とともに、あんなに堅牢そうだった敵防御陣地が破壊された。

# ゲルマニアサイド

陣地中にとんでもない爆発音が鳴り響き、煙が上がった。

煙が晴れてそこにあつた光景はまさに地獄。

陣地は破壊されその役割を果たしていない。

陣地の近くにいた味方の死体はバラバラになった物や中途半端に残っている物。

生存者もいるにはいるが、大抵は腕や足を失ったり、陣地や砲弾の破片が突き刺さって瀕死の状態。

むしろ死んだ方がマシかも知れない光景が広がっていた。

「……一体……何が起きたのだ……？」

皇帝の言葉に答えられる人間はこの場にはいなかった。

全員が地獄のような光景を見て唖然としたり、吐き出している者もいた。

この世界でここまでの威力のある兵器は存在せず、精々がスクエアクラスの広域魔法ぐらいだ。

確かにスクエアクラスのメイジが何人かで攻撃すれば悲惨な状態にはなるが、ここまでの光景はなかなか無い。

騎兵同士で戦うのが主なハルケギニアで、火力同士の戦いは必然的に少ないので啞然とするのは仕方がなかった。

しかし敵はそんなことは知ったことか。と言わんばかりに砲撃を続ける。

その砲撃によってまたもや陣地は破壊され、着弾付近では地獄が始まる。

ゲルマニア側もただやられている訳ではなく、何とか攻撃を仕掛けるが相手は空中。

攻撃が届かない。

しかし中には勇気のある者がいるらしく、竜やグリフォンに乗って勇敢にも艦隊に勝負を挑む貴族もいるが、機銃に迎撃されたり、上空で待機していた零戦によって八エミたいに叩き落とされる。

中には攻撃に成功してプレスを命中させて乗員を死傷させる事に成功したが、代わりに復讐として集中放火を食らい、竜諸ともバラバラになって撃墜された。

この悲惨な戦況に最早これまでとフリードリヒは退却を始めるが、その直後に30cm砲弾の直撃を食らい、死体すら残さずに消えた。王が死んだ事によって本格的にゲルマニア軍は敗走し始めた。オマケにその敗走も秩序だったモノではなく、自分勝手にバラバラに逃げているだけだった。

ゲルマニア軍の敗走を確認したドイツ軍は残敵掃討として副砲にて掃射を開始した。

僅かに生き残っていた者達も母なる自然に帰っていった。

首都ヴィンドボナへ到達したドイツ軍は首都入城前に降下し、兵士を降ろして堂々と行進を開始した。

軍楽隊の演奏をバックに行進するドイツ軍を市民は初めは恐怖から目を背けたが、段々とその堂々とした格好良さに目を向ける市民も現れてきた。

国旗をたなびかせ、全く乱れることなく秩序立って行進する様はどこか人間を引き付ける。

強さを感じるからか？

上空にはドイツ軍の艦隊も飛んでいる。

「ああ、ゲルマニアは負けたのか…」

と誰もが確信した。

王城に到着したドイツ軍は形式通りに降伏勧告を実施。

ツエルプストー家のように拒絶されるかと思いきや、直ぐに降伏を受諾。

王妃や王子達が出て来てドイツ軍に膝をついた。

これでドイツ独立戦争は終結した。

ゲルマニアの敗北を発表し、諸侯に対して臣従命令を下す。

しかし大抵の旧ゲルマニア貴族は臣従せずにそれぞれ独立して反ドイツ感情を露にするが、中には臣従命令を受け入れる貴族もいた。

まあほとんどは戦力が乏しく、戦っても勝てる自信が無いから服従してきた奴等だった。

中には有力貴族でそれなりの戦力を有しているが、時代の流れを感じてこちらに来る頭の良い貴族もいた。

そいつらは何とか新たな皇帝に取り入ろうと親父に謁見して様々な献上品などをするが、そんなの聞く気が無い俺はそいつらを指輪で支配した。

処刑しても良いんだけどまだ早い。

今処刑すれば臣従しても助からないと思われたら面倒だ。  
だから頭の良い奴等は支配しとく。

邪魔になる可能性が高いしな。

バカは生かしておいて良いや。

後々何か罪をつけて適当に処分すれば良いし。

独立成功して先ずやるべき事は旧ゲルマニア平定だ。

独立した領もあるけど承認してないから反乱勢力でしかない。

他の国が承認なんて面倒なことする前に潰す。

と言ってもやることは前と同じ。

零戦や艦隊を差し向けて主戦力を崩壊させ、反乱を起こしたとして  
その領の貴族を皆殺しにする。

そして後から来た陸軍が残敵掃討や線路を敷設して補給線を形成、  
そして占領。

それを1ヶ月続けて旧ゲルマニアを平定して正式にドイツ帝国とな  
った。

各国にドイツ帝国を承認して貰うためにロマリアへ莫大な寄付と  
古い教会の改修や新たな教会の建設費用も出した結果、ロマリアが  
正式にドイツ帝国を承認。

そのため、仕方なく他国もドイツ帝国を承認した。

宗教が何よりも力を持つハルケギニアで、ロマリアが承認した国家  
を承認しないというのは異端認定されかねないので従うしかない。

こういう時だけロマリアって便利だな。

## 12 新体制

戦後処理が大体終わり、国内が安定してきたので新体制を打ち出す。

6000年続いた地方分権制度を廃止し、中央集権体制への移行を発表。

国内の貴族の領地と軍を取り上げ、代わりに爵位に応じた屋敷を首都に建設し、そこに移住するよう命じた。

ちなみに生活費としては年金を支払う。

これまた爵位に応じてピンキリがあるが、それなりの額だ。

勿論、領地を所有していた頃に比べたらかなり少ないが、ある程度の豪華な暮らしは維持出来るだろう。

更に廃領置県を実施し、各領は県になり、中央から派遣された役人が管理することになった。

ちなみに県知事となる役人は全員指輪で支配しているから中央には絶対服従だ。

勿論これには貴族達は猛反発。

今までの既得権益を簡単に放棄する筈は無い。

しかし彼らは劣勢だった。

何故なら先の独立戦争でドイツ帝国に臣従しなかった貴族達は処刑されるか皆殺しにされたから反対派はほとんどいない。

生き残っているのはドイツ帝国にいち早く臣従を誓った貴族だけ。

だから全体で言えば1割程度しかない。

そいつらを見捨てても良いのだが、反乱勢力になる可能性が高いの

で国家反逆罪として全員処刑した。

中には僅かに残ってる領軍でドイツ帝国軍に戦いを挑んだが、多勢に無勢、敵うわけもなく散っていった。

これで反対勢力は無くなった。

残ってる貴族はルドルフ領出身者だから何とでもなる。

若い奴等には義務教育や士官学校で洗脳教育を施したからルドルフ家を支持する。

年寄り共は反逆者として処分すれば良い。

叩けば幾らでも罪は見つかる。

平民を無礼打ちしたとか、脱税していたとか、簡単に有罪に出来る。やっぱり悪い事はしちゃダメなんだよ。

いずれ必ずツケを支払う時が来る。

まあ俺は踏み倒すけど……。

後は徐々に貴族の数を減らせれば良い。

貴族なんて消費するだけで生産性の無い職業だ。

軍なら抑止力になるし、有事の際に必要なだが、貴族は別に無くても良い。

代わりは幾らでもいるからな。

職業選択の自由を施行して貴族から商人や農民、芸術家、職人などになっても良い。とした。

貴族の特権は段階を踏んで減らしていくから、いずれは貴族を止めたがる奴が増える筈。

いきなり貴族制度を無くす事も出来るが、すると国内だけではなく、国外も五月蠅そうだからな。

一応貴族制度を残しているからまだ言い訳も通じる。

別にブリミル教を否定した訳じゃないからロマリアも騒ぐ事は出来ない。

何せ偉大なる（笑）始祖ブリミルは貴族制度を破壊してはいけな

なんて言っていない。

だからドイツ帝国を異端審問にかけろ事は出来ない。  
逆にドイツ帝国はロマリアに多大なる貢献をしているんだから手は出せない。

出せば寄付はなくなってロマリアの国庫は空になる。

ヴィットーリオならまだしも、今の教皇にそんな自信もやる気もない。

とりあえず面倒事は終わったから内政に専念しよう。

税金は領地によって額が違ったが、これからは税率を一定にして低くする。

ちなみにまだ戦後の混乱期だから1年は無税とした。

次に戦争で荒れ果てた土地を整備し、壊れた建物や古くなった建物もこのさい解体して新しく建て直す。

家を失ったという平民達には仮設住宅として土のスクエアメイズが練金して作った簡単な家をコピーして建てる。

ちゃんとした家はローンを組ませて建てる。

勿論金利は低く、場合によっては無利子だ。

家を与えたら次は職だ。

ルドルフ領以外はほとんど未整地な道路や上下水道が無いから公共事業で雇用を増やしまくる。

ホンゴウ商会も次々出店してまた雇用を増やす。

職に就けたら得た給料で買い物させる。

ホンゴウ商会の安くて質の良い商品を買いまくらせて経済を回す。

何せ今は無税だから金は減らないし、商品も安い。

これなら消費は落ち込まない。

せつかく無税にしたのに消費が落ちたら無意味だからな。  
買い物を買えば来年になって税が復活しても人々は買い物をする。  
手に入れた楽しみを簡単には失えないからな。

戦争によってかなり人口が減っただろうから人口増加のために1  
父多妻制度を導入。

今まで貴族や王族の特権だったが、平民も出来るようにする。  
更に子供を一人生む毎に助成金を交付し、税も安くなる。

とりあえず人口を増やさないと経済が発達しないし、軍事力も低下  
する。

使えるようになるには16年以上かかるが、必ず必要になるから先  
行投資だ。

人口増加に向けて食料増産も進める。

旧ゲルマニアは土地が有り余っているから幾らでも農地出来る。  
地方の開拓が進んでないのが面倒だが、土地が必要になるから開拓  
部隊を多方面に派遣する。

この部隊に火や風と言った攻撃系のメイジを使う。

出来るなら魔法も管理出来るように免許制にしようかと思つたが、  
それをやると他国が騒ぎそうだからな。

特にロマリアは「始祖ブリミルがもたらした魔法を制限するなど何  
事か!？」とか言つてきそう。

だから制限はしないが隔離する。

例え地方で反乱を起こしても勝てるし、逆に魔法の制限がやりやす  
くなるから好都合だ。

軍事力増強のために兵士の数を増やしたいのだが、逆に徴兵した兵士達の兵役が終わったので名誉除隊として退役金や再就職先を紹介して解放した。

本当はしたくないのだが、2年という契約だったし、生産力増強のためにやむを得ない。

しかし完全に辞めさせた訳ではなく、予備役として有事に備えて定期的に訓練する。

これならいざというときに戦力になる。

徴兵制は終わったので志願制に戻す。

平民に優しい国作りをしているから平民にも愛国心が生まれ、入隊希望者はかなり多い。

コイツらを兵学校や士官学校に入れて洗脳教育や近代軍としての教育を施す。

兵器技術も向上させる。

内燃機関の開発がまだ未熟だから何とか使えるエンジンを開発しなくてはならない。

零戦のエンジンがあるから基本は分かるのだが、こっちの世界の技術レベルが追い付いてないので真似が難しい。

とりあえず今は基礎技術レベルを上げなくては。

半自動小銃の開発も進んでいる。

ボルトアクションライフルでもこの世界ではかなり強いが、やはり魔法の恐怖が強いからもつと発展させなくてはならない。

拳銃でもリボルバー式から自動式に変えるなどして歩兵戦力を向上させる。

他にも榴弾砲やロケット砲の射程を上げて優位性を広める。  
まだ牽引する車両や自走式に出来ないから機動性はイマイチだ。

教育レベルを高めるためにドイツ帝国全体で義務教育制度を開始。  
小学校を建設しまくって読み書きや基礎計算、理科、社会など基本的な勉強と洗脳教育を6年行う。

今までは2年だったが、生活レベルが向上して小学校程度なら通わせるだろうし、その程度の知識が無いと困るから小学校卒業は義務とした。

他にも中学、高校、大学も建設した。

国家運営や研究などで知識が無い奴は使えないから先ずは全体のレベルを上げる。

金が無くても成績が良ければ無利子で奨学金を受けれるし、かなり難しいが試験に合格して成績を維持出来れば授業料を免除する大学も建設した。

これでハルケギニアで一番賢い国になるだろう。

政治体制に変化は無いが、貴族体制は大きく変えたから更に貴族の権力を削ごう。

現代のように様々な省庁を開設した。

その省庁には別にメイジではない平民も優秀な者なら入れる事にした。

ていうか政務に魔法なんか使わないからメイジの必要性は必然的に低下する。

最初は教養の観点からどうしても貴族寄りになるが、今の教育体制なら何れは平民中心になるだろう。

しかし、そんなメイジが大活躍する省も存在する。  
それは環境省だ。

大量生産、大量消費時代が間もなく訪れるから、それに従って必ず  
環境問題が浮上する。

産業革命に必要な石炭や原油については北部開拓の際に発見して採  
掘を始めているから問題無いが、大量のゴミや排水が出るからそれ  
を練金して浄化するためにメイジの量産中だ。

まだ環境に配慮するだけの技術が無いからしばらくはメイジに頼る  
面が大きい。

何か他の二次小説では環境を配慮してか、火石や風石で動く機関を  
開発しているが、残念ながらそんな技術は無いから現実世界に習っ  
ている。

だから燃料に石炭や石油を欠かせない。

もしも自然を気にせず破壊し続ければ水の精霊がキレて攻撃してく  
る可能性がある。

だから環境にはかなり配慮しなくてはならない。

今はしばらく内政に徹しよう。

トリステインなら今攻めても簡単に勝てるが、今殺り合っても無意  
味だ。

まだルイズ生まれてないから虚無の使い手が分からなくなる。

始祖の祈禱書を押さえたとしても使い手を押さえないと不安だ。  
だから今は何もしない。

しばらくは平和な時代が続くだろう。

表面的には。

### 13 表面上の平和

独立から3年、俺は15となった。

以前のゲルマニアだったら魔法学院に入る年だが、魔法学院は解体され、今では魔法大学として魔法の安全な使い方や危険性を教えている。

唯一マトモに教えているのは治療系や錬金など実用的な魔法だけ。攻撃魔法は最終学年になって試験や適正に合格しなければ習えない。ちなみに大学以外での魔法の習得は違法とされている。逮捕されれば魔法の使用を認められず、懲役刑もつく。犯した内容次第で死刑もあり得る。

最初は制限しないつもりだったが、やはりメイジによる傷害や殺人事件が後を絶たないので多少制限した。

まあ、国に従ってればそんなに制限されないからまだ良いだろう。

トリステイン王国でアンリエッタ王女が生まれた。

アンリエッタが生まれたという事はギーシュとかも生まれたのだろう。

主人公のサイトも生まれただろうが、アイツがこの世界に来ないようにするから関係無い。

アイツは現実世界にいれば良い。

多分そっちの方が幸せだろう。

少なくとも死ぬような目には遭わないし。

一応他国の祝い事なので祝いの手紙を書かせた。

別に同盟国じゃないけど一応まだ戦わないのでギスギスした感じは出さず、友好的に接する。

しかしトリステインにはその思惑が分からないのか、公然とドイツ帝国を非難や見下す貴族が大多数だ。

貴族が他国を貶すという行為はかなりヤバイと理解出来ないのか？  
こっちがその気なら国際問題に発展させて宣戦布告理由にもなるぜ？  
何時まで何百年前の栄光を引きずるんだよ。

もしかしたらトリステイン貴族よりドイツ平民の方が賢いんじゃない？  
多分あつちは貴族でもロクに教育受けて無さそうだし。

ドイツと真面目に貿易しているのはガリアぐらいだ。

トリステインと商売出来る訳無いし、アルビオンはトリステインとの同盟国だからトリステインとの関係を重視してドイツと貿易しない。

ロマリアは貿易ではなく一方的に要求しかしないから適当に寄付して黙らせる。

一方ガリアは急成長しているドイツの情報を探るために積極的に貿易してくる。

やっぱりガリアはまだマシらしいな。

心では見下しても表には出さずに交渉してくる。

まあこっちは技術をバラすつもりは無いから基本的にガリアとの貿易で輸出するのは食料や衣料、日用品などだ。

兵器類や鉄道などは軍事機密として公開してない。

ちなみに他国の貴族がドイツに入るには杖を携帯してはいけない。

杖は入国時に預かり、出国時に返す。

または携帯しても良いが、常に監視が2名つく。

この2つを選ばなければならない。

後者を選択してドイツ国内で違法行為を行えば即逮捕される。

その場合は祖国に送還せず、ドイツ国内にてドイツ憲法の定めた罰を受ける。

それが嫌なら来るな。

と伝えてあるのでメイジはあんまりドイツに来ない。

他国から猛烈な苦情が来たが、内政干渉だと突っぱねる。

幾ら抗議しても他国の決めたことだからな。

簡単に覆らない。

例外的にロマリア神官は杖を携帯しても許される。

流石にロマリアは優遇しないと面倒だからな。

でもドイツ国内の神官達は支配下にしたから中からは情報は漏れない。

外から来る場合は護衛や接待として監視をつけている。

ちなみに他国との国境に防御陣地を築き、密入国や侵略を防いでいる。

最初是要塞線でも築こうか考えたが、そう遠くない未来に他国に攻め入るんだから簡単な陣地にしといた。

簡単と言っても密入国を防ぐために鉄条網や塹壕、金網、監視塔を設けているから侵入は難しい筈だ。

独立成功してから他国のスパイが激増した。

一番増えたのはガリアだった。

やっぱ目をつけられたか。

まあ隣国が急に変わったんだ。警戒するのはむしろ当たり前。

観光客に紛れて杖を隠し持ち、機関車を調べようとしていたり、軍事施設や研究施設に潜入しようとしたり、様々な工作を受けた。

流石に観光客に化けるのを阻止するのは難しいが、施設潜入は防げ

ている。

警察やゲールン機関が血眼になってスパイを探しているから何とか捕まえ、そいつを支配して情報を全部吐かせたら始末して他のスパイを一網打尽にしている。

おかげで検挙数は毎年右肩上がりだ。

いい加減諦めるよと言いたくなる程だ。

逆にこっちもスパイを潜入させている。

他国でスパイと言えばメイジだが、ウチは別にメイジである必要は無いので農民や町民、商人に化けてかなりの数が潜入している。

出来るなら戦国時代みたいに中枢に潜入したいが、中枢はその国の貴族で固められているから入る余地が無い。

何故か地位が上の奴はほとんどが貴族だ。

貴族でないメイジは下っぱしかやらせてもらえない。

これが貴族社会の弊害か。まあスパイが潜入しにくいからあながち間違っちゃいないか？

貴族に能力があればな。

やっぱり家柄だけで無能貴族も中枢にいるらしい。

そこが微妙なんだよな。

貴族のレベルを上げればスパイが潜入しにくい良い制度なのだが、実際は無能の集まり。

難しいねえ。

技術レベルもかなり上がった。

前まではロクなエンジンが無かったから移動や輸送には鉄道やフネを使っていたが、しかし今は自動車用エンジンを開発したので車で運べる。

しかしまだ技術レベルが低いせいで現代のトラックより積載量が低い。

精々１トン程度が限界だ。

まあ、これを基に開発を進めていけば榴弾砲を牽引したり、自走砲も出来るだろう。

車が完成したので戦車も開発した。

まだ菱形戦車みたいな初期の戦車しか出来ないが、これから発展するだろう。

しかしまだ装甲が薄いし、機動性が低いから実戦には出せない。

このままじゃメイジの魔法に負ける可能性が高いしな。

ロマリアにタイガー戦車があるかも知れないが、流石に戦車を盗むのは難しい。

正攻法で行ったとしてもかわされるか疑われて面倒になる。

まあ、良い。

自分達で開発すれば良いのだ。

どうせアイツ等使い方が分かんないんだから脅威にはならない。いずれロマリアを滅ぼす時に接收すれば良い。

半自動小銃も完成した。

これで連射力が上がって通常戦力も向上した。

今は対ゴーレム兵器としてロケットランチャーを開発中だ。

別に榴弾砲や大砲でゴーレムを碎けるが、歩兵にやらせた方が楽で良い。

さてと、そろそろ動き出すか。

国内は安定したし、新たな兵士達の教育や訓練も完了したし、新兵

器も開発した。

ハルケギニア統一に動こう。

来年になれば多分ルイズが生まれるから先ずはトリステインだ。ルイズがいらないんならトリステインに価値は無い。

だからわざわざ待つていたのだ。

散々こちらをバカにしてきたのだ。

そろそろ報いを受けて戴こう。

でも宣戦布告理由がイマイチなんだよなあ…。

他国貴族に公然とバカにされたからその制裁としてでは弱い。

別にこんな文明社会なんだから帝国主義にのっとって侵略すれば良いのだが、このハルケギニアはそういう思想は無いからか通じない可能性が高い。

全部を相手にしても勝てるのだが、まだジョゼットが生まれてないからガリアを滅ぼすことは出来ない。

ガリアを滅ぼすのはジョゼットを手に入れ、ジョゼフを殺した後じゃないと無意味だ。

だから先ず相手にするのはトリステインだ。

まあトリステインと戦争になったらアルビオンも攻めてきそうだが、それならそれで良い。

ティファニアは既に生まれているだろうから手に入れるために攻める価値がある。

しかし問題もある。

それはティファニアの母親だ。

母親は純粋なエルフ。

原作では簡単に死んだらしいが、他国からの侵略なら反撃してくる可能性がある。

エルフならカウンターを使えるだろうから、もしそうならどうしようも無い。

毒ガスとかを使えば殺せる可能性があるが、それをやるとティファ

ニアも巻き添えになるかも知れない。

……いや待てよ？

カウンターって多分常時張ってる物じゃ無いだろ？

精霊の力を借りてるからって常時張り続けられれば疲れるし、  
精霊をこき使ってる事になるからエルフはしないだろう。

じゃなきゃ原作で（恐らく）メイジに殺される筈は無い。  
ならなんとかイケるかも知れない。

## 14 不平等条約

1年経ち、俺は16になった。

トリステインのヴァリエール家に三女ルイズが生まれた。

にしても三人も産んで全員女って貴族の役目果たしてないな。

貴族の役目は家を継ぐ男児を生むことだ。

女兒では別の家から婿を迎えて子供を作らせなくてはならない。

ハッキリ言って失敗だ。

人質や交渉には使えるがそんなにはいらぬ。

オマケに次女は高い治療費を払い続けなくては生きられない欠陥品だ。

更に最悪なのは一番重要な長女は性格に難がありすぎて使えない。

最後に期待の三女は魔法が使えない。

マジ救い無いよ。

ていうかこれの原因は妻にあると思う。

戦うことしか能が無いから子供に魔法技術は教え込むのに、一番大事な事を教えてない。

それは公爵令嬢としての自覚だ。

長女は自分のプライドにしか興味が無いからせつかくの縁談をご破算にし、次女は甘やかされてるのを良い事に引きこもって世捨て人になる。

三女は全部が悪い。

バカ過ぎる。

公爵家長女なら家を存続させるためにプライドなんか捨てて結婚して婿に来て貰わなければならぬのに、自分のことしか考えないか

ら婚約者に逃げられる。

次女は自分が使えないと分かったなら自殺するか家を出るなどして負担を和らげる。

それが嫌ならせめて与えられた領地を発展させて価値を上げるよ。

三女は魔法が使えないコンプレックスと母親の間違った教育で最早終わりだ。

魔法が使えないなら他の分野を伸ばして使える事をアピールしなきゃ貰い手なんか来ない。

あいつら自分達の立場が崖っぷちだって理解出来ないのか？

原作見る限り、あのままじゃヴァリエール家は滅びる可能性の方が高いぞ？

サイトの血を入れれば間違いなく公爵家の格は下がる。

そうなれば後は破滅への道だ。

突如ある衝撃が走った。

ドイツ、トリステイン間の国境線にてドイツ側の国境警備隊がトリステインメイジからの攻撃を受け、戦闘が発生した。

戦闘は早期に終了。

結果はドイツの勝利。

トリステイン側は全滅、しかしドイツ側も多数の死者が出た。

ドイツ帝国は即座にトリステイン王国を糾弾した。

しかしトリステインは「そんな事実は存在しない」と知らぬ存ぜぬを通した。

そのせいでドイツ帝国内の反トリステイン感情が爆発した。

今まで散々バカにされ続け、今回はそっちから攻撃してきた癖に無かった事にしようとしている。

世論はトリステイン討つべしと叫び、皇帝ボリス・フォン・ルドルフも「トリステインには何らかの制裁を課す」と発表。

徹底抗争宣言をした。

トリステインサイド

トリステイン国王、アンリは激怒していた。

「これは一体どういう事だ!!」

アンリは枢機卿に問い詰める。

「……どうやらヴァリエール家に仕えるメイジ数人が独断でドイツ国境警備隊を攻撃した模様です。

そのメイジ達は国境警備隊の反撃によって全員死亡。

ドイツ側にも死傷者が多数出たと聞いてます」

報告を聞いたアンリはしばらく目を閉じながら考えた後、目を開けて聞く。

「………本当に独断だったのだろうか?」

「はい勿論です。

ヴァリエール公爵に確認した所、「間違いなく自分はそんな命令を下していない」と答えました」

「そうか……」

そして再び考え始めた。

「………例えそのメイジ達の独断だったとしても既に遅い。

ルドルフは制裁を宣言した。

何らかの要求をしてくるだろうが、それを飲まない限りは戦争になる」

王の考えに賛成なのか枢機卿も頷く。

正に最悪の状態なのだ。

「……もしもトリステインがドイツと戦争することになったら……勝て

るか？」

王の質問に枢機卿は真つ直ぐ王を見て答える。

「無理です…。」

戦争になれば100%敗北します」

予想通りなのか王は瞬きすらない。

「やはりか…。」

「はい、ゲルマニア時代の時から国力が10倍以上ありましたが、ドイツ帝国に変わってから更に国力を上げているので現在はそれ以上の差があるかと…。」

短期決戦ならまだしも、長期戦になれば必ず負けます」

それを聞いてアンリはうなだれる。

「……何としても戦争を回避しなくてはならない…。」

「はい、それにはドイツ側の要求を飲むしかないでしょう。しかし…。」

枢機卿は目を伏せる。

「…貴族達が納得しないか…。」

面倒事を見つけたように顔をしかめる。

「はい、貴族達は「たかが建国して数年の成り上がりで6000年の歴史を誇る我が国が謝る必要はない、むしろドイツがこちらへ謝罪すべきだ」との意見が大半を占めます」それを聞いてまたアンリはうなだれる。

「……現実を理解出来るのか…?」

枢機卿は何も答えないが目で賛意を伝える。

ドイツサイド

よし、上手くいった。

スパイ達にトリステイン貴族を指輪で支配させ、攻撃するよう命じ

たおかげで成功した。

国境警備隊には何も伝えてなかったから本当に驚き、反撃したらしい。

警備隊に潜入させたスパイが焼夷手榴弾でメイジを焼き、証拠を消した。

そして生き残った警備隊が報告し、俺が国内に発表してトリステインを糾弾する。

警備隊は襲われた事を話し、周りは反トリステイン感情を爆発させる。

何せ本人達は真実を知らないから自然に話す。

それが話に信憑性を持たせる。

更にドイツ国内では新聞を発行しているから市民は瞬く間に知っていく。

今やドイツ全土に広まったから簡単には終わらない。

どちらかが折れる必要がある。

勿論ドイツ国民はこっちが被害者だからトリステインが折れなければ納得しない。

ドイツ帝国皇帝は総動員令を発令。

トリステイン国境に軍を集結させていく。

両国の緊張が高まった時、ドイツ帝国が今回の事件の責任追求についてトリステインに要求をした。

内容は今回の出来事についての正式な謝罪。

莫大な賠償金請求。

トリステインの関税自主権を認めない。

ドイツを最恵国待遇にする。

ドイツのトリステイン国内の領事裁判権を認める。

ドイツのトリステイン国内の治外法権を認める。

以上のドイツ・トリステイン条約をトリステインに要求した。

この条約を飲まないのなら宣戦布告するとも告げる。

トリステインサイド

トリステイン王国国王、アンリは枢機卿と共に死にそんな顔をする。

「……これでは実質、属国になれと言っているようなものではないか……」

国王の意見に枢機卿は何も言わない。

言う気力が無いのだろうか。

「……一応聞くが……貴族達の反応は？」

「猛反発です……」

まあ……いきなり他国に属国になれと言われれば怒り出すのも無理はありませんが……」

流石に今回は枢機卿も貴族達に賛成しているようだ。

「……まだ初めの正式な謝罪や賠償金なら理解出来るが、後半は明らかに挑発している。」

それにドイツは総動員令を発令して戦争準備を始めている……」

「はい、これは明らかにドイツは戦争を求めています。」

……間諜の報告によればドイツ国内においても長年トリステインにバカにされてきた鬱憤が爆発したようです。

国内はトリステイン討つべし。という意見がほとんどです」

「……確かにまだゲルマニアだったところから散々下に見てきたからな……」

それが爆発したのなら止める事は不可能だな」

「はい、かといってこの条約を飲みますと実質トリステインはドイツの属国になります。」

それは国内の貴族達は許さないでしょう……」

枢機卿のその言葉を聞いてアンリの目つきが鋭くなる。

「……つまり開戦しかないということだな？」

「はい、最早状況が変わる事は無いでしょう。」

「もしも開戦するなら一刻も早くこちらも開戦準備を整えるべきです」

「それしかないだろうな。」

「……しかし戦えば必ず負ける事になるのではないか？」

王の疑問に枢機卿が少し考えた後、答える。

「……こうなったらアルビオンに援軍として参戦していただきましよう」

枢機卿の言葉に成る程、と王は頷く。

「そういえばアルビオンがあつたな。」

幸いにもアルビオンは同盟国だから言い分も立つ」

「はい、アルビオンの優れた空軍が味方してくれるなら勝機があるかも知れません」

「うゝむ……。」

しかしアルビオンだけではちと不安だな。

「ガリアに援軍を求められないか？」

ドイツ帝国の拡大によって名前が薄れているが、ハルケギニアの常識ではガリアこそが最強なのだ。

「……ガリアは難しいでしょうね。」

ドイツとの貿易でかなり儲けているようですし、ドイツ側もガリアには比較的友好的ですから」

確かに、ガリアとドイツは同盟さえ築いていないが、国としての友好度はそれなりに高い。

ドイツとガリアの間は交易が盛んで互いに利益を上げている。

「……ならロマリアは……無理か」

「そうですね。」

ロマリアは他国の戦争に介入しないでしょうし、ドイツはロマリアに多額の寄付をしているのでロマリアはドイツの敵にはならないで

しょう。

良くて中立ですかね」

そう、革新的な事を多数行っているドイツだが、ロマリアには配慮して特例措置を多々とっている。

そのためロマリアはドイツを敵視していない。

こうしてトリステインもドイツとの戦争準備を急ピッチで始めた。トリステインは同盟国としてや長年のよしみでアルビオンに参戦を要請。

アルビオンとしても飛ぶ鳥を落とす勢いのドイツと戦争はしたくないのだが、ここでトリステインが敗北して無くなればアルビオンの立場が悪くなるし、味方が減る事になる。

そのため、アルビオンは要請を承諾。

もしドイツ帝国と戦争になったらアルビオンもドイツに宣戦布告すると約束した。

こうしてトリステイン・アルビオン連合軍が完成した。

一応ダメ元でガリアにも参戦要請したが、ドイツ側との関係を考慮して中立宣言をした。

少しガツカリだが予想していたので直ぐに立ち直り、戦争準備に力を注ぐ。

トリステイン一国だったら惨敗を期すことになるのは明白だが、アルビオンと連合軍を組めばもしかしてイケるのでは？ と淡い希望を持つ。

別に勝利するのが目的ではない。

最悪幾らか領土を失うことになるうと、講和に持ち込めれば良いのだ。

停戦が最終目標であり、勝利は初めから考えない。

ドイツ側に無視出来ない損害を与えて講和を持ち込めば良いのだ。  
こちらが譲歩すればドイツとしても面目が立つだろう。

だから短期決戦を目指し、陣地を構築したり編成を整えるのだった。

彼は心の奥にこんな考えがあった。

まさか6000年も続いた由緒正しいトリステイン王国を滅ぼすことは無いだろうと。

今まで幾度も戦争があつたが、その度何とか生き残っていたのだ。  
今回も何とか生き残れるだろうと樂觀視もしていた。

彼は知らない。

自分が戦う相手は始祖ブリミルのことなんか何とも思っていないから  
初めからトリステインを滅ぼすことを。

そして更にアルビオンまでもこの期に一緒に滅ぼす気なのだ。

## 15 三国戦争勃発

条約受諾要求から1ヶ月。

トリステインから何ら返答は無いのでドイツ帝国は制裁としてトリステイン王国に宣戦布告した。

トリステインへの宣戦布告と同時にアルビオン王国はトリステイン側に参戦、ドイツ帝国に宣戦布告した。

こうしてドイツ、トリステイン・アルビオン戦争、後の通称の三国戦争が勃発した。

やはりアルビオンはトリステイン側に立ったか。

まあ親戚関係だから当然か。

一応同盟国でもあるし。

まあ予定通りだから問題無い。

むしろアルビオンへの宣戦布告の手間が省けて良い。

それにわざわざ1ヶ月も時間を与えたから両国とも戦争準備は万端だ。

諸侯軍も王城や国境に集結して敵を待っている。

おかげで一網打尽に出来る。

ゲルマニアとの戦争みたいに散らばつてると後々面倒だからな。

流石に2国を同時に戦うのはキツイ。

だから短期決戦で終結させる。

2国を相手にするのは得策では無いのだが、相手はトリステインとアルビオンだ。

トリステインは小国だし、アルビオンは浮いてるから攻めにくいが、拠点さえ確保出来れば後は簡単。

生産力が乏しいから例え長期戦になっても必ず勝てる。

ガリアがもし参戦してきたら厄介だが、ガリアはドイツと戦えば勝つても負けても耐えられない程の損害を受けると理解しているから攻める事は無い。

それに最近、王が病に伏せがちだから余裕は無い筈だ。

後継者争いも始まつてるしな。

今は国外より国内の方が重要だ。

戦争の話に戻る。

先ずはゲルマニアの時と同じで2正面作戦を行う。

トリステイン側はヴァリエール領に軍を集結させているからそっちに部隊を回し、アルビオン側は空中艦隊をこちらに回しているからこっちも艦隊を派遣して迎撃する。

アルビオンについては艦隊さえ殲滅出来れば後は制空権を独占して封鎖すれば良い。

そうすれば何も出来ない。

それにアルビオンはトリステインの艦隊と連合軍を結成して攻めてくる。

一気にケリをつけるつもりらしい。

まあ賢いな。

長期戦になれば国力が高いドイツが勝つに決まっている。

だから一気に損害を与えて早期講和を持ち出す気だろう。

だからこの決戦に勝てば一気に勝負は決まる。

スパイの情報では国境付近にいる敵軍に艦隊はあまりなく、ほとんどが竜やグリフォンなどの部隊が陸上戦力しかないようだ。

まあ艦隊はアルビオンの方に行ってるから無理も無い。

だからこちらでも零戦や陸上戦力を中心に派遣した。

フネも数隻派遣したが、これはガンシップとして敵地上戦力を削ぐためだ。

一方、アルビオン方面には艦隊を派遣した。

全て鉄鋼船の両用艦で前と同じ三笠級を参考にした戦艦郡だ。

本当なら金剛級みたいな超弩級戦艦が良かったのだが、残念ながら建造は出来たが訓練がまだ未熟だ。

だからデビューは見送った。

まあ三笠級で十分だろう。

鉄鋼船の情報は一応隠しているが、間違いなく伝わっている筈。独立戦争の時に大々的に使ったからな。

それ以降は隠しているが、情報は漏れているだろう。

この世界は現実世界ではあり得ない諜報技術があるからな。

他国も鉄鋼船建造を計画したらしいが、冶金技術や原料、大量の風石など問題が多すぎて凍結されたせいで試作すら出来てない。

だから勝てる。

こつちだって艦体こそ変わってないが、兵器技術は発展したから副砲などの改修をしている。

おかげで射程は延びたし、威力も向上した。

他国は何百年前から変わってないが、こつちは年々変わっている。老いばれには退場して頂こう。

ドイツ飛行師団の零戦パイロット達は命令通り国境を越え、敵地に侵攻した。

彼らに一切迷いは無く、ただ命令通りに行動する。支配された彼らに恐怖や疑問は無いのだから。

『前方に敵視認、攻撃に移る』

隊長機からの無線が入る。

以前は雑音が多くて無線は装備しなかったが、改良した結果、クリアに聞こえるようになったので現在は全機装備している。

彼らの前方には黒い点々が何百と広がっているが、彼らは気にしない。

ただ敵を殺すのみ。

そう命じられたのだから。

敵との戦闘に入って五分が経過した。

戦況は圧倒的こちらが有利。

落ちていくのは竜やグリフォン、マンティコアなどの生物だけ。

彼らは機械的に落としていく。

念のためパイロットも一緒に撃つ。

人間を撃ち、体が弾ける光景が目に入るが瞬き一つせず、次の獲物に向かう。

彼らにとってはちゃんと殺したのが重要であり、それ以外はどうでも良いのだ。

その時、一機の零戦が落ちた。

落とした者を見ると、マンティコアに乗った鎧を着た女だった。

カーリヌ・デジレだった。

かつてマンティコア隊隊長の烈風のカリンとまで言われた歴戦の戦士で、ヴァリエール家に嫁いでは引退したが、国の一大事なので出てきたらしい。

『烈風が現れた。各機烈風を殺せ』

隊長の命令に各機が烈風を落とそうと狙う。

しかしやはり引退したとは言え、最強を誇った戦士だ。

小回りで機銃をかわされたり、逆に魔法を食らって零戦が落とされた。

落とされた零戦が三機になった時

『三番機が囷になれ、烈風が三番機に夢中になっている所を俺が三番機ごと撃つ』

『了解』

三番機のパイロットが答え、命令通り烈風に接近して攻撃する。

烈風は三番機の攻撃を何とかかわし、逆に攻撃をしようとしたら三番機の後ろに隊長機が現れた。

しかし烈風はまさか味方ごと撃つとは思えないのでそのまま三番機に攻撃しようとしたら突然隊長機は三番機ごと自分を狙ってきた。

20mm機関砲は零戦の風防を貫き、パイロットの腹を貫通して見事烈風カリンに命中し、カリンは絶命した。

一緒にマンティコアも絶命したため、烈風カリンはそのまま落ちていった。

腹を撃たれた三番機のパイロットは直ぐに回復してパラシュートで脱出した。

地上に着地したらスパイの誘導で国境を越え、予備の零戦に乗ってまた出撃した。

そして再び仲間と合流して敵を落とす。  
彼らにそれ以外の考えは無いのだから。

トリスティンサイド

「そ……そんなバカな……あり得ん……」

ヴァリエール公爵は自分の妻、カリーヌの撃墜を見て呟く。  
回りの幕僚達も呆然としている。

宣戦布告直後、ドイツ軍が侵攻してきた。

ドイツ軍の尖兵は見たことの無い相手だった。

「あれが噂の鉄の竜か……」

数年前のドイツ独立戦争の際に使われた兵器で、ゲルマニアの航空部隊を全滅においやった存在とは聞いていた。

しかしその話があまりにも現実離れし過ぎていて信じる者は半数にも満たなかった。

実際彼も現物を見るまでは半信半疑だった。

しかし、今は違う。

実際に鉄の竜が現れ、物凄い早さで飛び、何かはよく分からないが攻撃兵器を使用して味方を次々と落としている。

成る程、確かにあれならゲルマニアの航空部隊を殲滅したのも事実なのだろう。

しばらく味方が一方的に落とされる光景が続き、このままではゲルマニアの二の舞になるのではないかと不安になっていた時、希望の光が見えた。

何と最強と思われていた鉄の竜が落ちた。

鉄の竜を落としたのは自分の妻、カリィ又だった。

「おお、流石烈風のカリィ殿！」

あの強力無比な鉄の竜を落とすとは！」

周囲も歓声を上げる。

ほんの僅かだが希望が見えたのだ。

歓喜の声を上げても仕方ない。

現に自分も妻の成した事に誇りに思っていた。

しかしその希望はいとも簡単に打ち砕かれた。

妻が三体の鉄の竜を落とした事で士気は更に上がったのだが、四体目を落としにかかったところ、突如後ろから現れた鉄の竜によって味方ごと妻が落とされた。

その光景を見たトリステイン軍の士気はどん底にまで下がった。唯一の希望が無くなったのだから仕方ない。

しかし一番ガツクリとしたのはヴァリエール公爵だろう。

何せ希望と一緒に妻まで失ったのだ。

現在彼は座り込んで頭を抱えている。

微かに震えている所を見れば恐らく泣いているのだろう。

出来るなら慰めたいのだが、今は戦闘中なのでそんな暇は無い。

烈風が落ちたことでもう間もなく制空権は取られるだろうから陸戦の準備をしなくてはならない。

落ち込んでいる奴等を叱咤激励し、配置につかせる。

自分達の使命はあくまでも時間稼ぎ。

本隊はアルビオンと一緒に決戦を仕掛ける予定だ。

その決戦で勝つにしろ負けるにしろ敵を食い止めるのが任務だ。

防御陣地につき、土系統のメイジはゴーレムを作り、戦闘に備える。

鉄の竜は航空部隊を殲滅させた後は撤退していった。

自分達の役割は終わり、帰ったのだろう。

という事は次は陸上戦になる。

鉄の竜が去ったという事でフネの艦隊を出した。

艦隊と言っても旧式艦艇数隻だ。

最新型や使えるフネは本隊が持っていたから残っていたオンボロを持ってきただけだ。

ドイツ側もアルビオンに艦隊を集結させているのは知っているだろうからこちらに向けては来ないと思うが、万が一があり得るので持ってきたのだ。

もしあちらだけフネを持ち、こちらに無い場合は敵は物資や兵員を

輸送し放題になってしまふ。  
だからそれを少しでもやりにくくするのが目的だ。

遠い地平線から何かが来るのが見える。

その数は膨大で、黒い固まりになって真っ直ぐこちらに来る。  
そしてその上には数隻だがフネの艦隊がいた。

その外見は一般的な形とは異なり、帆は張らず、船体は灰色。  
明らかに木造船ではない。

「あれが鉄鋼船か……」

ようやく立ち直ったヴァリエール公爵が呟く。

そう、あれが独立戦争でドイツを勝利に導いた兵器。

あの鉄鋼船によってゲルマニアの艦隊は殲滅された。

その噂を聞き、トリステインでも鉄鋼船を建造しようとしたが、ドイツは軍事機密として鉄鋼船の情報を一切公表しなかったため、詳細な事が何も分からなかった。

間諜を差し向けたが誰も帰って来ず、とうとう情報は得られなかった。

それでも噂や大体の構造を推測し、何とか建造しようとしたが、トリステインの冶金技術では艦艇に使うような大きな鉄を作れなかった。

それに鉄で作るということは重量はかなりのモノになる。

それだけの重量物を浮かすには莫大な数の風石が必要になる。

風石はとても高価な物で、とてもじゃないがそんな量は用意出来ない。

オマケにそんなフネを艦隊にするという事になるとその莫大な風石が最低でも20倍以上は必要になる。

そうなる例え建造出来たとしても維持費だけで国が傾くどころか崩壊する。

ただでさえ資金不足にあえぐトリステインにそんな余裕は無かった。  
そのため建造計画は凍結され、旧来通りの木造船を建造するだけに

留まった。

オマケにその旧来通りの木造船を建造するにも資金不足のためか、2隻を建造して終了した。

アルビオンも同様に鉄鋼船を建造しようとしたがやはり技術不足や風石の値段に断念した。

一体ドイツはどうやって建造したのだろうか？

確かにゲルマニア時代から冶金技術はハルケギニア1だったが、艦艇を作る程は無かった筈だ。

それに膨大な風石をどうやって仕入れたのかだ。

確かに経済はかなり裕福だから買う金はあるそうだが、鉄鋼船の艦隊を作る余裕は無い筈だ。

そこまで経済力があるならゲルマニア時代にハルケギニアを支配出来ていただろう。

疑問は尽きないが今はそんな事を考えている余裕は無い。

敵もかなり近付き、今ではハッキリと見えるようになった。

何か巨大な砲や見たことの無い武器を持った兵士達が見えた。

ドイツ国旗をたなびかせ、にらみ合っている。

先制攻撃を仕掛けるのも良いのだが、まだ大砲の射程に入っていないので何も出来ない。

お互いにらみ合っていると上空から大砲の音が鳴り響いた。

上空を見るとドイツ艦隊がトリステイン艦隊に向かって発砲していた。

かなり遠い距離から撃ったというのに、トリステインのオンボロ木造船に見事命中し、木造船は爆発した。

そして爆発したフネはゆっくりと落ちていく。

僅か一撃で戦闘不能にされたのだった。

ドイツサイド

「敵一番艦撃墜！」

その声が響き、歓声を上げるかと思えば乗員達は別に喜ぶことなく次の目標に狙いを定め、撃った。

僅か4000mしか離れていないので30cm砲は意図も容易く命中し、また敵艦は一撃で落ちていく。

木造船に30cm榴弾砲は耐えられる筈が無いのだ。

一撃で艦を貫き、風石のバラストに命中して爆発する。

その爆発で船体に大穴が空いて落ちていく。

海に浮いている木造船と空に浮かんでいる木造船どちらがより耐えられるかは分からないが、少なくとも空に浮かんでいる木造船は風石庫を爆破されれば落ちるしかないのだ。

トリステインサイド

またもや信じられない光景だった。

さっきの鉄の竜でさえあり得ないのに、これは更にあり得なかった。何故ならトリステイン艦隊が意図も容易く全滅させられたのだ。

確かにオンボロ旧式船だから勝てないと分かっていた。

しかしここまで惨敗するなど思わなかった。

まさか一方的に撃たれてこちらは一発も撃つことなく終わるとは。

いや、正確には大砲は撃つたのだが、僚艦が落とされて混乱した味方が適当に撃つただけで届いてすら無かった。

敵艦との距離は4000メートル程もあるのだから当たらないのは当然だろう。

しかし敵艦は簡単に当て、ほとんど外すことすら無かった。  
こんなにも差があつたのか？

これではアルビオンに行った本隊でもどうしようも無い。  
ただ撃たれて全滅するのがオチだ。

また味方を絶望が支配しているとまた発砲音が聞こえた。

「何を狙っているのだ？」

ヴァリエール公爵の声が聞こえたと思った次の瞬間、後方からとてもない音と振動を感じた。

何が起こつたのだ、と後ろを振り返るとそこには地獄が広がっていた。

土のスクエアが長い時間をかけた防御陣地は粉碎され、周囲にいた兵士やメイジ達の死体が転がっていた。

その死体に無事なモノは無く、頭が無かったり、手足がそこらに吹っ飛んでいた。

原型を保っている死体には防御陣地の破片が腹に食い込んでいた。

僅かに生き残っていた者達は呻いているだけで声を上げられないのだろうか。

その光景に呆然としているとまた発砲音が聞こえ、そして今度は前方に着弾した。

そしてまた悲惨な光景が生まれた。

「不味い、敵は上空から狙い撃ちにするつもりだ！！」

ヴァリエール公爵が叫んだ後に、前方３リーグほど離れた位置にいる敵地上部隊も一斉に撃ってきた。

その砲撃は敵艦からの砲撃に比べれば威力は低いが、数が多いからかなりの脅威だ。

「くそ、前方も撃ち始めたか！！」

それにしてもこちらの大砲では届かない距離から撃つとは、貴様等それでも貴族か！？」

ヴァリエール公爵が何か言ってるがそんなことは戦場では通用しな

い。

勝てば正義なのだから。

正々堂々など負け犬の遠吠えでしかない。

「そんなことよりこのままでは全滅します!!」

撤退すべきです!!」

自分がヴァリエール公爵に提案するが、ヴァリエール公爵は首を横に振り

「そんなことは出来ん!!!」

カリーヌの仇!!!

何もしないで撤退などあり得ん!!

突撃するのだ!!!」

突然の突撃命令に周りは止まる。

「このままでは一方的にやられるだけだ!!」

だから敵に接近し、攻撃する!!」

この状況に何を言っているんだこの男は?

確かにそれも一つの手段だが、あんな射程を持つ兵器を有しているのだ。

だったら近接戦闘兵器だつて有していても不思議は無い。

そんな無謀な事は止めると言おうとしたらその前に

「それに敵はゴーレムを出しておらん!!」

恐らく前にいるのは平民の部隊なのだろう。

ならば我等メイジが突撃すれば必ず勝てる!!!」

確かに敵はゴーレムを出していないが、平民だけとは限らない。

しかし周りのメイジ達はヴァリエール公爵の言葉に希望を見いだしたのか、士気が上がった。

やはりメイジ至上主義が強いトリステインではメイジが平民に負ける筈は無いという考えで固まっているのだ。

「行くぞ、我等トリステインの誇りを敵に見せつけるのだ!!!」

そう言つてヴァリエール公爵やメイジ達、他にもついてくるよう命じられた平民の兵士達も突撃していった。

自分も行くべきかと悩んだが、どう考えても無謀なので一人残った。ヴァリエール公爵からは「臆病者め!!」と叱責されたが、行って勝てるとは思えなかったから無視した。

突撃したヴァリエール公爵達は敵に後1リーグ程に近付いた時、敵の前方から火線が走った。

その瞬間、前方にいた平民の兵士達は弾除けの役割を果たした。

ヴァリエール公爵達は平民達の死に目もくれずに突撃を敢行したが、近づく前に連続して聞こえる銃声や、連続して撃てる小さい大砲に全滅させられた。

「ああやはりダメだったか」

味方の全滅なのに何ら感傷が湧かないのは自分も間もなくあなる事が分かっているからだろうか。

逃げようとした兵士達はまたやって来た鉄の竜や鉄鋼船に撃たれて死んでいる。

ここは平地帯だから身を隠す物は無い。

つまり終わったのだ。

そう彼が諦めて目を瞑った直後に30cm砲弾の直撃を受けて消滅した。

即死だったから痛みを感じる前に死んだだろう。

防御陣地を陥落させ、トリステイン兵を殲滅したドイツ軍は進軍し、ヴァリエール公爵の屋敷に到達した。

「既にヴァリエール公爵、公爵夫人も戦死した!!」

勝敗は決したのだ!!

直ちに武装を解除して降伏せよ!!

降伏しないのなら皆殺しにする!!」

降伏勧告を行い、しばらく何も動きは無かったが、屋敷の扉が開き、

長女エレオノールが出てきた。

エレオノールは指揮官に跪き

「……降伏致します。」

ですからどうか……私はともかく、妹達の命だけはお助け下さい」  
泣きながら降伏してきた。

降伏を受諾した兵士達は先ずはエレオノールを捕縛し、屋敷に入り  
護衛達の武装を解除させて収容所に護送する。

そして次女カトレアと三女ルイズも捕縛し、連行する。

その際、エレオノールとの約束を守り次女カトレアは病弱なので医  
療施設に、三女ルイズはまだ乳幼児なので孤児院に収容された。

約束を守ってくれたのでエレオノールは一切抵抗せず、こちらも約  
束通り処刑となった。

ヴァリエール領を占領したドイツ軍は他の領に侵攻していく。

しかし領の戦力はアルビオンか、先程の決戦で死んだからほとんど  
なく、散発的な攻撃を仕掛けるか降伏してきた。

こうしてトリステインは最早風前の灯火となつていった。

よし、これでトリステインに戦争を仕掛けた目的はほとんど果た  
した。

後は水のルビーと始祖の祈祷書を確保すれば良い。

何せあれが無いと虚無に目覚めないからな。

まあ別にルイズを虚無に目覚めさせる気は無いがな。

虚無なんてあるからハルケギニアは発展しない。

あんな呪われた系統は排除すべきだ。

だから先ずルイズを指輪で支配する。

そうすれば逆らう事は無くなる。

まあそれでもアンドバリ指輪では生者を不死にする訳では無いから

永遠では無い。

何れはルイズが死んで誰かに継承されるだろう。

だからその前に始祖の血筋を絶えさせてやる。

幸いにも始祖の血筋をありがたる人間が多いから詳細な血統書が残っている。

それを辿れば分かる。

万が一血統書に乗ってない奴もいるかも知れないから念のために始祖の遺物は処分する。

始祖の祈祷書、始祖の香炉、始祖のオルゴール、始祖の円鏡。

これらを処分すれば虚無は目覚めない。

後は念のために4系統のルビーも処分すれば完璧だ。

ちなみにカトレアは既に処分した。

生かしておいても莫大な治療費がかかる金食い虫を飼う必要は無い。

エレオノールを処刑した後に射殺した。

約束を破っては無いよ？

お前の生きていた時は生きていたんだから。

お前の死後も生かしておくとは一言も言っていないからな。

## 16 アルビオン決戦

トリスティンに攻め入ると同時にアルビオンにも進軍していた。

情報では有名なアルビオンの空中艦隊とトリスティンの艦隊が合流して連合軍を結成し、ドイツに向けて進軍しているようだ。

連合軍はドイツとの戦争を短期決戦にするべく、この決戦に全てをかけていると言っても良いだろう。

アルビオンは本国の守りは最低限に留め、大型艦や最新艦をほとんど動員し、トリスティンは本国の守りは全て捨て、ヴァリエール領に回した旧式艦艇数隻を除いて全てを動員した。

どうせ守っていても長期戦になれば敗北は必至。

ならば一撃必殺にかけるしかないという大博打に賭けたのだ。

成功すれば敵艦隊を撃退して敵首都を陥落させるか、大打撃を与えて講和を引き出す。

これしか勝機は無いのだ。

逆に負ければ全てを失う。

だから何としても勝たなくてはならない背水の陣なので否応なく士気は高まる。

トリスティン・アルビオン両方の指揮官は必死に味方を鼓舞する。「これだけの大艦隊ならドイツ艦隊など一捻りだ!!」とか「我等始祖の血を引く国があんな成り上がりの国に負けるなどあり得ない!!」など何でも良いので士気が上がる事を言う。

しかし指揮官達は実際はそんなに樂觀視していない。

何故なら指揮官として敵国の強さをよく知るために様々な勉強をしたら、ドイツが誇る鉄鋼船の艦隊や国力比などをよく知る事になり、

逆に現実を思い知らされる結果となったのだ。  
どう考えても勝てる訳無い。  
それが共通の思いだった。

トリスティン・アルビオン両国もドイツの鉄鋼船の強さを知り、  
何とか建造しようとしたがトリスティンは何もかもが不足。

アルビオンは風石はなんとかなるかも知れないが、技術や資金不足  
で建造出来なかった。

旧来通りの木造船の重要ヶ所に鉄の装甲を張るぐらいは出来たのだ  
が、ドイツと違って魔法を多様するので品質はマチマチ。

良いのもあれば悪いのもあった。

それに装甲と言ってもドイツ側から見れば紙みたいな薄さなのであ  
まり意味ない。

アルビオンの上役達はこれで鉄鋼船にある程度対抗出来ると思って  
いるようだが、指揮官達は「精々銃弾を防ぐのがやっとだろう」と  
しか思っていない。

しかし部下達にそんな事は言えないので「この装甲があれば敵の砲  
弾など容易く弾ける」と言っしかない。

一方、ドイツ側は別に気負う気配は無い。

自分達の艦隊こそが世界一だと自負しているし、厳しい訓練に耐え  
てきた誇りもあるので必ず勝てるという確信もある。

かと言って慢心した態度を取る訳では無かった。

何故ならそんな態度を取れば上官に何を言われるか分からないし、  
訓練においても木造船とやり合い、勝利はおさめても無傷では無い。  
やり方によっては木造船が勝利する可能性もあり得るので決して油  
断はしない。

むしろ勝って当たり前なのに負けたらとんでもない事になる。  
だから勝たなくてはいけないプレッシャーもあるのだった。

遂に両軍が対峙し合った。

トリステイン・アルビオン連合艦隊は総勢150隻を超える大艦隊。  
一方ドイツ軍の艦隊は50隻程度だった。

連合軍兵士は自分達の3分の1程度でしかないなら必ず勝てる。  
そう確信していた。

しかし指揮官達には疑問があった。

それはドイツ軍艦の数が少なすぎる。

確か事前情報ではドイツの軍艦は総勢100隻はあった筈だ。  
残りの半分はどこに行った？

ヴァリエール領の方に行ったのか？

指揮官達は疑問や何か嫌な予感で一杯だが、今は前方の敵に集中し  
なくてはならない。

何せ相手はドイツ艦隊。

数はこちらが圧倒的優位だが、全てが木造船。

一方相手は全て鉄鋼船。

質的には負けている。

しかし流石にこの数なら勝てるのでは？

と思えてきた。

指揮官達がそう考えても不思議は無い。

何せ戦いとは常に数が多い方が勝つ。

3倍以上の戦力を有しているならほぼ間違いなく勝てる。  
普通ならば……。

対峙し合っていた雰囲気に出た。

連合艦隊はドイツ艦隊に向かって接近していく。  
やはりその数から余裕を感じたのか、徐々に距離を詰めていく。  
連合艦隊が動くのに対し、ドイツ艦隊は動かない。  
待ち構えているように見えるが、連合艦隊はもう止まらない。  
その大艦隊のせいで一旦進んだら中々止まれないのだ。

両艦隊の距離が6リーグ程になった時、ドイツ艦隊が放火を開いた。  
ドイツ艦隊が30cm砲で一斉射を始めたのだ。  
しかしアルビオンの兵士達は音に驚いたのだが、別にそれ以外は慌てなかった。

何故なら敵に自分達より長射程の大砲があるのは既に知っている。  
それに自分達のフネは鉄で装甲しているのだから敵の砲弾に耐えられる筈だ。

そう確信していたからとりあえず敵の砲弾の直撃を受けないように  
するため、物陰に隠れた。

これで安心だ。

……しかし、彼らの期待は裏切られた。

僅か数mmの鉄の装甲で30cm榴弾を防げる筈はなく、易々と貫通し、炸裂した。

物陰に隠れた兵士達は直撃を食らい、体はバラバラに弾けて死んだ。  
直撃弾を受けた艦艇は被害に多少の差があるが、どれも甚大な被害が出た。

アルビオン艦艇は僅かだが張った装甲のおかげか、ギリギリまだ航行している艦艇がいた。

しかしトリステイン艦艇は装甲など張ってないから諸にダメージを受け、次々落ちていく。

予想以上のダメージに艦隊は動揺を隠せないが、進軍は止めない。  
何故ならこちらが攻撃するには大砲の射程まで近付かなくてはならない。  
ない。

だから撃たれようと進む以外の選択肢は無い。

進む毎に連合艦隊の艦は減っていく。

近づく事で主砲の他に副砲も当たるようになり、威力も上がる。そのせいでギリギリ持ちこたえていたアルビオン艦も次々落ちていく。

それでも連合艦隊は進んでいき、遂に2リーグにまで近付いた。

「全砲座発射！！！」

連合艦隊の各艦が一斉に砲弾を発射する。

しかし2リーグは大砲の有効射程内だが、ギリギリ届く距離に過ぎず、大半は外れた。

しかしその執念からか、奇跡的に命中する弾があった。

「当たった！！」

命中させた砲主は歓喜の声を上げるが、直ぐに絶望に染まった。

何故なら命中させた砲弾は球形弾。

つまり丸い鉄の弾。

そのため簡単に装甲に弾かれて終わった。

「バ……バカな……」

しかしそんな事は知らない連合艦隊の兵士達は呆然とする。

まさか弾かれるとは……。

これでは敵う訳が無い。

そういう雰囲気広まり、士気が一気に下がった。

指揮官達はそんな部下達に鼓舞し、何とか士気を取り戻させる。

しかし敵はいちいち待ってくれない。

むしろ敵の射程内に入ったので一層攻撃を苛烈にする。

それを掻い潜ってまた連合艦隊は攻撃を始めるが、やはりその砲弾は弾かれる。

今度は榴弾も混ぜたので砲弾の破片がドイツ兵を襲う。その光景を見て連合艦隊の士気は上がったが、ドイツ艦隊はぶちぎれたのか攻撃してきた艦に主砲を直撃させて落とす。

しばらく乱戦が続き、両艦隊は撃ち合う。しかし落ちていくのは連合艦隊の艦艇だけ。

150隻以上あった艦艇も4割を失い、最早ガタガタだった。

このままでは全滅するだけだと判断したアルビオン艦隊司令長官は全艦に対して撤退を指示した。

しかしこの決戦に勝利しないと先が無いトリステイン艦隊は撤退を拒否した。

突撃を続行。

一方アルビオン艦隊は別にそこまでこの決戦にかけてなく、この決戦は既に負けたと判断し、本土決戦に持ち込むために撤退を開始した。

しかしそれさえ許されなかった。

トリステイン艦隊を残して撤退しようとしたが、何故か前方にはドイツ艦隊がいた。

それを見てアルビオン兵士達は後ろを振り返るが、そこにはトリステイン艦隊と戦っているドイツ艦隊がいた。

「何故……？」

アルビオン指揮官は考える。

すると思い出した。

ドイツ艦隊は総勢100隻はある。

しかし今まで戦っていたのは50隻程度。

つまり残っていた艦隊が後ろに回り込んでいたのか。

そう理解したアルビオン兵士達は絶望した。

最早逃げられない。

完璧に挟まれたのだ。

後ろに行けばトリステイン艦隊と戦っているドイツ艦隊がいるし、前に逃げても無傷なドイツ艦隊がいる。

後ろを見るとトリステイン艦隊が奮戦しているのだが、既に壊滅寸

前。

その時、前方から砲声が響いた。

どうやら殲滅戦を始めるらしい。

既に適わない事を理解している兵士達はただ呆然としながら30c

m砲弾が落ちてくるのをただ見ていた。

そしてその予想は裏切られなかった。

## 17 三国戦争終結

トリステイン王国国王アンリは絶望していた。  
いや、国王だけではなく、閣僚全員が沈んでいた。

何故なら短期決戦に備えたアルビオンとの連合艦隊は全滅させられたという報告が上がったし、ドイツ艦隊はそのままアルビオンに上陸して現在は陸上戦の真っ最中。  
既に終わりそうだと報告を受けている。

更に時間稼ぎのためにヴァリエール領に集めた軍勢も全滅し、ヴァリエール公爵、公爵夫人は戦死。

ヴァリエール領を占領したドイツ軍は次々とトリステイン領土を占領していついて間もなく首都にも到達するとの事だ。

「……我々は……負けたのだな……」

王の言葉に誰も反応しない。

誰もが分かっているからだ。

何故なら短期決戦にする気だったから主力どころかほとんど全ての艦隊をアルビオンに派遣したのだが、その艦隊は全滅した。

その決戦の時間稼ぎのために集めた陸上戦力をヴァリエール領に集結させたのだが、それも全滅。

今トリステインに残っているのは僅かな衛士隊や銃士隊などだけだ。  
こんな残りカスでは何も出来ない。

何せ出し惜しみする余裕は無いからと、全勢力を注いだのだ。

それが全て無くなった。

最早終わりだった。

誰も何もせず、ただうつむいていると衛士が扉を開き、やって来た。

「陛下、ドイツ特使が降伏勧告を出してきました。

「勝負は決した。

既にアルビオンも降伏した。

これ以上の被害を出さないためにも降伏せよ」とのことです。

……いかがいたしますか？」

衛士が諦めた目をして報告してくる。

それを聞いて王は立ち上がり、首都トリスタニアを一望出来る窓を開けた。

そこには首都を囲むようにドイツ軍がいた。

「……………トリステインは終わったのだな……………」

王は涙を流しながら言う。

衛士達や閣僚達も涙を流す。

永きに渡ったトリステインが自分達の代で終了したのだ。

情けなかった。悔しかった。

しかし最早決まったのだ。

「…降伏を受諾しに行くぞ。

皆の者涙を拭け！！

最後までトリステインの誇りを見せつけてやるのだ！！！！

堂々と降伏しに行くぞ！！！！」

王の言葉に全員立ち上がり、涙を拭った。

そして涙を拭った後の目は凜々しく。

今から降伏しに行く者の目には見えなかった。

衛士はトリステイン国旗を担ぎ、王妃マリアン又は王女アンリエッ

タを抱き上げ、夫に寄り添った。

両国の降伏受諾後、両国の王族は全員公開処刑に処された。

こうして6000年にも永きに渡って続いたトリステイン王国、アルビオン王国が滅亡したのだった。

両国はドイツ帝国によって吸収合併され、国名すら消えた。  
歴史が動いた瞬間だった。

よし、これでトリステイン、アルビオンは終わった。

ちゃんと目的の物も接収出来たしな。

始祖の祈祷書と水のルビーは戦勝国として敗戦国からキチンと提出させたし、魔法学院にいたコルベールは指輪で支配して火のルビーも提出させた。

ちなみにコルベールはその後始末した。

アルビオンの始祖のオルゴール、風のルビーも接収出来た。

トリステインは比較的アツサリ降伏したが、アルビオンは王が自爆しようとしていたらしいのでかなり焦った。

原作通り死なれると後々面倒だからその前に突入して射殺した。

自爆して風のルビーや始祖のオルゴールが壊れるなら良いが、確実性が欲しいから射殺し、その後指輪で蘇らせて両方とも出させた。  
やはりドイツに見つからないよう隠してたので、探す手間が省けた。  
出させた後はいらぬから処刑した後にガソリンかけて燃やした。  
ちなみにウエールズはもう死んでた。

というより母親が殺したらしい。

王家の誇りというのらしい。

まるで日本人だな。

そして何より一番大事な物も手に入った。

ティファニアはサウスゴータ領の屋敷に隠れていたが発見し、踏み込む前に窓越しに母親と一緒にいたのでエルフの母親は狙撃した。  
流石のエルフも予想してないことはカウンター出来なかったのか、

アッサリと死んだ。

軍が突入してモード大公が残した護衛達を皆殺しにした後に赤ん坊のティファニアを確保した。

兵士達が持ち帰り、実際見てみたらエルフの証である長耳だったのを確認した。

ティファニアを指輪で支配し、ルイズと一緒に警備が厳重な地下牢の独房に幽閉した。

ついでにティファニアの母親が持ってたエルフの指輪も接收した。いざというときに役立つだろう。

そして最後に始祖の祈祷書、オルゴールはガソリンをかけて焼却処分。

水、風、火のルビーは練金で土くれにした後に砕いた。

まあ俺が触ったからコピー出来るのだが、これをコピーするつもりは無い。

始祖の遺物という事で破壊出来なかったらどうしようかと心配したが、そんな事はなかった。

普通に燃えて灰になり、ルビーも頑強な固定化をかけてあったが、練金を何千とかけたら耐えられなかったらしい。

意外に簡単だったな。

土くれにしてもまだ効力はあるのかと触ってみたが、最早ただのゴミになったようで何の効力も無かった。

これで虚無が覚醒する確率はかなり下がった。

残りの秘宝も全て処分しなくては。

次は始祖の血筋の処分だ。

とりあえずトリステイン、アルビオンの有力貴族はほとんど戦死したが、戦争に参加しなかった奴等がいるからそいつらに何だかんだとイチヤモンをつけて処刑した。

罪状は戦争幫助とか国内安定のため。とか何でも良かった。

これで現在も残る貴族は始末出来たが、家が潰れた元貴族や妾の子など、少しでも血を受け継いでいる可能性のあるものも処分した。流石にこれは表立って出来ないから事故に見せかけたり、人知れず殺したりなどした。

多分まだまだいるのだろうが、流石に全部は無理だ。

ていうか極論言えば俺だって始祖の血を受け継いでいるかも知れない。

だって魔法を使えるという事はブリミルか弟子の血筋という事だ。確率的に全部のメイジに可能性がある。

とてもじゃないがやってられないのでとりあえずここで終了だ。

後はガリアとロマリアだ。

ていうか何故ロマリアも虚無を使えるのだろう？

だって虚無を使えるのは始祖の血筋だけだろ？

ロマリアはブリミルの弟子が建国した国だぞ？

その弟子も虚無を使えたならまあ分からは無いが、だとするとロマリアは弟子の血筋なのだからトリステイン、アルビオン、ガリアの家系より格下の筈だ。

何故偉そうなんだ？

## 18 ロマリアとの確執

三国戦争終結から2年。  
俺は18となった。

ガリアでシャルル王子の娘が生まれた。  
しかし公表されたのはシャルロットだけで、ジョゼットはいないものとされた。

何で双子だからって一人を捨てるんだろう？  
片方の身代わりや予備として使えそうなのに。  
まあ誰が唱えたか分からないが、古き慣習に従ってジョゼットは捨てられ、ロマリアの孤児院に預けられた。

ジョゼットが孤児院に預けられて1年後くらいに、ドイツ貴族の一人にジョゼットを貰い受けに行かせた。

孤児院側は何か渋ったらしいが、平民の身分に過ぎないし、まさかガリア王家の娘なんですから言えないから断れず、仕方なくドイツ貴族にジョゼットを渡した。

まだ1歳で口クに歩けもしないジョゼットを抱えて貴族は親父に渡した。

そして俺の元に渡り、指輪で支配してルイズ達同様に独房に収監した。

独房と言ってもまだ1歳だから世話役が必要なので、これまた指輪で支配した奴に世話をさせている。

万が一にも世話をしていて感情を持たれたら困るからな。

ただ必要な世話だけをやるだけで良いのだ。

別に感情を育てる必要は無いし、指輪で支配されてるから感情なんて無いし。

一応成長したらある程度は学ばせる予定だ。  
流石に字も読めないのではいざというとき困るからな。

これで虚無の使い手が3人揃った。

ジョゼットはまだ覚醒してないが、ジョゼフが死ねば覚醒する。

ジョゼフは何か指輪で支配しても不安だから殺す。

他の奴等なら例え支配から解けてもそこまで脅威にならないが、虚無に目覚めなくてもジョゼフは脅威になる可能性が高すぎるから生かしておけない。

ジョゼットは手に入れたのだからジョゼフの始末を本格的に始めた。  
ゲーレン機関から暗殺者を派遣してジョゼフを殺させる。

ガリア王はまだ存命だし、やはり魔法の才能が無いジョゼフは軽んじられているからシャルルに比べて警備は手薄だ。

と言っても腐っても第1王子だから常に警護はついている。

シャルルに比べれば弱いが、ジョゼフを次期国王に推す派閥もあるからな。

まあ焦らず殺ろう。

まだまだ原作までかなり時間があるし、現王もまだ病氣じゃないから大丈夫だ。

それどころか時間が経つにつれ、ジョゼフの派閥は弱くなっていつてから警備も徐々に緩くなる。

その時を狙えば良い。

最近ロマリアとの関係が急速に悪化した。

何故かと言えば、ドイツが始祖の子達が建国したトリスティン、アルビオンを滅亡させたからだ。

「戦争をするのは構わないが、両国を併合して無くすとは何事か！」

とロマリアの大司教が怒鳴り込んで来たのだった。

更には「直ちに両国を復活させる！」とか訳分かんないこと言って来やがった。

今までロマリアには極力逆らわなかったが、流石にこれは無理だから「それは内政干渉であり、他国から言われる筋合いは無い」と突っぱねる。

それでも何か言ってきたが全て拒否した。

そしたら最後に

「なら両国の始祖の秘宝と言われている祈祷書とオルゴール、そして水と風のルビーを提出せよ！」

と命じてきた。

何でそれをロマリアに渡す必要があるか分からないのだが、それが当然とばかりに大司教は要求する。

「何故それをロマリアから命じられなければいけないか分からないが、残念ながら我々も所有していない

戦乱の時に失われたのか、それとも敗戦国達が我々に奪われないように隠したのか。

我々も散々探したのだが遂に見つからなかった。

現在も搜索は続けているが望み薄い状態だ」

と伝えた。

それを聞いて「我々も搜索に参加したい」と申し出てきたが、ドイツ国内の事だからと丁重に断った。

大司教はこのままではらちが開かないので仕方なく帰国した。

この事を切欠としてドイツ帝国と宗教国家ロマリアの関係は急激に悪化の一途を辿る事になった。

ロマリアはドイツの内政に口出しするようになっていき、その報復としてドイツはロマリアに対する寄付の額を下げたり、国内の教会改修や新設援助を取り止めるなどをした。

この行動に周辺諸国、と言ってもガリアしか無いが、ガリアは不安がる。

しかしドイツ国内は別に変化無かった。

新たに占領した旧トリステインやアルビオンの市民達は不安がったが、旧ゲルマニア地域は何とも思わない。

旧ゲルマニアではそんなにブリミル教に対して敬虔な信者では無かったし、ドイツ建国によって魔法の重要性やブリミル教の観念が下がっているのに逆にロマリアに対して反感を持っている。

「他国が口出しするんじゃないよ」と思っているドイツ国民が大半を占めていた。

そろそろロマリアやガリアと戦う時が来たな。

ロマリアは別に宗教が無ければ大した戦力が無いから良いが、ガリアは厄介だ。

ガリアの空海軍は両用艦隊を200隻近く保有している。

それにガリアは人口が千五百万人とハルケギニア最大の人口を誇る。地球で考えれば小国でしかないが、この世界では物凄い数だ。

ドイツも人口を年々増やしているが、まだ大した年数が経ってないから追いついていない。

ガリアの戦力は間違いなくハルケギニア一だ。

ドイツ建国前までは。

ドイツが建国し、この十年以内に様々な戦争をし、必ず圧倒的な勝利を勝ち取って来たことから、ガリア最強神話が崩壊しようとしていた。

ガリアもそんな空気を感じ取り、軍の増強を押し進めている。

しかしそれはあくまで今まで通りのやり方で、新兵器などは出来ていない。

先の三国戦争で鉄鋼船の強さを思い知ったため、ガリアは自分達も鉄鋼船を建造するために必死に行っている。

しかしやはりトリステインやアルビオンと同様の壁と衝突している。つまり技術不足と材料不足。

資金については流石ハルケギニア最大を誇る国だから何とかかき集められた。

しかし金があっても建造出来ない。

トリステインやアルビオンに比べて技術レベルは高いし、ハルケギニア随一のガーゴイル技術があるのだが、それでも足りなかった。

アルビオン同様、木造船に薄い鉄の装甲を張る事は出来たのだが、先の決戦で無意味だったのは実証されている。

それで正攻法では建造出来ないと理解したガリアはお抱えの花壇騎士団を使い、鉄鋼船の設計図や技術者の拉致を計画するも、ゲーレン機関の妨害工作に阻まれ。

逆に報復としてガリア国内でガリア高官の暗殺や、ガリアの軍港に停留している軍艦が爆破されるなど、様々なテロをされた。

何とか奇跡的に技術者の拉致に成功した事もあったが、大抵は直ぐに自殺され、何とか自殺を防いだとしてもゲーレン機関に暗殺されるなど、徒勞に終わった。

リスクの割には少なすぎるリターンや、報復の被害の大きさにガリアは諜報活動を断念した。

今度は正攻法として鉄鋼船の販売をドイツ政府に求めたが、ドイツ政府は鉄鋼船は重要機密なので他国に売る気は無いと拒否。

それでも何とか情報だけでも欲しいとガリアは諦めない。

しかしドイツ政府は機密のため教えられないと再度拒否。

これ以上しつこくいくとロマリア同様、外交関係が悪化するので断念。

仕方なく自国での鉄鋼船開発を押し進めるしか無かった。

兵器技術はそれなりに進んだ。

ようやく航空機を開発し、自国製の航空機での初フライトに成功。しかしまだ飛ぶのがやっとで、戦闘にはとてもじゃないが耐えられない。

今は航続距離の延長や機体強化を頑張るしかない。

自動車の性能はかなり上がった。

馬力が強いのが出来たし、耐久力が高くて簡単に壊れないエンジンも開発出来た。

これで榴弾砲やロケット砲など重い兵器も牽引して運べる。次は自走式の開発を目指す。

戦車の開発も進んでいる。

第一次大戦後の砲塔付きの戦車が完成した。

あまり使い道が無いと思われるが、意外に使い道がある。それは怪獣の討伐だ。

このハルケギニアはとんでもないデカイ怪獣や怪物が腐るほどいる。大抵は銃火器で殺せるのだが、中には銃では無理な奴もいるからそういったら使う。

基本装備についても発展してきた。

まだ自動小銃は出来ていないが、現代のように防弾ベストやヘルメット、ボディアーマーを装備しているからダメージを防げる。

ちなみに兵士の基本装備は半自動小銃、自動拳銃、手榴弾、銃剣だ。ドイツ軍では他国のような槍や剣、火縄銃など使わない。そもそも他国では主戦力のメイジの出番が無いのだ。今じゃメイジの出番は環境対策の時か軍の後方支援ぐらい。

それに貴族の数も激減している。

かつてトリステインは貴族の人口が1割を超えするという異常な数だったが、今では0・1%以下だ。

何故なら先の戦争で大半の貴族が死んだし、敗戦国という事で領地や軍を没収され、現在そこはドイツの県となっている。

貴族は名誉職となっているから今や何の権力も無い。

国からの年金で何とかしのいでいる原状だ。

そんな原状だからお家復興のために国政に関わる職に就くべく大学を受ける者、貴族を諦めて他の職に就く者などが増加している。

しかしメイジが主戦力の部署もある。

それはドイツ国家諜報組織、ゲーレン機関だ。

ゲーレン機関のメンバー全員は指輪で支配されていて不死か感情は無い。

そしてメンバーのほとんどがメイジだ。

これはメイジなら武器や道具を携帯せずに諜報活動や暗殺、死体処理が手軽に出来るからだ。

ちなみにゲーレン機関のメイジは邪魔な杖は持たず、指輪や腕輪、ネックレスなど装飾品と契約している。

何故か他国のメイジ達は持ち運びに不便な杖と契約している。

何でだろうか？

ちなみにドイツ憲法において「メイジは登録した杖以外と契約してはいけない」と明記してある。

これは魔法発動体を分かりやすくすると、隠し持たれると脅威になるからだ。

魔法発動体は立派な兵器だからな。

個人に複数を隠し持たれたらたまったものじゃない。

原則、杖は人生で一人一本の所有しか認められてなく、杖を紛失すれば魔法使用免許を失う。

不法所持は重罪に指定されていて、犯せば死刑だ。

旧トリスティン、アルビオンはインフラ整備が不十分で、首都は石畳で整備されているが、一步街を出ると土の道でしかない。だからまずは輸送路の確保として街道をコンクリートやアスファルトで舗装する。

そしてこの機に狭い首都のメインストリートを拡張した。

邪魔な家は解体し、道幅を広くする。

家々に住んでいた住人達は仮設住宅を用意し、後に建てたマンションに住ませた。

他にも様々な公共事業をしたから戦争であぶれた失業者を大量に雇った。

税率も一定に引き下げたから平民も金を持てるようになり、進出したホンゴウ商会で買い物を楽しむ。

少数の貴族達は昔の生活を懐かしむが、大多数の平民達は人間らしい暮らしが出来るドイツ支配を受け入れた。

## 19 ロマリアとの決別

ロマリアとの確執が深まって2年。  
俺は20になった。

ドイツとロマリアの関係は最悪にまでなっていた。  
あれ以降もロマリアはドイツに対し様々な要求を突き付けてきた。  
先ずは寄付金の増額だ。

昔の額に戻せというならまだ分かるのだが、昔の倍以上支払えとまで言ってきた。

理由としてはロマリアの指示に従わないから。  
自分達を神だとも思っているのだろうか？

中世のキリスト教だってここまでは傲慢じゃなかった筈だ。

更にドイツの鉄鋼船や近代兵器一式を提出せよとまで言って来やがった。

「何故そんな事をしなくてはならない？」  
と聞いたら

「あまりに危険な兵器だから我々が調べる。  
調べによつては全て没収する」

と言いやがった。

成る程、これが文明の発展が極端に遅れている理由か。と納得した。  
何かを発明すればコイツらが調べに来て、自分達に不都合なら没収。  
従わないなら異端認定するのだろう。

全く、俺が言うのもなんだが、コイツらクズだぜ。  
批判されない組織は必ず腐敗するという言葉があるが、6000年も批判されなきゃこうもなるか。

最早コイツらとの付き合いは不可能と判断し、ドイツ国内のロマリア神官や司祭達を国外追放した。

これだけでもロマリアとの決別を意味するが、更に反ロマリアを掲げるためにドイツ国教会を設立。

ロマリアの教会を破壊し、新たにドイツ国教会の教会を次々建設し始めた。

ドイツ国教会の教義はプロテスタントに近く、総本山は決まっていない。

それにあくまで自由意思に従うものであり、ロマリアとは違い、入信を強制しない。

他にも様々な自由を許される。

唯一の共通点は始祖ブリミルを信仰しているだけだ。

6000年も続いた宗教を無くすのは面倒だから利用する事にした。ロマリアに比べたら楽な決まりだからよほどロマリア式ブリミル教を信じてなければ、一般人ならこちらを好む。

こっちは面倒な制約は無いからな。

基本的に全ての事は個人の良心に委ねられる。

当然ロマリアは猛烈にドイツを批判するが、ドイツ側は

「別に異教徒になる訳では無く、我々もブリミル教の信者である。

単に思想が違っただけだ」

と返すだけ。

ロマリアは批判はするが、異端認定すべきかで揉める。

もし始祖ブリミルを信仰していないのなら即座に異端認定出来るが、あっちもブリミル教の信者である事に変わりはない。

ただロマリアを総本山と認めないだけなのだ。

しかし問題は多々ある。

6000年もの間、ブリミル教の総本山として全ての信者を統べていたというプライドがある。

それを建国して間もない国に信者を取られるのだ。

とんでもない屈辱。

更に問題なのは信者達もドイツ国教会に興味を示している事だ。

信者達がドイツ国教会に興味を持たず、あちらに改宗するのが極僅かならこちらの面目も立つ。

しかし現実は今までのブリミル教と違い、個人の良心に判断を委ねるドイツ国教会に興味を示している。

ブリミル教は永い歴史のせいなのか、様々な慣習があり、正直言って面倒な事が多い。

それにお布施や寄付をしなくてはいけないブリミル教と違い、ドイツ国教会はそれらに関しても個人の良心で決めて良い。

それにブリミル教と違って研究や開発、学問に対して特に口出ししないから貴族達も興味を示している。

つまり、ロマリアのブリミル教よりも、ドイツ国教会のブリミル教に皆興味を示しているのだ。

このままでは信者達がドイツ国教会に改宗し出すかも知れない。

そうなれば最悪、ドイツ国教会の信者の方が数が多くなり、ロマリアの発言力は著しく低下する。

今まで甘い汁を吸ってきた人間にとっては天地を揺るがす程の大事件だ。

自分達が安全だと確信していた権力基盤が初めて揺らいだのだ。

何としても阻止しようと動くのを彼等は止められなかった。

人間には決して逆らえない性なのだから。

上手くいった。

ロマリアは何かドイツ国教会を潰すべく、自分達に味方する最後の大国、ガリアにコンタクトを取っている。

恐らくドイツ帝国討伐に参加せよ。とか言ってるんだろう。

多分理由としては「恐れ多くも始祖ブリミルの子孫が建国した国を滅亡させ、更には新たな宗教まで開いたルドルフ一族を許しておけない」とかだろう。

ハッキリ言って滅茶苦茶で酔っ払いの戯言に近いのだが、相手はロマリアだ。

ジョゼフはブリミル教を何とも思っていないから無視するだろうが、今のガリア国王は普通にブリミル教徒だから無視は出来まい。

それに要請を断れば異端認定かは分からないが、何らかの面倒な事になるから乗らざるを得ない。

本当、ロマリアって災厄しか呼ばないね。

ジョゼフ暗殺に成功。

ドイツがロマリアと徹底抗戦しているため、ガリアも国外に目が行き、警備が緩くなった時があった。

まあこの一大事に明らかに継承者争いで負ける男を守りたいとは思わないからな。

派閥もジョゼフに目が行かなくなりがちになっていたので実行。

最初は自爆攻撃でもしようかと思ったが確実性が無いので止め、ジョゼフが山合の別荘に訪れた時に狙撃した。

2リーグ先の山からのアンチマテリアルライフルでの狙撃なんて想像すらしてなかっただろう。

12.7mm弾は見事ジョゼフの体に命中し、体が弾けて死んだ。

突然の出来事に護衛達は何か分からないが攻撃を受けたとして警戒

するが、2リーグ先からの攻撃何か考えられないから周辺を搜索する。

まあ、護衛達から見たら突然ジョゼフの体が弾けたように見えただろうからな。

何らかの魔法と勘違いしてもおかしくはない。

護衛達の必死の搜索にも関わらず、狙撃主は悠々と帰還し、報告した。

ジョゼフは表向きは病死と発表された。

裏ではシャルル派の誰かに暗殺されたのだろう。と皆勘違いしていた。

ジョゼフの死によってシャルルの次期国王が決定した。

シャルルは嬉しそうだったが、王は不満気だ。

ジョゼフを指名する予定だったからな。

魔法の才はあっても王としての才能は無い次男では正直不安なんだろう。

大丈夫だ。

シャルルが継ぐ前に ガリアは無くなってるだろうから。

ようやく戦闘機が完成した。

と言ってもまだ第一次大戦末期の戦間期ぐらいの機体だから実戦には使えない。

使ったとしても零戦の足手まといになるのがオチだ。

どうやらハルケギニア統一に自国製戦闘機の投入は間に合わないらしいな。

残念だが仕方ない。

わざわざリスクを犯す必要は無い。

安全策で行くべきだ。

自動小銃は何とか間に合った。

ハルケギニアの過酷な環境や技術不足の中で正常に稼働するよう A  
K - 47 を模した。

これなら平民でもやり方によるが、単独でスクエアメイジを殺す事  
も可能になった。

これでメイジの絶対的優位は無くなったな。

いよいよ本格的にメイジの凋落が始まる。

6000 年も惰性で生きてきたんだ。

これからの早い時代に着いてこれるかな？

着いてこれないなら置いていかれるか排除されるだけだが。

## 20 ドイツ、ロマリア宗教改革戦争

ドイツ国教会設立から1年。

俺は21になった。

やはりロマリアはガリアを味方につけ、戦争準備を始めた。

ガリアとしてはドイツとの戦争は好ましく無いのだが、ロマリアからの命令に仕方なく従う。

今年、とうとうガリアも鉄鋼船、シャルル級戦艦を完成させた。

しかしやはり技術不足からか、ドイツの戦艦に遥かに劣る戦艦しか完成しなかった。

ドイツは三笠級から金剛級戦艦に昇格させたというのに、ガリアのシャルル級戦艦は精々初代扶桑級戦艦クラスだ。

確かに木造船から鉄鋼船に変えられたのは凄まじい偉業と言える。

それに砲弾はまだ球形弾だが、大砲にライフリングを削り、射程を伸ばした新型大砲も開発して搭載している。

旧ハルケギニアなら十分天下が取れる程の戦艦だ。

しかし艦数が少な過ぎた。

ドイツは金剛級をコピーして艦隊のほとんどを占めているというのに対し、ガリアは資金と時間不足から1隻しか完成していない。

2隻目は現在建造中である。

何故時間がかかるかというと、ドイツは工業的に建造しているが、ガリアには工作機械も無いから大半の作業はメイジがやっている。蒸気機関も無いガリアでは全ての作業を手作業でやるしかないのだ。大量の鉄を生産するには高レベルの土メイジ達が練金で何とか作り、

簡易クレーンで吊り上げられない重い鋼材は風メイジ達が風で浮き上がらせる。

溶接技術が乏しいので溶接は全て火のメイジ達が行う。

このように1隻建造するのに莫大な数のマンパワーを動員してようやく完成するのだ。

とてもじゃないが量産など不可能だ。

だから艦隊の大半のフネは木造船のままで、鉄の装甲を張ったり、ライフリングを削った大砲を搭載するなどの改修をしている。

しかしライフリングを削るのは高度な技術を必要とするので搭載している艦は少ない。

主力艦隊以外はほとんど何も変わってない状態だ。

一見すると不完全に見えるが、僅か数年でここまで進歩したガリアの発展スピードは凄まじい。

ロマリアからの援助があつたとは言え、数年でここまで出来るのはドイツを除けばガリア以外では不可能だった筈だ。

しかし何度も言うが相手が悪すぎた。

金剛級の訓練が終了し、実戦投入可能レベルになったと同時にドイツ帝国皇帝、ボリス・フォン・ルドルフは国民の前で演説した。

「我々が新たな一步を歩み出そうとしているのに、それを邪魔する者がいる。

それは何か？

……そう、ロマリアだ!!!

ロマリアは我が国に対し、まるで自分達こそが支配者だと言わんばかりに命令してくる!!!

我が国が旧トリスティン、アルビオンを滅ぼすと復活させよと命じ、我が国が新たに兵器を開発すればそれを提出せよと命じてくる!!!

…確かに6000年にも渡りブリミル教を広め、信者達を導いてきたのは素直に尊敬しよう。

だから私も初めの内は尊重し、出来る限りは従ってきた。

…しかし、今のロマリアをブリミル教の総本山と言うべきか!?!?  
否!?!?

大半の信者達は餓えに苦しみ、1日を生きるのに精一杯だと言うのに!?!?

ロマリアは信者達から寄付やお布施として巻き上げた金で装飾品を買い、豪勢な食事をする豪遊三昧!!!

諸君らはロマリアを直接見たことはあるだろうか?

私は見た!?!?

ブリミル教総本山で光の国とまで言われているのにも関わらず、街には失業者や浮浪者が横たわり、まだ幼い子供さえも物乞いをして  
いる始末!?!?

そしてその横を豪勢な装飾品を身につけた神官達が歩いていた!?!?  
これが今のロマリアだ!?!?

我々ブリミル教徒を正しく導く存在の筈が、今では逆に我々信者達  
を踏みにじっている!?!?

こんな事を許して良いのか!?!?

否!?!? 断じて否だ!?!?

ロマリアは恐れ多くも始祖ブリミルの御名を利用し、我々信者達か  
ら金を貪り、我々を苦しめている!?!?

奴等を裁かねばならない!?!?

奴等肥え太った豚共を裁き、真に正しいブリミル教を取り戻さなく  
てはならない!?!?

従って、ドイツ帝国は宗教国家ロマリアに対し宣戦布告する!?!?  
更に、ロマリアに付き従いし者全てにも宣戦布告する!?!?

正義は我等にあり、ブリミル教を取り戻すのだ!?!?

演説終了後、しばらく民衆は叫び続けた。

「我々のブリミル教を取り戻すのだ!!」

「傲慢なるロマリアを滅ぼす!!」

などなど、今までロマリアに対して溜まっていた鬱憤が爆発したのか、民衆は叫び続ける。

そしてこの演説をドイツ全土の新聞に掲載し、ロマリアとの戦争を告げる。

年長者はロマリアとの戦争に不安がるが、ドイツ支配によって洗脳教育を受けた世代はロマリア討つべしと叫ぶ。

反ロマリア感情を育てるために長年育成していたため、若い世代はロマリアを滅ぼすのを躊躇わない。

## ロマリアサイド

ドイツに比べロマリア国内は大混乱だ。

何せブリミル教総本山であるロマリアが攻められるなど考えもしなかったからだ。

教皇は直ぐ様ドイツを批判し、宣戦布告し返す。

そしてドイツ帝国に対して異端認定をし、ガリアに対してドイツに宣戦布告せよ。と命じた。

ガリアとしても間もなく戦争になると準備していたが、まだ鉄鋼船が1隻しか完成してない今戦いたくは無かった。

しかしドイツも「ロマリアに付き従う者にも宣戦布告する」と声明しているので間違いなくこちらも攻めてくる筈。仕方がないのでガリアもドイツに宣戦布告した。

こうしてハルケギニア史上初のブリミル教同士の宗教戦争の幕が

開けた。

どちらが勝っても確実にブリミル教が変わる。

例えばドイツが負けたとしても前例が出来るから必ず第2、第3の宗教戦争が起こるだろう。

## 21 ガリア決戦

宣戦布告をした翌日、ドイツ軍はガリアへ侵攻した。

何故1日待ったかと言うと、敵にある程度準備させるためだ。

ガリアの国土は広大で、もし敵を逃がすとゲリラ化されて討伐するのが面倒なので、わざわざ侵攻を遅らせて集結するのを待ったのだ。ガリアも数年前からドイツとの戦争を予期してたので、何時でも戦えるよう準備していた。

1日あれば少なくとも艦隊を出撃させる事は出来る筈だ。

総勢150隻の大艦隊でガリアを目指していると、前方から200隻程の大艦隊が現れた。

ガリアの両用艦隊だ。

前方には旧来通りの木造船隊で、最後方にはガリアご自慢の鉄鋼船、シャルル級戦艦が待っている。

やはり大事な大事な虎の子だからいきなりは出さないらしい。

まるで大和級戦艦みたいだな。

戦艦は戦わなきゃ意味無いのに。

何時もなら大体5リーグくらい近付いて砲撃を始めるのだが、あつちも大砲にライフリングを刻んで飛距離を伸ばしているから念には念を込めて10リーグ離れた位置から砲撃を始めた。

ガリアサイド

ガリア艦隊ではそんなに悲観的な雰囲気は無かった。

何故なら前方にいるフネは最新型大砲を搭載しているし、後方にはガリア初の鉄鋼船、シャルル級戦艦が待っているのだ。

相手は鉄鋼船で固めた艦隊だから負ける可能性の方が高いが、今までのような惨敗を喫する事はないだろう。

そう考えるガリア軍人は多かった。

今までドイツ以外は建造不可能と言われていた鉄鋼船を自国は建造出来た。

やはりガリアは偉大な国なのだと愛国心をえらく刺激されたのだ。

ガリア艦隊がドイツ艦隊を待ち構えていると、前方から黒い点々が見え、そしてその黒点が見えてきた。

ドイツ艦隊だ。

…しかし何かが違う。

事前に教えられたドイツ艦隊と何かが違う。

ドイツ艦隊が鉄鋼船だと言うのは当たっている。

これは今では誰でも知っているので重要では無い。

では何が重要なのかと言うと、その大きさだ。

ドイツのフネは130メートル程の大きさの筈だ。

しかし今見えるフネは200メートルは越えている。

それにあのバカデカイ砲の数も2基から4基に増えている。

「まさか新型艦か!？」

周囲も騒ぎ始めた。

それは当たり前だろう。

何せ自分達がやつの事で鉄鋼船を建造したというのに、敵はもう最新型を建造している。

これでは追い付ける筈は無い。

全員が呆然としてしていると敵が発砲してきた。

まだ敵との距離は10リーグはある。

普通なら届く筈は無いと思うが、相手はドイツ艦艇

「まさか……」

と呟いた瞬間、その予想は裏切られず、見事前方の艦隊に命中した。一応木造船は鉄の装甲を張っていたのだが、それらは全て正に紙みに破られた。

「そんなバカな……10リーグも離れてるのに……」

ドイツ艦隊の並外れた長射程砲撃は有名だが、それはどれも既存の大砲の2倍程度だ。

だからこちらもライフリングを刻んだ最新型の大砲を持ってきた。これで4リーグぐらいは飛ぶから同等程度の戦いが出来ると思ったのだが、敵はそのナナメ上を行っていた。

「畜生ッ！！このままじゃ全滅だ！！」

一方的にやられ続けていると後方から声が聞こえた。

「シャルル級戦艦が出たぞ！！」

期待に染まった声がした。

後ろを振り返ると、シャルル級戦艦が後方から上がってきた。

「鉄鋼船のシャルル級戦艦なら榴弾砲に耐えられる筈だ！！」

全員が希望を見つけたという目を向ける。

しかし不安もある。

シャルル級戦艦の搭載している大砲は前方部隊と同じ射程の4リーグ。

一方敵の大砲は少なくとも10リーグ以上の射程を持つ。有効射程に到達する前に落とされるのでは？

その不安は的中した。

敵の砲弾がシャルル級に命中した。

「ああ、シャルル級が！！」

全員がやはりダメか？という思いになったが、それは直ぐに歓声

に変わった。

シャルル級は金剛級の35・6cm榴弾砲に耐えた。

艦橋は酷く損壊し、マストも折れたが、シャルル級はまだ飛んでいた。

「おお、やはり鉄鋼船は榴弾では落ちない！！」

見た目既に廃艦だが、ドイツ軍の砲撃を受けて生き延びた事が初めてなのでガリア軍のテンションはマックスになった。

そして同時に、ドイツ軍の砲撃が止んだ。

「見る！！ ドイツ軍の奴等自分達の大砲で沈まない船がいてビビってやがる！！」

ガリア軍は一斉に笑い出す。

状況はまるで変わってないというのに、テンションだけは最高潮だった。

## ドイツサイド

一方、ドイツ側も確かに驚きはしたが、敵にも鉄鋼船がいるのは既に知っていたので直ぐに冷静になり

「弾種、鉄甲弾に変更！！」

その命令が発令され、速やかに榴弾から鉄甲弾に変え、フラフラになりながらも近付いてくるシャルル級に向かって発射した。

そしてその砲弾は見事シャルル級に命中、そのご自慢の装甲を軽々と撃ち抜いた。

鉄甲弾が弾薬庫を直撃したらしく、激しい爆発を起こしながらシャルル級は地上へと落ちていった。

「弾種、榴弾に変更！！」

再び榴弾に変えろと命じられたので榴弾に変え、また再び殲滅戦を始める。

## ガリアサイド

シャルル級の落ちていく光景を見ながらガリア軍は絶望する。

中には信じられないと甲板に頭を打ち付ける者や、失神してしまう者もいた。

それだけ信じられない、いや、信じたくない光景なのだ。

今まで一方的にやられるだけで、ようやく敵の砲弾に耐えられる艦を建造したというのに、意図も容易く落とされた。

「……何を発射したんだ……？」

彼らには分らない。

初めの榴弾砲は耐えられたのに、次の砲弾によってシャルル級の装甲を貫通し、更には大爆発を起こした。

あんな恐ろしい砲弾が存在するのか？ と錯乱状態に陥る兵もいる。大爆発は弾薬庫の火薬が引火しただけで砲弾は関係無いのだが、そんなことは知らないガリア軍は砲弾のせいだと信じていた。

シャルル級の大爆発を見たガリア艦隊は勝機は無いと判断し、撤退を開始した。

しかし撤退という事はドイツ艦隊に背を向けるということ。

しかも今まで撃たれながらも距離を詰めるために近付いていたのでドイツ艦隊にとっては良い的だった。

逃げるガリア艦隊をドイツ艦隊が追撃し、次々ガリア艦は落ちていく。

そしてフネが落ちれば乗っていた人間も落ちていく。

その光景は某有名なアニメのある場面そっくりだった。

「人がまるでゴミのようだ……」

ドイツ艦隊の司令長官はそっと呟いた。

空海軍が艦隊決戦をしている間に、陸軍もガリア国内に侵攻した。ガリア軍は先ずは竜やグリフォン、ガーゴイルで防衛しようとしたが、それらは全て護衛についていた零戦隊に駆逐された。

陸上戦においてもドイツ軍の遠距離からの砲撃、ロケット攻撃にガリア軍は壊滅。

バラバラに散って逃げる者は零戦の機銃掃射で大半は死に、微かに生き残った兵士達は軍服を脱いで逃げる。心を折られた彼らは二度と戦えないだろう。

ドイツ軍は線路を引き、道路を整備して補給路を確保しながらどんどん進軍する。

途中、鉄鋼船建造などの軍拡によって急激に増税され、餓えに苦しむ村々があつたので食糧を分け与える。後の戦後支配のためには必要な措置だ。

補給は途切れる事なく届くので進軍に影響は少ない。

ドイツ軍は補給路確保と防衛に並々ならぬ力を注いでいる。防衛のために武装した兵士が列車に乗ってるし、上空には零戦がついている。

たまにガリア軍や山賊が物資欲しさに襲撃してくるが、零戦に機銃掃射されたり、武装兵士に射殺されて終わっている。

ドイツ軍はどんどん進軍を続ける。

ガリアの首都リュティスを目指して。

ガリアが滅びれば後は簡単だ。

ロマリアにはロクな戦力は無いからな。

精々あってもメイジ達の斉唱魔法ぐらいだ。

もしかしたら場違いな工芸品を使うのかも知れないが、数が少ないし、精々使えるのは銃ぐらいだ。

もしタイガー戦車が現れたらかなり厄介だが、流石に操作する技術は無い筈だ。

## 22 ロマリア崩壊

ロマリア教皇ジョヴァンニは立ち上がりながら叫ぶ。

「ガリアが決戦で負けただと!？」

「はい、ガリアは新型艦であるシャルル級戦艦も動員して総勢200隻以上の大艦隊で決戦を挑みましたが、ドイツ軍の艦隊に敗北。ほとんどの艦艇は撃墜され、生き残った艦は僅かです」  
教皇は枢機卿の報告を聞いて席に座り込む。

「……それで、現在の戦況は？」

「決戦に勝利したドイツ艦隊はそのまま進軍し、現在は首都リュテイスを砲撃中です。」

ドイツ陸軍も侵攻し次々とガリア領を占領、間もなく首都に到達するでしょう」

それを聞いて教皇は項垂れる。

既にガリアの敗北は決定的だ。

そこからいきなり逆転するなんてあり得ない。

「……ドイツ国内での暴動はあったか？」

「さすがに枢機卿に聞く。」

もしドイツ国内でロマリアに対して宣戦布告したことに対する抗議活動があるのならその勢力を利用して何とか出来るかも知れない。

しかし現実はいつもの「こんな筈じゃ無かった」だ。

「……いいえ、今のところロマリア討伐についての抗議活動は皆無です。」

極々少数はロマリアを討つ事に不安を持っているようですが、圧倒的多数はロマリア討つべし。と言っています。

おかげで少数派は何もしないようです」

希望は潰えた。

もしかしたらという希望すらロマリアは持つことさえ許されなかつ

た。

「……何故ですか始祖ブリミル…。

我々は何時でも貴方に忠誠を誓い、教えを守ってきました。

……なのに何故我々が裁かれ、劣勢に立たされるのですか？」

教皇はブリミルの銅像に向かって尋ねる。

しかし銅像何も返しては来ない。

教皇と枢機卿はロマリアの終わりをハッキリと感じ取った。

ドイツサイド

ガリアを敗北寸前に追い込んだので遂にドイツ軍は宗教国家ロマリアに侵攻した。

建国以来、一度も他国に侵攻された経験が無いロマリア国内はパニックだ。

防衛として僅かな竜等の航空部隊を派遣したが全て零戦や対空機銃によって落とされた。

ドイツ陸軍は進撃を始めた。

この宗教戦争には初めて戦車が動員された。

何故ならようやく使えそうな戦車を開発したからだ。

新型戦車のBT-7戦車がロマリアの地を蹂躪する。

ロマリア軍もこれ以上の進軍を阻止すべく攻撃するが、北郷が硬化や固定化の魔法を何十にも重ねがけた戦車には通用する訳はなく、ハネ返された。

そして攻撃してきたメイジに対して7.62mm機銃や45mm砲が与えられた。

その他の戦地でも榴弾砲やロケット砲等の遠距離砲撃や歩兵の機関

銃や迫撃砲、自動小銃の攻撃でロマリアは次々敗走していく。

楽勝だとドイツ軍兵士達が侮った瞬間、信じられない攻撃を受けた。何といきなり横から自動小銃の連射を受けたのだ。

「だ、誰が撃っている!？」

「こっちは味方だ!！」

自動小銃を所持しているのは自分達だけだから味方の誤射だと思った。

しかし射手を見るとロマリア軍の兵士だった。

「何故ロマリアが自動小銃を持つてる!？」

鹵獲されたのか!？」

混乱しながらも撃ち返し、何とか仕留めた。

射手の死体から自動小銃を取り上げてみたら自分達が持っている自動小銃と何かが違う。

銃の形はソックリだが、書いてある文字が違う。

自分達の持っている銃にはハルケギニアの共通語が書いてあるが、その銃の文字は見たこと無かった。

これは何だ? と考えるが彼らは場違いな工芸品を知らないので悩むだけ。

最終的な結論はロマリアがドイツ軍の自動小銃をコピーしたんだろう。だった。

この他にもロマリアは微かに使用方法が分かった場違いな工芸品を次々投入する。

しかしロマリア、いやドイツ以外のハルケギニア人では現代のような複雑な兵器は操作出来ず、単純な物に限った。

例えばさっきの自動小銃や拳銃、機関銃等。

今まで集めた物の中には装甲車や最新式戦車もあるが、運転出来なかったり、ガス欠で動かない。

しかし、使えるからと言ってそれで戦況が覆る訳では無い。

ドイツ軍だつて同様の兵器を有しているのだから応戦出来るし、ドイツ軍はいくらでも弾薬を補給出来るが、ロマリア側は弾装に入っている弾しかないから直ぐに弾切れになる。  
だから戦況に変わりは無かった。

そんなロマリアの圧倒的不利を吹き飛ばす存在が現れた。

「な、戦車だど!？」

進軍を続けるドイツ軍の戦車隊の前に戦車が現れた。

「何だあの戦車は!？」

見たこと無いぞ!？」

そう、ドイツ軍にも戦車はある。

しかし前方にいるのは自分が乗っているBT-7戦車より巨大で砲も遙かにデカイ。

「……何だか分かんが、敵には変わりは無い!!  
撃て!!」

指揮官は各車に命令した。

その命令通りにドイツ軍戦車の45mm砲を発射した。

45mm砲は敵戦車に命中したが、敵戦車は砲弾を弾き、全くの無傷だった。

「なっ……何故!？」

自分達の砲撃が全く通用しないのが理解出来なかった。

しかしそれは当たり前だった。

何故なら彼らの目の前にいる戦車はタイガー戦車。

前面装甲100mm(防盾206mm)、側面は80mmもある。

BT-7戦車の45mm砲で撃ち抜ける筈は無かった。

しかしそんな事を知らない彼らはこんな事は建国初めてだったので混乱してしまうのも無理は無い。

しかし彼らは直ぐに立ち直った。

何故なら自分達が砲撃したのだから敵も砲撃してくる筈だ。

そのバカデカイ砲からの砲撃なら恐らく自分達の戦車は負けるだろう。

しかし撤退命令が出てないので逃げられない。  
逃げれば脱走兵扱いで射殺される。

だから敵からの砲撃を待つしか無かった。

しかし幾ら待っても敵からの砲撃が無い。

「？ 弾切れか？」

指揮官は双眼鏡で敵を覗く。

そこには何かは分らないが慌てている敵がいた。

実はロマリアはタイガー戦車を出すまでは成功したのだが、砲を撃つ方法が分からない。

そのため敵の砲弾を防いだのは良いのだが、どうすれば攻撃出来るのか混乱していた。

そんな事は知らないドイツ軍指揮官は何らかのトラブルが起きたと判断した。

「おい、今がチャンスだ。

零戦を爆装して攻撃させろ」

指揮官は一番近くの前線飛行場に命令した。

命令から少しすると、命令通り50kg爆弾2発を装備した零戦が飛んで来た。

爆装した零戦が来たので念のためにドイツ軍は多少下がる。

それを見た零戦は降下し、爆撃体制を取り、タイガー戦車に向かって50kg爆弾2発を投下した。

投下された50kg爆弾は狙い違わずタイガー戦車に命中、いくら装甲が厚いタイガー戦車でも50kg爆弾2発を耐えられる筈はなく、砲塔は曲がり、履帯が切れて攻撃も移動も不可能になった。

それどころか戦車内にいたどうしたら良いか混乱していたロマリア兵達も死んだ。

このようにロマリアが場違いな工芸品を投入したおかげで戦線が一時的に停止したりはするが、戦況が覆る筈は無かった。

ドイツ軍はロマリア領内を次々占領していく。

ガリア同様、ロマリアも間もなく陥落するだろう。

しかし一部の部隊は別の動きをしていた。

その部隊とはゲーレン機関の人間で固められた部隊だ。

彼らは真の最高司令官であるハンス・フォン・ルドルフからある至上命令を出されていた。

それとはロマリアの司祭、ヴィットーリオ・セレヴァレの確保だ。

数年後には教皇に即位するヴィットーリオだが、今はまだ虚無の円鏡を手に入れて無いので完全には虚無に目覚めていない。

戦争の混乱に乗じて戦前にヴィットーリオがいた所やいそうな所をしらみ潰しに搜索する。

彼らは疲れる事も飽きる事も無いので見つかるまで搜索は続けられるだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6834x/>

---

ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

2011年11月8日20時04分発行